魔法先生ネギま project in TOHO

水崎雨月

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

千の呪文の男（サウザンドマスター）にその息子、ネギ・スプリングフィールド。さらに完全なる世界（コズモエンテレケイア）の残党。魔法世界の変化に幻想郷の影響を恐れた妖怪の賢者は、博麗霊夢、霧雨魔理沙を麻帆良学園に送り込む。

更新遅いと思いますが、完結目指します。

地の文の練習でもあるので、文章がおかしかったり、もっと良い書き方があるならば感想欄などで教えてください。

目次

10年前の闘い　1
3―Aと報告　8
修学旅行　15
新幹線でケロケロパニック　23
修学旅行1日目　28
修学旅行2日目　45
修学旅行3日目　朝～夜　59
修学旅行3日目　夜①　71
修学旅行3日目　夜②　85
修学旅行3日目　夜③　95
修学旅行4日目～5日目　102
パチュリーの思い出　109
帰ってきて　113
初めての海　117
エヴァンジェリンの別荘　124
伯爵と魔界のメイド　133
伯爵との闘い　140
闘いの終結　150
始まりの密会　158
学園祭の準備開始　161
学園祭準備①　166
悪霊相坂さよ退治　172
あの日の密会　179
学園祭準備②　184

学園祭初日　仕事 ―― 190
千の呪文の男と動かない大図書館 ―― 202
激闘　予選会 ―― 212
学園祭初日終了 ―― 219
魔帆良武闘大会　1回戦 ―― 225
霊夢ＶＳクウネル ―― 234

１０年前の闘い

１０年前。イスタンブール。
「『千（キーリプル・アストラペー）の　雷』」
赤髪の青年が言葉により魔法が発動する。
文字通りの千ものの雷が、黒衣のローブを着た少年に降り注がれる。
そこにさらに、
「『闇（ニウイス・テンペスタース・オブスクランス）の　吹　雪』」
長い紫髪の先をリボンでまとめ、紫と薄紫の縦じまが入った、ゆったりとした服を着用した少女が右手を黒衣のローブに向けて呪文を唱える。
闇をまとった吹雪が一直線に向かい、千の雷とほぼ同時に黒衣のローブに到達する。
「やったか」
「フラグ建てないで」
２つの強大な魔法によって視界が悪くなっており、黒衣のローブがどうなったのかわからない。
「ほぼ直撃でしょう。パチュリー、そろそろ封印の準備を」
「そうね」
魔法使い風のローブをまとった長髪の美青年が紫髪の少女、パチュリーに声をかけ、封印の準備を開始する。
「できることなら、彼女だけを封印したいのだけど」
「私もできるならばその方が良いです。しかし、現実的に見るならば」
「わかってるわよ。ゼクトの精神は、もう……」
パチュリーが悲しげな表情をした直後。
そこに、一閃の光が飛んできて、美青年に突き刺さる。
それは、雷の槍。それが体を貫いていた。
「なっ!?」
「アル!!」
美青年、アルビレオ・イマは不意を着かれた攻撃に驚き、パチュリー

が名を叫ぶ。
「パチュリー！」
赤髪の青年の叫びを聞いて、すぐさま最強防護（クラティステー・アイギス）を発動。数多の魔法障壁が前方に発動して、次々飛来する槍を防ぐ。
パチュリーがアルビレオの方を見ると、その体が消え始め、一冊の本となる。パチュリーはそれをすぐさま回収。そして、次に来るであろう攻撃に備えて、２人とも後ろに下がった、その瞬間。
まるで爆発のように、放射状に広がる黒衣のローブの攻撃に、数多に作った魔法障壁が砕け散る。
２人は覚えていた。１０年前に戦ったときも同じように、最強防護（クラティステー・アイギス）が砕かれ、自分も含め、皆がそれにやられたことを。
「『最強防護（クラティステー・アイギス）』二重起動」
だから、後ろに下がり、２つの障壁をさらに張って防ぎきる。
「パチュリー、援護頼む」
攻撃が収まると同時に赤髪の青年が突撃する。
「この古本を起こしたらね」
手に持っている本をバシッと叩く。
「いやぁ、油断しました」
アルビレオの声が本から聞こえてくる。
「早く復帰しなさい」
「地球（こちら）での実体化は疲れるのですが……」
「知るか。やれ」
「やれやれ」
パチュリーが本を投げると、本が消え、傷ひとつないアルビレオ・イマが現れる
「あんたね。このままだとどっちの世界も終わっちゃうわよ」
「わかっていますとも」
「『賢者の石』」
パチュリーの言葉と同時に5つの石が表れ、パチュリーの回りに浮かんでいる。
「今日は喘息の調子良さそうですね」

「ええ。さぁ、行くわよ」
赤髪の青年は一人で黒衣のローブと戦っている。
赤髪の青年が殴り、そして、持っている杖が雷を纏い、槍の形になると、それで斬りかかったりしている。
アルビレオとパチュリーは高速移動術、瞬動術で近づいていき、パチュリーだけは一度中間で止まり呪文を唱え始める。
「セブンス・マイ・マジックスキル・マギステル
契約に従い（ト・シュンボライオン）・我（ディアー）に従（コネートー・モイ）え・炎（ホ・テュラネ）の覇王（フロゴス）。
来（エピゲネーテートー）れ・浄化（フロクス・カタルセオース）の炎（ピュール・カイ）・燃え盛（フロギネー・ロンファイア）る大剣（テイオン ハ・エペフレゴン・ソドマ）。
ほとばしれよ（レウサン トーン）・ソドムを焼きし（ハマル トートゥス）火と硫黄・罪ありし者を・
死（エイス）の塵（クーン・タナトゥ）に」
アルビレオは黒く丸いものが掌に作る。そして、それを黒衣のローブに叩きつける。その瞬間に、赤髪の青年が雷の斧を魔法で作り、叩きつける。
「避けなさい！『燃える天空（ウーラニア・フロゴーシス）』!!!」
熱線が一直線に黒衣のローブへと、大気を燃やして突き進む。
一瞬という時間で一気に周辺を燃やし尽くす広範囲焚焼殲滅魔法。普通ならば仲間の2人も巻き込まれるが、
アルビレオは転移魔法を用意。赤髪の青年とアルビレオの足元に魔法陣ができて、パチュリーの近くに一瞬で移動する。
「これで決まってくれればいいんだけど」
「そういうわけにはいかないでしょうねぇ」
煙により視界が悪いが、巨大な何重にも重なった魔法陣が黒衣のローブから広がった。
「まだダメなの!?」
「だろうな……」
パチュリーは驚き、赤髪の青年は当然といった風につぶやく。
そこに、魔法陣から真っ黒な魔法の砲撃が何本も放たれる。
「へっ。まどろっこしい！」
「ちょっ。ナギ!?」
それを見て、赤髪の青年。パチュリーにナギと呼ばれた青年はその

砲撃に向かって突進するかのように突っ込む。そのままナギは魔法障壁で前方を守りながら砲撃を防いで最短のルートで一気に近づいていく。
「あの脳筋め」
とにかく、こっちに来る攻撃は回避か防がなければならないので、魔法障壁で真っ黒な砲撃を防ぐパチュリー。
「フハハハ。私を倒したところで無駄なことは理解しただろう、人間どもよ」
黒衣のローブが話しかけてくる。
「うるせぇぇぇ！」
ナギが魔力のこもった右拳でぶん殴る。
「10年前も言っただろうが！」
ものすごい速度で何度も何度も殴るナギ。ローブが端からどんどん消し飛んでて、攻撃が当たっているのがわかる。
「明日世界が滅ぶとしても、あきらめぇのが人間ってモンだろうがッ。ってなぁ!!!」
「それならば私も言ったはずだ。私の語る『永遠』こそが、『全て』の『魂』を救い得る唯一の次善解だと」
先ほどと同じ魔法陣が1つ、黒衣のローブの目の前にでき、ナギに向かって砲撃を放とうとする。
「『雷（ヤクラーティオー・フルゴーリス）の投擲』」
パチュリーが雷の槍を作り出してそれを放つと、黒い魔力の塊ごと、黒衣のローブに突き刺さる。それによって砲撃の魔力が消えてしまう。
「あのね、あんまり」
「人間を!!」
再び杖が雷を纏って槍の形となる。
「なめんじゃねぇぇぇぇぇー!!!」
その言葉と同時に、槍が黒衣のローブのど真ん中に突き刺し、そして、槍を中心に爆発したかのように、黒衣のローブの体が吹き飛ばした。

「やった、って違う！　ナギ！　急いでこっちに」
パチュリーが最初は喜ぶがナギに急いでそこから離れるように伝える。
しかし、
「パチュリー！　俺ごと封印しろ！」
「はぁ!?　あんた何言って」
黒衣のローブがナギの体を覆っていく。
「パチュリー！　今しかありません。絶好の機会です」
その光景を見て、アルビレオがパチュリーに声をかける。
「でも！」
仲間を、友を、永久に封印するしか解決がないのは、パチュリーもわかっている。でも、最後の決意がつかない。
「ナギとゼクト殿の犠牲を無駄にしてはいけません。早く」
「くっ。ごめんなさい。ナギ」
右手を向ける。
「セブンス・マイ・マジックスキル・マギステル」
呪文を唱える。
ナギの表情が苦痛に満ちていて、どんどん黒衣のローブがその体を覆っていく。
「永劫氷結」
氷の檻に、黒衣のローブに包まれてしまったナギを封じる。
「ごめんなさい、ナギ」
「パチュリー。諦める必要はありません」
「そう、ね。時間はあるわ。何をしてでも」
氷包まれたナギをにらむように見るパチュリー。

１０年後。
図書館のような大量に本がある薄暗い部屋でパチュリー・ノーレッジは目を覚ます。
見た目は１０年前と全く変わっていない。変わっているとすれば、

視力が落ちてしまったのか、物を見るために目を無意識に若干細めてしまい、それによってわずかな差だが、目つきが鋭くなっているぐらいだ。
「……ずいぶんと懐かしい夢を見たわね……」
『捨食の術』という、睡眠と食事が不要となる魔法を何十年も前に習得していて、寝る必要のないパチュリーだが、何を血迷ったのか、今回はソファーで寝てしまった。すると、久しぶりに自分の過去の記憶を夢として見てしまった。
「……。レミィ。何の用？」
眠そうな目で後ろを向くと、そこには背中に蝙蝠の翼を付けた少女がいた。
「咲夜から連絡があったのさ。パチェが久しぶりに寝ていて、ナギ、ナギって寝言言っているって」
「……そう」
ソファーから降りて軽く体を伸ばす。
「しかし、ナギとは懐かしい名を聞いたな」
「そうね。私も久しぶりに見た夢だったわ」
やけに上機嫌の少女、レミリアを見てパチュリーは首をかしげる。
「どうしたのよ」
「いやいや。これはまさに運命だと思ってな」
「私とナギはそういう関係じゃ――」
「そうじゃない」
パチュリーが否定しようとしたことを勘違いだと言ってくるレミリア。
「これから動き出すぞ。止まっていた歴史が。私の直感だがな」
「……」
無言でレミリアを見るパチュリー。
「証拠が必要か？　どうやら、隙間妖怪が動き出しているようだぞ」
「……わかったわ。情報ありがとう、レミィ」
机に乱雑に置かれている本に指を向けると、本が浮かびだし、バラバラに飛んで行って本棚へと片付かれていく。

「パチェ。行くときは私も連れて行ってくれ。弾幕ごっこも楽しいから別にいいんだが、たまには本当の闘いも、な」
「連れていける日ならば、ね」

次の日。
日本、とある学校の校舎内。
「では、名を教えてもらっても良いかの？」
異様に後頭部が長い白いひげを蓄えたおじいさんが目の前の２人に声をかける。
２人は、真新しいこの学校の女子中学校の制服を着ていて、
「博麗霊夢よ」
「霧雨魔理沙だぜ」
黒髪の少女が気だるそうに答えて、金髪の少女が元気に名乗る。

3―Aと報告

中等部3―A組教室
教壇に立つのは、スーツを着て、小さなメガネをつけた赤い髪の少年。
この教室の担任で、子供先生と呼ばれるイギリス出身の天才少年、ネギ・スプリングフィールドは、教壇からクラスを見渡す。そこにいるのは、中学3年になったばかりの少女たち。
「皆さん、すでにわかっていると思いますが、転校生が2人います」
クラスの女生徒の半分ほどが立ち上がったりしてテンション高めで喜ぶ。
「それでは、どうぞ」
ネギの声に制服姿の霊夢と魔理沙が部屋に入ってくる。さすがに制服姿だからか、魔理沙はいつもかぶっている黒のとんがり帽子をかぶっていない。霊夢はいつものようにリボンで髪を縛っている。
「それでは、名前を黒板のほうに」
ネギの言葉で霊夢と魔理沙は黒板のほうを見て、
「これ、どうやって書くの？」
手で黒板をトントン叩く。
「そのチョークを使ってください」
「これ？」
つまむように白いチョークを持つ霊夢。
魔理沙はぱっぱとすぐに自分の名前を書き始める。
霊夢もすぐにまねをして書く。
「博麗霊夢よ。ま、よろしく」
「霧雨魔理沙だぜ」
『よろしくーー』
クラスの半分ほどが大声で言う。
「お2人は一番後ろの席でお願いします。では、1限目は英語ですね」
結果として、霊夢が英語で四苦八苦して、魔理沙は魔導書を常日頃読んでいたため、英語は特に問題なく終わった。

「英語とかわけわからない」
「まぁ、しょうがない。私が1から教えてやるよ」
その言葉に霊夢がめんどくさそうな表情をする。
「博麗さん。よろしければ今日の夜に僕が1対1でお教えしましょうか」
授業が終わったばかりのネギが霊夢の席に近づいて提案してくる。
「それはありがたいけど、先生の負担になるでしょ？」
「大丈夫ですよ。よくアスナさんに教えていますし」
その言葉に金髪の美女が勢いよく立ち上がった。
「ね、ネギ先生の個人講習!?」
ものすごい形相に霊夢と魔理沙は驚き。
「アスナさん！　あなたはそんなうらやま――。いえ、先生の負担になることをしているのですか！」
金髪の美女、このクラスのいいんちょ、雪広あやかがオレンジ髪のツインテールの少女、神楽坂明日菜に詰め寄る。
「うっさいわね。仕方がないでしょ」
「あなたが勉強できればそんなことには」
アスナといいんちょが言い合いをしていると、唐突にやめて霊夢の席に近づいてきて、ネギに、
「ネギ先生。私(わたくし)にも、個人授業を」
「あ、いえ。まずは博麗さんに教えないと」
「私(わたくし)も一緒に教えますわ」
「いや、いいわよ。先生だけでいいわ」
こんな騒がしい人が来たらやかましくてしょうがない、と考えた霊夢が丁重に断るが、
「博麗さん。まさかあなたも……」
ギロリ、と霊夢をにらむいいんちょ。
「何言ってるかわからないけど。ただ英語を教わるだけよ」
ため息交じりの言葉にいいんちょは笑顔で、
「ええ、ええ。そうですわよね。でしたらいいのですが」
牽制するかのようなことを言う。

それを聞いて、霊夢は何この人、という感じで訝しんでいる。
「では、今日の夜に博麗さんの部屋に行きますね」
「悪いわね」
「大丈夫ですよ、それでは」
ネギはそういうとチャイムが鳴り、急いで教室から出る。
霊夢は何か変な雰囲気が部屋に蔓延しているような、そんな嫌な予感を感じながら次の授業を始める。
一番後ろの席から、他のクラスメイトを見ながら。

その日の夜。
「それでは、また明日ですね。おやすみなさい」
ネギが霊夢の部屋から出る。
「はぁー。疲れたわ」
「おつかれだな」
霊夢は部屋の真ん中に置いてある丸テーブルに倒れ伏せる。開きっぱなしのノートや教科書を手で押しながら倒れ伏せたので、ノートと教科書が丸テーブルの反対側から床に落ちる。
「本当に難しいわ」
「まぁ、ネギの教え方はかなりうまいからな。コツさえわかれば何とかなるぜ」
「確かに教え方はうまいわね。私たちより年下なのに」
霊夢はそういうと立ち上がり、
「ちょっと外の空気吸ってくるわ」
「おう」
魔理沙は霊夢が落としたノートと教科書を拾いながら返事を返す。
霊夢は外に出ると、空を飛んで屋根の上に行く。そして、
「生徒たちを観察したけど、ほとんどが普通の子たちよ」
空を眺めながら腕を組んでそんなことを言い出す。
「出席番号1番の相坂さよは地縛霊ね。私でも意識しないと見えなかったからかなり隠密性が高いわ。でも、そんな危険性を感じないから放置していても問題ないでしょうね。

次に出席番号１０番の絡繰茶々丸は普通の人じゃないわね。機械仕掛けだと思うわ。それはあなたもわかっていると思うけど。
次は、出席番号３１番、ザジ・レイニーデイも人じゃないわね。ただ、ちょっと正体はいまいち不明。あんたならもうわかっているんだろうけど。
他は私が見た感じ普通の人よ。
正直、生徒よりもあの世界樹っていう木のほうがおかしいわよ。おそらく認識阻害系の術が使われているんでしょうけど。そっち調査するほうがいいと思うわよ。
これで報告としては十分かしら？　八雲（やくも）、紫（ゆかり）」
霊夢の言葉に反応するかのように、霊夢の隣に、裂け目ができた。
裂け目としか言い様のないものが空中に浮いている。裂け目の両端にはリボンが結ばれていて、それが開き出して中に多数の目が除きこんでいる空間が見える。
正直に言って気持ち悪い裂け目の中から金髪の美女が出てくる。八卦の萃と対極図が描かれた中華風の服に赤いリボンのドアキャップのような帽子をかぶった女性だ。髪は金髪のロングで毛先をいくつか束ねて赤いリボンで結んでいる。そんな女性、八雲紫が霊夢の隣に立つ。
「ええ。十分ですわ」
空間の裂け目が閉じると、今度は横向きに紫の腰の下あたりにできて、その裂け目に座る。
「大丈夫なの？　こっちに来て」
「結界にさえ当たらなければ侵入は察知されませんわ」
霊夢は目を細めて空を見上げる。
「結構強力な結界よね。侵入を防ぐタイプではなく、侵入を感知するタイプね」
「感知したら魔法先生、もしくは魔法生徒が侵入者の撃退をする感じね」
霊夢の言葉に付け加える紫。
「で、あんたはどうして私と魔理沙を外の世界に送り込んだの？　あ

んたならこの程度の情報、すでに集めているでしょ？」
「……。これから世界が動き出しますわ。幻想郷への悪い影響を最小限にして、良い影響のみを受け入れたい。しかし、蚊帳の外にいては影響を選択することすらできず、訪れた影響を問答無用に受け入れなければならなくなりますわ。それは幻想郷の危機」
　紫の険しい表情に霊夢も驚くが、
「まるであの教室がその原因、渦のど真ん中にいるような口ぶりね」
「その通りですわ。ネギ・スプリングフィールド。彼を中心とした渦になると、わたくしは思っています」
「なんで」
　そんな様子が全く見えなかったため聞くが、
「説明するにはまだ早いでしょう。まだ渦は弱く、竜巻に例えるならば微風の状態ですわ」
　霊夢は紫を睨むがそれをスルーしている。
「はぁ。で、私はこれからどうすればいいわけ？」
「好きに動いていいわよ」
「は？」
　その言葉に驚く霊夢。わざわざ自分を外の世界に送ってまで何かをしたいはずのなのに、好きに動いていいとはどういうことなのか。
「好きに動いてくれて結構ですわ。魔理沙もそう。あなたと魔理沙が敵対することになっても良いですわ。普通に外の世界を楽しむも良いですし。ネギ・スプリングフィールドの手助けをするのも問題なしですわ」
「何を考えているのよ」
「言ったでしょう？　幻想郷への悪い影響を最小限にしたいのですわ」
　霊夢はその言葉の真意を探る。
　最小限にしたいのならば、自分たちに何かをさせたいのではないか。そう考えていたのだが……。
「ネギ・スプリングフィールドと仮契約をしても良いですわ。あなたの思うがままに動いて結構。それが幻想郷のためになる」

「仮契約？」
聞きなれない言葉が出てきたので問うが、
「いずれわかりますわ」
「ちっ」
答えようとしない紫に霊夢が露骨に舌打ちをする。
「好きにしていいなら、この報告も次回からなしにしていいのかしら？」
からかうような口調で霊夢が言うが、
「ええ。構いませんわ」
「ちっ」
何も困らない。そんな思惑が今の一言から感じ取れて、霊夢は再び露骨に舌打ちをする。
「それでは、この報告を続けるのならば、明日以降もここにきて頂戴」
紫が立ち上がると、座っていた空間の裂け目が消えて、紫の目の前に縦に同じように空間の裂け目ができる。
「待って。1つだけ、聞いてもいい？」
霊夢は空間を通ろうと、片足を入れた紫を止める。
「あら。何かしら？」
「紫は、わざわざあの教室内の人間を観察させたってことは、あの教室内にあなたが脅威と感じている人間がいるってことよね。それは、誰？」
「あら。面白いことを聞くわね。そう、ね……。幻想郷にとって脅威と感じている人間か、私個人が脅威に感じている人か、どっちを聞きたい？」
その言葉に霊夢は呆気にとられる。まさか紫本人が脅威と感じる人間がいるとは。
「紫が脅威と感じる人間って言うのは興味があるわね。誰かしら」
「神楽坂、明日菜ですわ」
霊夢は明日菜の容姿を思い出す。
鐘のような耳飾りを付けたツインテールの少女。ただの人間にしか見えなかった霊夢は驚く。

「そんな風に見えなかったけどね」
「今はまだ脅威ではないですわ。ですが、成長すればどうなることか……」
「へぇ」
紫は歩を進めて、体が完全に裂け目の中に入る。
「では、良き学園生活を」
それだけ霊夢に言うと、空間が閉じて何もなくなる。
「……ふん。妖怪の言いなりにはなりたくないけど、幻想郷への悪影響というのは、博麗の巫女として見逃せないのよね。利用させてもらうわよ、紫」

修学旅行

3―A組教室。

「明日から修学旅行です。僕たち3年A組は、京都・奈良に行くのですが……。うっかり忘れていました。博麗さんと霧雨さんの班が決まっていません」

「修学旅行ってなんだ？」

ネギの言葉にクラスの大半の人間が、確かに。という表情をしているところに、魔理沙が聞く。

「わかりやすく言うと、学校のみんなで行く旅行ですわ。目的としては別の地域の文化に触れるなど様々ありますが、最近はただ旅行をしているだけですわね」

なぜかいいんちょが立ち上がり、演説をするかのように答える。

「ほほう。なるほどだぜ」

「それで、基本的には個人行動はあまり認められていなくて。同じ班で集団行動をしてもらわないといけないんです」

ネギが申し訳なさそうに言う。

「私！　私の班に来てよー」

佐々木まき絵が立ち上がって言うと、他の子たちもそれに便乗してうちの班に来て、と騒ぎ出す。

「私はどこでもいいぜ。霊夢は？」

騒ぎの中、魔理沙がそう言って、霊夢は、少し考えこむ。

霊夢からすれば、紫が恐れているという神楽坂明日菜について調べてみたい。

しかし、紫は成長すればと言っていたので、今観察しても、紫が恐れている点がわからないのでは？

それに、魔理沙がどこでもいい、と言ってしまった以上、自分だけ神楽坂明日菜と同じ班にっと言ったら何か理由を聞かれるのではないか。

そう考えてしまう。

「はぁ。どこでもいいわ」

仕方がなくそう答える。
別の班になろうとも、見ることぐらいはできる。そう考えることにする。
「えーと、それでは、班長でジャンケンをして――」
「それじゃあつまらない！　クラス全員で野球拳勝負にしようよ！　先に全裸になった人から脱落ね！　勝ち残った人２人の班に入るってことで！」
「いいね、やろうやろう」
「勝負勝負！」
「ダメです！　ダメです！　そんなのやっちゃダメです！」
ネギが大慌てで止めるが、
「じゃあ、じゃーんけーん！」
ネギの言葉は全く聞こえていないようで、クラスのほとんどがジャンケンを始めようとすると、
「３―Ａ！　静かにせんか!!　周りのクラスに迷惑だぞ！」
初老の男性が教室を思いっきり開けて注意してくる。
初老の男性、学園広域生活指導員の新田先生は騒がしくしている教室を一瞥すると、
「何をそんなに騒いでいるのだ！」
「新田せんせー、転校生の修学旅行の班決めしているだけですよ。どこでもいいっていうから」
誰が言ったのか、そう言うと、新田の声はさらに大きくなる。
「ならばなぜそんな騒がしいことになる。それならば班長だけでさっさとジャンケンをしなさい！」
「えー。それじゃあつまらないー」
「つまらないではない！　周りのクラスに迷惑だ。やるならば早くしなさい！」
仕方がなく、ふつうに班長だけでジャンケンをする。
結果、
「よろしくだぜ」
「よろしくネ」

「よろしくアルよ」
「んー」
魔理沙は2班になり、
「よろしく」
「よろしくね！　霊夢ちゃん」
霊夢は、４班となった。

翌日
「ふわぁぁぁぁぁ」
大宮駅に到着した霊夢は大きなあくびをする。
「どうした、霊夢。楽しみで眠れなかったのか？」
「あんたじゃないんだから、そんなわけないでしょ」
「いや、私はちゃんと寝たぞ」
「その言い方だと私が寝てないみたいじゃない。ちゃんと寝たわよ」
いつものように、魔理沙と霊夢が話をする。
「いやぁ。あの噂の新幹線に乗れるなんて、外の世界に来れてよかったぜ」
外の世界の未知の乗り物に乗れることでわくわくしている魔理沙と、めんどくさそうにしている霊夢。
「霊夢はどこに行くんだ？」
「班行動のときにはＵＳＪってところに行くみたいよ」
「なんだそれ」
「遊園地みたいなもの、かしら」
「おお。あの噂の。……ん？　修学、だよな」
「それ言ったけど。『大丈夫！　ＵＳＪだって学ぶところがあるよ』って佐々木が」
「何を学ぶんだ？」
「さぁ？　経営とか？」
首をひねる2人のもとに人影が近づいてきて、
「お2人さん、一個いかガ？」

「よお、超（ちゃお）。１個くれ」
黒い髪の団子を白いシニヨンカバーで囲っている天才少女、超鈴音（ちゃおりんしぇん）が肉まんを１つ取り出して突き出してきた。
「１２０円ネ」
魔理沙は１２０円を出して肉まんを１つもらうとすぐに一口食べる。
「うん。うまい！」
「霊夢さんもどうネ？」
「私はいいわ」
手を軽く振って拒否をしめす。
「おいしいぜ？」
「朝食なら食べたでしょ。食べ過ぎたら太るわよ」
「動いてるから大丈夫だぜ」
肉まんの中の肉だねの匂いが霊夢の鼻孔を刺激する。
「あっち行って食いなさい」
「いいじゃねーか」
２人の言い合いを見て、超（ちゃお）は軽く笑い、
「霊夢さんも相変わらずのようだネ」
そう呟いて２人から離れていった。
「みなさーん。そろそろ時間です。集合してくださーい」
ちょうどよいタイミングでネギの声がホームに響く。
「じゃ行きますか」
「待って待って」
魔理沙は大慌てで持っている肉まんを口に放り込む。
すると、大慌てで食べ過ぎたのか、のどに詰まったらしく、胸元をどんどんと叩く。
「なにしてのよ」
霊夢はお茶のペットボトルを放り投げて渡すと先にネギたちのいる３―Ａが集まっている場所に向かう。
「それでは京都行の３Ａ、３Ｄ、３Ｈ、３Ｊ、３Ｓのみなさん。各クラスの班ごとに点呼をとってからホームに向かいましょう」

源しずな先生がそう言い、3―Aの1班から新幹線の中に入っていく。

1班、鳴滝史伽、鳴滝風香の鳴滝姉妹に、釘宮円、柿崎美砂、椎名桜子のチアリーダー部3人の班。

風香が違う新幹線の車両に乗ろうとする。

「あー。風香さん。3―Aはこっちですよ」

「この双子と一緒だとうるさそー」

「いいじゃん、楽しくて」

「ネギ君、一昨日(おととい)の誕生会楽しかったねー」

「えーっ。先生と遊んだですかー?」

椎名の言葉に史伽が、ずるーい。と京都と書かれた旗を持ちながら言う。

「はい。またカラオケ連れてってください」

次に新幹線に乗ったのは2班。

2班、古菲(くーふぇい)、超鈴音(ちゃおりんしぇん)、葉加瀬里美、長瀬楓、春日美空、四葉五月、そして霧雨魔理沙の班。

四葉は他の班の人に肉まんを3個頼まれたので、360円だと行って肉まんを入れているケースを開いている。

春日がその光景を見てつぶやく。

「どこでも肉まん売っているのね」

「あいあい」

「春日さんも食べますかー?」

「慌てて食べる必要なかったぜ……」

楓が肉まんを食べているのを見てぼやく魔理沙。

「ネギ坊主、引率大変アルね。これ喰うとよろしアルよ。力出るネ」

「えっと。ど、どもクーフェイさん。僕おにぎり食べたので」

次は3班。

「ささ、ネギ先生こちらへどうぞ。グリーン車を貸し切ってあります

ので、そちらでおゆるりとおくつろぎを」
ネギの体を引っ張ってグリーン車に連れて行こうとするいいんちょ、雪広あやかに、那波千鶴、村上夏美、朝倉和美、そして音楽を聴いて、興味なさげにしている長谷川千雨の班。
「またあやかったら……」
「はいはーい。いいんちょ、昼間っから犯罪行為には走らないようにねー」
「あ、あの。いいんちょさん。僕、まだ仕事がー」

次は４班。
佐々木まき絵に、明石裕奈、和泉亜子、大河内アキラの運動部４人に、まだ誰も知らないが巫女という共通点を持った、龍宮真名と博麗霊夢の班。
和泉が具合が悪そうに入ってきて、後ろから大河内が背中をさすっている。
「乗る前から酔うなんて……。弱いんだから」
「大丈夫なのか？」
「ちゃうねん。肉まんが美味しくて食べ過ぎた」
「お水買っとく？」
「あの肉まんって中毒性でもあるの？」
祐奈が水を買う前に、霊夢がお茶のペットボトルを取り出して和泉に渡す。
「ネギ君。自由行動日、私たちと一緒に遊び行かない？」
「いえ、あの」
佐々木はネギの手をつかんで顔を近づける。
「佐々木さんぬけが……いえ、ネギ先生は忙しいのですわよ」
なぜかそれを先に座席のところに行ったはずのいいんちょが止める。

その次は５班。
図書館島探検部の４人、宮崎のどか、早乙女ハルナ、綾瀬夕映、近

衛このか、そしてこのかの親友の神楽坂明日菜の班。
「ほら、チャンス。自由行動日一緒にどうですかって！」
「で、でもー」
「先生は頼み込めばイヤとは言わないと思うのですが」
　仲良し3人組のうち2人はのどかになんとかネギを誘うように言うが、のどかはネギに迷惑をかけたくないのか、あまり乗り気ではない様子。
「ネギ、大丈夫だった？　ご飯、ちゃんと食べれたの？」
「ハイ！　おにぎりありがとうございます」
　おいしかったです。と付け加えてネギが言うと、なぜかまだいたいいんちょが反応する。
　しかし、誰も気づかずに、
「ほかほか。良かったー」
　このかは自分の作ったおにぎりの感想に笑顔になる。
　5班が座席に向かっている最中、
　引率だけで大変そうだと、ネギが考えていると、1班がまだ来ていないことに気づく。
「ん？　今ので5班？　1班足りないぞ？」
「ネギ先生」
　そこに6班の桜咲刹那が声をかけてくる。後ろには、ザジ・レイニーデイもいて、なぜか手に小鳥を乗せている。
「私が6班の班長だったのですが……。エヴァンジェリンさん、他2名が欠席したので6班はザジさんと私の2人になりました。どうすればいいでしょうか？」
「え、あっ。そうですか。困ったな」
　吸血鬼で学園に実質封印されてしまっているエヴァンジェリンはやはり修学旅行に来れないことをネギは理解する。
「わかりました。他の班に入れてもらいますね」
　そう言って後ろを振り向くと、そこにはちょうど明日菜と、いいんちょ、そしてこのかがいたので、
「じゃあ、アスナさんは桜咲さんを。いいんちょさんはザジさんをお

願いできますか？」
「はいはい」
「構いませんわ。ネギ先生」
その言葉にこのかが反応し、
「あ、せっちゃん。一緒の班やなぁ」
笑顔で言うが、刹那は少し困った顔をすると、軽く会釈をして無視するかのようにこのかから離れて行ってしまう。
「あっ……」
それをこのかは、手を軽く伸ばすだけで止めることはできなかった。

新幹線でケロケロパニック

新幹線が出発する。
「おぉーー!!　本当に動いたぜ！」
窓に張り付いた魔理沙が大興奮で声を上げる。
「ふっふっふっ。魔理沙さん、その程度で驚いてはいけませんよ」
「まだすごいのがあるのか!?」
目をキラキラとさせて葉加瀬のほうを向く魔理沙。
「まだ実用ではないですが、磁気浮上式リニアモーターカーというものが現在開発中です。完成まであと３０年はかかると思いますが、完成すれば東京と大阪を６７分。ほぼ1時間で移動できるというものが完成するのです」
「マジか。東京大阪っていうと、１００里ぐらいか!?　それを半刻で行けるなんて。すげーぜ！」
魔理沙はとてつもなくハイテンションで、霊夢はそれを見ながらペットボトルのお茶をコップに入れている。
「それでは、みなさん。１５年度の修学旅行が始まりました。この四泊五日の旅行で楽しい思い出を一杯作ってくださいね」
ネギとしずな先生が中央の通路で生徒たちに話す。
「麻帆良学園の修学旅行は班ごとの自由時間も多く取ってあり、楽しい旅になると思いますが、その分ケガや迷子、他の人に迷惑をかけたりしないよう、一人一人が気を付けなければなりません」
ネギの後ろの扉が開き、
「特にケガには気をつけ――」
扉から入ってきた車内販売にネギが後ろから突き飛ばされる。
「えー、お弁当……。あっ、すいません」
それを見てみんなが笑い、アスナが心配そうに見る。
霊夢はコップに入れたお茶を一口飲む。
「ふぅ。ペットボトルというのはいいわね。いつでも買えてどこでもお茶が飲めるわ」

「霊夢ちゃん、おばちゃんみたいなこと言うねー」
「おばちゃんとは失礼な。確かに、よく縁側でお茶を飲んでいるけど」
まき絵の一言に心外とばかりに霊夢は答える。
「それ、完全に田舎のおばあちゃんじゃないかーい」
「いたっ」
裕奈は律儀に裏手でバシッとツッコミをいれ、裕奈の隣に座っていて、関係ないアキラが被害を被る。
「境内の掃除をしたあと、一息つくのによくそこでお茶をしているわ。大抵、飲んでる最中に魔理沙やらいろんなのが来ちゃうけど」
「けいだい？」
「境内とは、神社やお寺などの敷地を表す言葉だな。博麗、君の家も神社か何かか？」
授業の成績があまりよろしくないまき絵の疑問に龍宮がすぐに答える。
「君もって、あなたも？」
「あぁ。麻帆良の敷地内に龍宮神社というのがある。休みの日で用事がないときはそこで境内の掃除やらやっているよ」
「あら、すごい奇遇。あんな町中だとお賽銭たくさん入りそうね」
「それほどでもない。最近の子は信仰心が足りなくてね」
「うちは人里から離れたところにあるせいか人が来なくてね。来るのはお賽銭を入れてくれないやつばかり」
神社という共通点を知ったおかげか、龍宮と霊夢の神社談義が止まらない。
「おーい。ゆーな、まきちゃん。やらない？」
そこにハルナがカードの束を持ってやってくる。
「いいよー」
「普通にやるのはつまらないし、おかしでも賭けない？」
「うん。やろう」
まき絵と祐奈が同じようなカードの束を持って席を立つ。
「なにあれ」
霊夢は龍宮との会話をいったん止めて聞くと、アキラが答えてくれ

る。
「えっと、最近流行っているカードゲーム」
「ふうん……」
それだけ聞くと興味を失ったのか、再び龍宮との神社雑談に戻る霊夢。

座席を一部１８０度回転させて、向き合うようにして３対３でカードゲームをしている少女たち。
「はい。『炎の呪文』カード。パルに５点の攻撃」
「あーん。やられた。死んだー」
「私のカード『恐怖のカエル地獄』がじわじわと効いてましたからね」
「くっそー。にっくきカエルめ」
負けたので、賭け金であるお菓子をカバンから取り出そうとするハルナ。しかし、
お菓子の箱を開封すると、そこにいたのは一匹のカエル。
「きゃ、キャーー!?」
それを皮切りに他の子たちのお菓子や水筒からカエルがどんどん出てきて、新幹線の床に大量のカエルがあふれ出す。
「な、なんですか。このカエルの団体さんはー」
ネギが何が起きたのかわからないまま、とにもかくにもカエルを捕まえて袋につめていく。
「式神……か」
カエルを見て霊夢がつぶやく。
霊夢は一瞬でこのカエルは本物ではなく、紙に術をかけたものだと理解する。
そして考える。なぜここで式神が放たれるのか。
考えられるのは、囮。しかし、問題はだれが狙われているか。
カエル１０８匹すべてが回収され、しずな先生と亜子が気絶している。そして、いいんちょがネギの指令で点呼を取り始める。
霊夢と魔理沙は周囲を見る。
魔理沙もこれは何かしらの囮だと考えたようで、２人とも偶然にも

同じように本命が何かを探っていた。
　すると、ネギが慌てて何かを探すような仕草をしたあと、スーツの内ポケットから封筒を取り出して、安心した表情をする。
「あれか……」
　霊夢と魔理沙は狙いがあれだとすぐに理解して誰にも聞こえないようにつぶやく。
　直後。ネギの手から封筒が消えた。
　消えたと認識してしまうほどの素早さで燕が封筒を奪ったのだ。
「ま、待てー！」
　ネギが大慌てで追いかける。
「油断しすぎよ」
　霊夢はため息をつく。
　ネギは燕を追いかける。
　ネギの肩に乗っているオコジョ妖精のカモミールが燕の正体が式神だとネギに教える。
「シキガミ？」
「おうよ！　日本の使い魔（ファミリアー）・魔法（マジック）！　いや、あれは紙……無機物だから、ペーパーゴーレムってところだな」
　ネギにわかるように西洋のものに例えて説明をするカモ。
「まずい。逃げられる！　兄貴、杖は？」
「予備があるよ。エヴァンジェリンさんとの闘いでいろいろ勉強したからね」
　ネギは土星のような丸と輪っかがついた小さな杖を取り出して走りながら燕に杖を向ける。
「近くに術者がいるはずだ。とらえろっ」
「よしっ。ラス・テル・マ・スキル――」
　呪文を唱え始めるネギ。しかし、移動販売にぶつかってしまい、遅れをとってしまう。
「きゃあ」
「わあっ。すす、すみません」
　その隙に燕はどんどん先に進んでしまう。しかし、

先に待ち構えていた人影が刃を見せぬ速さで抜刀、納刀をした居合斬りで燕は紙に戻り真っ二つに斬られる。
人影は刀を竹刀袋に入れて封筒を取る。
「待てー」
そこにようやく追いつくネギ。
「ネギ先生」
「さ、桜咲さん？」
人影は桜咲刹那で、
「あの、これ、落とし物です」
「え、あー。コレは僕の大切な親書」
拾ったばかりの封筒、親書を渡す。
「あ、ありがとうございます。助かりました」
「それは先生のモノですか？　気を付けたほうがいいですね、先生。特に……向こうに着いてからはね」
刹那はネギから離れ、３―Ａのいる車両へと向かって歩き出す。
「それでは」
「あ、どうも御親切に」
ネギは頭を下げてお礼を言うが、カモだけは、
（オイオイ、兄貴。何が『どうも』だよ）
小声でネギ先生に注意をする。
（あの女、メッチャ怪しいじゃねーか。気をつけろよ）
（え!?　どーゆーこと？）
カモは床を見るように言うと、真っ二つに斬られた鳥の紙型がある。
（さっきの取りの紙型。つまり、奴が術者だよ！）
（ええ!?　そんな。それじゃあ）
（そうだ。やつが西からのスパイかもしれないぜ）
カモの忠告が、再び生徒が敵なのでは。という不安にネギは襲われてしまう。

修学旅行1日目

その後は特に問題もなく、京都に無事に到着する。
「皆さん、降りる準備をしてくださーい」
ネギが教師らしく生徒に声をかけ、全員が下りる準備を始める。
「よし。いよいよ京都だ。この地にサウザンドマスターの手がかりが……」
「ん？　どうしたん、ネギ君」
「い、いえ。楽しみですねー、京都」
木乃香に話しかけられ、笑顔で返事をするネギ。そこに、刹那からの視線を感じる。
ネギは関西のスパイではないかと疑ってしまうが、他の生徒たちのテンションに押されて、ネギもハイテンションで、
「では、皆さん。いざ京都へ！」
「「おーーー」」

京都に到着してまずクラス全員で行くのは清水寺。
「これがウワサの飛び降りるアレ」
「誰か、飛び降りれ」
「では拙者が」
「おやめなさい！」
超ハイテンションの3―Aの生徒たち。
「ここが清水寺の本堂。いわゆる『清水の舞台』ですね」
「いい景色だぜ」
「本来は本尊の観音様に能や踊りを楽しんでもらうための装置であり、国宝に指定されています。有名な『清水の舞台から飛び降りたつもりで』の言葉通り、江戸時代に実際に234件の飛び降り事件が記録されていますが、生存率は85％と以外に高く……」
夕映の言葉にネギと超が興味深く聞き、夕映が神社仏閣仏像マニアのことを知らない裕奈が驚く。
本尊からの景色をみんなが感動していると、

「そうそう。ここから先に進むと恋占いで女性に大人気の自主神社があるです」
夕映の言葉にちょうど恋している乙女は早速そこにネギを連れて行こうとする。
「ちなみに。そこの石段を下ると、有名な『音羽の滝』に出ます。そこの三筋の水は飲むとそれぞれ健康・学業・縁結びが成就するとか」
「縁結び!?」
「それだ！」
「あまり期待しないほうがいいわよ。当たるも八卦当たらぬも八卦ってね」
霊夢の言葉は全く聞こえておらず、ネギを連れてクラスのほとんどが我先にと急いで進む。
「みんなお年頃ね」
自分のことを棚に上げて後ろからゆっくりとついていく霊夢。
クラスみんなが地主神社に到着する。
目をつむって、石から石へとたどり着けば恋が成就する、といわれている石がある神社。
これに、いいんちょ、まき絵、のどかが挑戦する。
他のみんなは全員応援をしており、のどかは全く違う方向にフラフラと歩きだしてしまい、クラスの一部では少額ではあるが賭けを始めてしまう。
いいんちょは、謎の心眼とやらで石の位置を把握。一気に走り出すと、まき絵も薄目を開けて走り出す。
「ずるーい、いいんちょ。目開けてるでしょ」
自分のことを棚に上げて文句を言うまき絵に対し、目を閉じたまま目標へと向かういいんちょ。
「ホホホ。まさか。これで私と某N先生との恋は見事成就ですわ」
まっすぐ石へと走る2人。しかし、2人の体が一気に沈む。
2人は誰かがしかけた落とし穴に落ちたらしく、そこには新幹線と同じ大量のカエルもいた。
アスナがいいんちょを、ネギがまき絵を引っ張り上げる。

「大丈夫ですか。まき絵さん。いいんちょさん」
ネギはこれも関西呪術協会の妨害ではないかと疑い、刹那がまた自分を見ていることに気づく。
しかし、証拠もないので、明日菜の一言で、気を取り直して音羽の滝に向かう一同。
すると、さすがお年頃の少女。１０人ほどが縁結びの滝に向かい、我先にと水を酌んで飲む。
「むっ」
「う、うまい!? もう一杯!」
「ぷっはああー。何コレー!」
「確かに効きそうな。霊験あらたかなこの味」
「いっぱい飲めばいっぱい効くかもー」
どんどん飲む１０人の顔は赤く染まっていき、なぜか全員酔っぱらって眠ってしまった。
「ええーーー!?」
ネギと飲んでいなかったクラスの一同が驚いていると、霊夢は縁結びの滝の水に指を付けてなめる。
「ん。この味は……」
「博麗さん、どうしました?」
霊夢は音羽の滝の屋根の上へと向かう。
屋根の上にあるものを見て、霊夢が下にいる先生に言う。
「先生。お酒。清酒よ」
屋根の上に置いてあった酒と書かれた樽から伸びているホースは縁結びの滝に繋がっているので、それを持ち上げて中身が出ないようにすると、それを抱えて霊夢が飛び降りてくる。
「これが縁結びの水と混ざるようになっていたわ」
「お、お酒!? 一体だれが……」
ネギが驚いていると、霊夢はいつもと同じテンションで、
「じゃ。これ捨ててくるわねー」
それだけ言うとみんなから離れてしまう。
その後、偶然通りかかった先生にお酒臭くないかと疑われるが、ネ

ギは甘酒だとごまかし、夕映はいいんちょの頬を何度もビンタして起こそうとするが全く起きず、バスに全員押し込んで、旅館まで連れて行く羽目となった。

嵐山の旅館。

「ほいっと」

酔っぱらって寝てしまった亜子と祐奈、まき絵の3人をアキラ、龍宮とともに運び、布団をすぐに引いてそこに寝かせる霊夢。

「この程度で酔っぱらうなんて弱いわね」

「し、仕方がないんじゃ？　みんな飲んだことないんだし」

霊夢は情けない、と言いたげな顔をしている。

「この後の予定はどうなってたっけ？」

「夕飯と、お風呂。あとは自由時間だな」

龍宮の回答にありがと、と答える霊夢。

すると霊夢は、今のうちにあれを取ってくるか、と呟いて部屋から出ていこうとする。

「あ、そうそう。大河内、水を用意しておくことをお勧めするわ。あの子たちが起きたら飲ませてやれるように」

「う、うん」

霊夢は軽い足取りで廊下を歩いていき、一度旅館の外に。そして、周りに人がいないことを確認すると、自分の能力『空を飛ぶ程度の能力』で飛んでどこかへと行く。

目当てのものを取ってきて、ご満悦の霊夢は一度旅館の屋根の上に着地をして、そこに物を隠すと、何もなかったかのように入り口から旅館に入る。

そして、

「まーりさ」

夕食を終え、お風呂にも入り、あとはゆっくりするだけ。そんな時間に2班の部屋にやってくる霊夢。

「どう？」

霊夢は手をなにか持つような形にして、それを傾けてなにかを飲むような動作をする。
「お、いいね」
魔理沙はそう言って笑顔で部屋の入り口にいる霊夢の元へ行く。
「どこで？」
「上」
霊夢と魔理沙は一度４班の部屋にいく。裕奈とまき絵、そして和泉の３人は変わらずに酔いつぶれて寝ている。アキラと龍宮は外出中らしく部屋にいない。
部屋にある小さな机には水の入ったペットボトルが３つ置かれていて、手をつけた様
霊夢と魔理沙は窓から外に行き、そこからもう一段上の屋根に上ると、そこには酒と書かれた樽。お昼に音羽の滝に仕掛けられていた日本酒が置かれていた。
「なるほどな。どうやって入手したのか疑問だったんだが、納得だぜ」
「もったいないでしょ？　おちょこは旅館の台所から拝借したわ」
そう言っておちょこを取り出して魔理沙に渡す。
お互いお酒を入れて、
「「乾杯」」
軽くおちょこ同士を当ててから一口飲む。
「お。さすが外の世界のお酒。うまいな」
「きれいな清酒よね」
２人とも月を眺めながら静かに飲む。そして、
「ねぇ。今日のこと、どう思う？」
まず、霊夢が話を振る。
「今日のこと？」
「新幹線とか、清水寺とか」
「ああ」
霊夢の言葉に魔理沙は納得して、
「変だよな。狙いはネギの持っている手紙っぽいが……」
「それだけのために式紙まで普通持ち込む？」

「むしろ魔法がばれちまうぜ」
魔法が、ばれる。
霊夢はそう呟くと少し考える。そして、
「そうか、ばれていいのよ。ネギ先生の持っている手紙が魔法関連の何らかの親書だとすれば」
「魔法関連だから魔法で奪おうとするって訳だな。だが、やっていることは幼稚だぜ……」
「まぁ、陽動ってことなら新幹線で一度成功してるし……、ん？」
霊夢は突然旅館の入り口の方角をみる。
「どした？」
「結界が張られたわ。これは……式紙返しね」
魔理沙は霊夢の向いている方向をみるが、
「よくわかるな。私にはさっぱりだ」
全くわからないため、肩をすくめて言う。
「式紙返しってことは、ネギの味方か？」
「そのはずね。問題は術者は誰なのか」
そんなことを言いながらお酒をおちょこに入れる霊夢。
「待てよ。ってことは、このクラスの中に式神返しが使える術者がいるってことか!?」
「何を今更。世界樹なんていうとてつもなく大きな樹があるのよ？それに学園の敷地を覆う巨大な結界。麻帆良学園は魔法使いが作った学校だと想像するのは難しくないわ。生徒の大半は普通の学生みたいだけど、魔法先生、もしくは魔法生徒が一定数いるわよ」
ため息をつきながらヤレヤレ、と言いたげな口調で言う霊夢。
「マジか……」
そして、全く気づいていなかった魔理沙は驚きのあまり開いた口がふさがらない。
「ということは、ネギも魔法先生なんじゃね？」
「かもしれないわね。どうでもいいけど」
本心からどうでもいいと考えているらしく、おちょこにお酒を入れようとして中身が出てこないので、樽を軽く振って中身を確認してい

る。
　そこに、旅館の一室から勢いよく飛び出してくる人影を2人は気づく。
　そっちを見ると、あまりのジャンプにまだ中空にいる大きな影。頭でっかちな姿、月明かりに照らされ見えるそれは、サルの着ぐるみ。肩の部分には小さいサルがたくさんいて、それは式神だと2人はすぐに気づく、そして着ぐるみが抱えているのは、
「……近衛？」
　まるで意識を失っているかのように、体に力が入っておらず、目を閉じている浴衣姿の近衛木乃香。
「あれは、近衛……か？　狙いはネギの手紙じゃなかったのか!?」
　誘拐という予想外の展開に魔理沙が立ち上がり驚きの声を上げる。
「……」
　霊夢は持っていたお酒の入っていた樽を屋根におろし、魔理沙の手に持っているまだお酒の入ってるおちょこを取ると、一口で全て飲んでしまう。
「あ、霊夢。てめっ」
　酒を取られて苛つく魔理沙。
　そんな魔理沙に目もくれず、2つのおちょこを樽の上に置く霊夢。
「ねぇ、魔理沙。酔っちゃったわね」
「ん？　まぁ、そう、だな」
　普段から宴会で飲んでいた2人はこの程度では酔わないはずだが、魔理沙は、霊夢の発言の意図が読みきれず、歯切れの悪い同意をする。
「夜風に当たりにいかない？　ここよりもーっと強い夜風に」
　霊夢は小さい影となってしまっているサルの着ぐるみを指さして言う。
　それを見た魔理沙は笑顔になり、
「ああ！　いいぜ！」
「ホウキは？」
「あるぜ」
「先行ってるわよ」

魔理沙は旅館に急いで戻り、霊夢は体を伸ばして軽くほぐすと、その場に浮き上がり、着ぐるみのあとを追うように空を飛ぶ。
すぐに魔理沙も追いつき、2人で飛ぶ。
「お酒入ってるから、極力戦いはしないわ。拠点があるならそこを突き止める感じで」
「了解だぜ。もしも近衛が危険な目に合いそうなら、ってことでいいか？」
魔理沙の言葉に霊夢は頷くだけして、進行方向に顔を向けている。
はるか上空からバレないように着ぐるみを追いかける2人。途中、ネギとアスナと刹那が着ぐるみを走って追いかけているのが見えた。
「ちょうどいいわね」
「あ？」
「……」
霊夢がボソッと呟き、聞き取れなかった魔理沙は聞き返すが、霊夢は何も言わない。
紫の言っていた神楽坂明日菜の脅威。それがここでわかるかもしれない。霊夢はそう考えると、自然と口角が上がる。
サルの着ぐるみと刹那、アスナ、ネギは無人の駅の構内へと入っていく。
いくら夜とはいえ、あまりに不自然なほど人の気配がない。
「これは、人払いの術かしら？」
あまりの静けさを怪しんだ霊夢が呟く。
「予め発動させておく必要がある術だよな。ってことは、計画的な犯行だな」
サルの着ぐるみが電車に乗ると扉が閉じ始めて、3人はギリギリ飛び込むように乗り込む。
「魔理沙。急いで」
出発し始めた電車の屋根に霊夢と魔理沙は着地して、落ちないように身をかがめて風の影響を最小限にする。
「霊夢！　線には触れるなよ。電気で死ぬぞ」
「そんなの分かっているわよ。バカにするな」

電車はどんどん速度を増していく。
「なぁ、これ中に入ったほうがいいんじゃねーか？」
「窓も扉も閉まった状態で入れる方法があるなら聞かせてもらおうじゃない」
風に耐えながらどうにかしがみついている2人。そこに、霊夢たちが足場にしている車両の隙間から大量の水が出てきて、車両の中が水に満たされるというわけのわからない状態になったことに2人は気づく。
「なっ、み、水!?　酔い覚ましにはうれしいが、こんなにいらないぜ」
「何かの魔法でしょ。おそらく、ネギ先生たちを溺死させるための魔法ね」
っていうか、あんたそこまで酔ってないでしょ。
と付け加えて電車の進行先を見る霊夢。
「駅までまだあるわね」
このままでは3人とも駅まで持たない、と考えた霊夢は、手持ちの道具で水を抜けないか考えるが、手持ちにあるのは、札と針のみ。
「こんな針じゃ役に立たないし。魔理沙、剣とかないの？」
「さすがに持ってきてねーよ！　儀式用のも寮だ」
「役立たず……」
「あぁ!?　そこまで言うことあるか！」
霊夢は怒る魔理沙を無視して対策を考えるが、そうしていると、すべての車両の窓や扉など車両のあらゆる隙間から水があふれ出す。
「？　変ね。これだと術者が水から逃げる場所がないわよ」
「ほう。こりゃあ、中で電車の連結部の扉を壊して開けたな。それで水が全車両に行き渡ったんだ」
「これなら駅まで持ちそうね」
そのまま京都駅に到着し、扉が開くと、大量の水と水の流れに乗ってネギ、アスナ、刹那と、別車両から着ぐるみと意識を失ったままの木乃香が出てきた。
「み、見たか。そこのデカザル女。いやがらせはあきらめておとなしくお嬢様を返すがいい」

「ハァハァ。なかなかやりますな。しかし、このかお嬢様は返しまへんえ」
「え、このか、お嬢様？」
　再び着ぐるみは木乃香を抱えて走ってしまう。
「せ、刹那さん。一体どういうことですか」
　追いかけながらネギが刹那に説明を求め、霊夢と魔理沙も再び空を飛び、３人の後ろをばれないように追いかける。
「ただの嫌がらせじゃなかったの!?　何であのおサル、このか一人を誘拐しようとするのよ」
「じ、実は、以前より、関西呪術協会の中に、このかお嬢様を東の麻帆良学園へやってしまったことを心良く思わない輩（やから）がいて。おそらく、やつらはこのかお嬢様の力を利用して関西呪術協会を牛耳ろうとしているのでは……」
　ふぅん。そういうことね。
　後ろから盗み聞ぎしている霊夢たちはこの一連の騒動の裏側を理解する。
「私も学園長も甘かったと言わざるを得ません。まさか修学旅行中に誘拐などという暴挙に及ぶとは……。しかし、もともと関西呪術協会は裏の仕事も請け負う組織。このような強硬手段に出る者がいてもおかしくはなかったのです」
「ここも人払いの術がされているわね」
「みたいだな」
　改札を飛び越えて巨大な階段のところに行き、その中腹で着ぐるみが脱げて中から丸メガネの女性が出てくる。一枚の長方形の紙を人差し指と中指で挟んで持っている。
「フフ……。よーここまで追ってこれましたな」
　天井が高いので２人は上に飛んで天井付近に行く。
「霊夢。もしもの時は手を出すぞ」
「……。この感じだと必要なさそうだけどね」
「１対３だからか？　それは根拠にならんだろ」
「ま、様子見しましょ」

霊夢は空中で足を胡坐の形にしてしまう。
魔理沙もそれを見て、ホウキにまたがる形から横に座る形にする。
「三枚目のお札ちゃん。いかせてもらいますえ」
指挟んでいるお札を放り投げる。
「お札さん、お札さん。ウチを逃がしておくれやす」
刹那が走り出すが間に合わず、
大の字の巨大な炎が発生。炎の壁となり、近づけなくなる。
「うあっ」
あまりの火力に刹那の足が止まり、すぐ後ろからアスナが走ってくると、刹那の体を引っ張って炎から守るように自分の体を前にする。
「ホホホ。波の術者ではその炎は超えられまへんえ。ほな、さいなら」
魔理沙は自分の武器であるミニ八卦炉を取り出すが、霊夢が手を伸ばして魔理沙を制止する。
魔理沙はイラついて霊夢に文句を言おうとした瞬間。
『風化（フランス）・風塵乱舞（サルタティオ・ブルウェレア）』
ネギから暴風が吹き荒れ、大の字の炎を一瞬で消し飛ばした。
「なっ。なんだと!?」
「へぇ」
魔理沙が驚きの声を上げ、自然とよく見るために体が前かがみになる。
「逃がしませんよ！　このかさんは、僕の生徒で、大事な友達です！」
ネギが剣を持ったアスナの絵が描いてあるカードを取り出して高々という。
『契約執行（シス・メア・パルス）・１８０秒（ペル・ケントゥム・オクトーギンタ・セクンダース）間』
カードを掲げ呪文を唱えるネギ。
『ネギの従者（ミニストラ・ネギィ）・神楽坂明日菜（カグラザカ・アスナ）』
呪文を唱え終えると、アスナの体が何かに覆われ、輝きだす。
「……。魔理沙。どういう意味？」
「知るわけないぜ……。だが、どうやらネギは魔法先生みたいだな」
そうね。と霊夢は残念だ、と言いたげな表情で言う。
魔理沙を止めたのは、ネギの魔法ではなく、紫が恐れているアスナ

の力が見れるかと思ったためである。
　ネギが魔法先生という情報は得たが、本命の情報は得られずちょっと機嫌が悪くなっている霊夢。
「そこのバカ猿女ーー！　このかを返しなさーい！」
　アスナが先頭を走り、後ろからネギ。刹那はジャンプしてアスナとは違う方向から近づこうとする。
「魔理沙。あの光は？」
「んー。ネギの魔力、だと思うぜ。ネギの呪文みたいなものが終わった途端に魔力がネギから注がれたのが見えた」
「魔力の層……といったところかしら」
「アスナさん！　パートナーだけが使える専用アイテム（アーティファクト）を出します！
　アスナさんのは『ハマノツルギ（エンシス・エクソルキザンス）』！　武器だと思います。受け取ってください」
「武器⁉　そんなのあるの？　よーし、頂戴」
　ネギは持っているカードをアスナに向け、
『能力発動・神楽坂明日菜（エクセルケアース・ポテンティアム　カグラザカ・アスナ）』
　呪文を唱えると、アスナの手に光が走り、何か形を作る。
　光が収まると、アスナの手には、巨大なハリセンが握られていた。
「な、ナニコレ――！」
　武器だと思いきや、ただのハリセンが出てくるという。まさかの展開にアスナが文句を言うが、仕方がないのでこのまま思いっきり振りかぶって振り下ろすが、
　先ほどのサルの着ぐるみが動き出し、白刃取りをしようとして全く手が届かず、頭をアスナのハリセンがはたき、刹那の剣は熊の着ぐるみが表れて片手でキャッチして防いだ。
「な、動いた⁉」
「さっき言った呪符使いの善鬼護鬼です！」
「なぁ、霊夢。着ぐるみじゃないのか？」
　アスナと刹那の言葉を聞いて魔理沙が霊夢に聞いてくる。
「あれも式神よ。善鬼護鬼は聞いたことがあるわね。確か、呪符使いってやつらが使う式神よ。まぁ、わかりやすく言うと、術を使う際

の隙を守る護衛みたいなもの」
「なるほどな」
「ホホホホ。ウチの猿鬼と熊鬼はなかなか協力ですえ。一生そいつらの相手でもしていなはれ」
木乃香を連れて行こうとする呪符使いの女。
「この！　たぁー！」
アスナがそうはさせないために思いっきり猿鬼をハリセンで叩くと、叩かれたところから煙になり、姿がどんどん消えていった。
「なっ!?」
さすがの霊夢もこれにはものすごく驚く。
「おい。なんだ今のは。一撃でやられるほど弱くは見えなかったぞ」
魔理沙が霊夢のほうを向いて聞く。
「一撃で倒せるとは思えないわ。そう考えると考えられる可能性は1つ。退魔能力」
「退魔能力だと!?　アスナの能力か」
魔理沙は自分たちも持つ、〜程度の能力がアスナも持っているのでは、と思うが、
「いや、違うわね。おそらく、あのハリセンの能力ね」
霊夢は即座に否定する。
「おそらく魔道具でしょうね。それなら退魔能力が付いていてもおかしくはない。けど、こんな強力なのは初めて見たわ」
コレが紫の恐れている力？
霊夢は一瞬そう考えるが、違う。とすぐに内心否定をする。
この程度の能力なら、紫なら一瞬で対応できるはず。ただ、スキマを叩かれればおそらくスキマは閉じる。
そう考えると再びアスナの観察に戻る霊夢。
刹那と対峙していた熊鬼はアスナが担当することになり、刹那が呪符使いの女に突撃するが、
それを妨害する一つの人影。
人影の太刀筋を防ぐと、お互い弾かれ、刹那はなんとか着地するが、人影はゴロゴロと地面を転がっていく。

刹那は今の人影が自分と同じ流派、京都神鳴流だと理解する。そして、
「あいたたー。すみません。遅刻してもて……」
埃を払いながら立ち上がるのはまさに現代風の少女。ロリータ服を着た長髪のメガネの少女。右手には普通の白木の柄の日本刀を持ち、左手には1／3程度の長さの小刀を持っている。
「え、お、お前が神鳴流剣士？」
ちょっと思考が昔の人寄りの刹那はあまりの出で立ちに驚く。
「はい～～～。月詠いいますー。見たとこ、あなたは神鳴流の先輩さんみたいですけど。護衛に雇われたからには本気でいかせてもらいますわー」
「こんなのが神鳴流とは、時代も変わったな」
「では、いきます。ひとつ、お手柔らかにーー」
律儀に軽く頭を下げると、一気に刹那に詰め寄り、まずは右手の刀を振り下ろしながら左手の小刀を逆手に持ち替える。刹那は振り落とされる剣を自らの刀、野太刀の夕凪で防ぐ。
次は小刀を振りながらつばぜり合い状態の刀を離すので、刹那は後ろによけるが、一度下げた刀を今度は下からの切り上げで振り上げてくるのを刹那は空いている左手で相手の手首をつかむことで防ぐ。そして再び小刀を振ってくるのを、左手でつかんだ腕を無理やり引っ張って体制を崩す。しかし、それでも振ってくるのを野太刀で防ぐ。
「速い。そして、強い！」
魔理沙は今の一連の動作にめちゃくちゃ興奮して息が少し荒くなった状態で言う。
「剣は妖夢に聞かないとちょっとわからないけど、あの月詠ってやつ、やばいわね。見たところまだ本気を出してないし、剣の勝負で勝てるのは妖夢ぐらいじゃない？」
「ざーんがーんけーん」
神鳴流の必殺の一撃も繰り出され、刹那がかなり不利な状況。
そして、アスナも小さい猿の式神たちが体にまとわりつき、かなり苦戦している状況。

その隙に呪符使いの女は逃げようとするが、
「ラス・テル・マ・スキル・マギステル　風の精霊（ウンデキム・スピリトゥス・アエリアーレス）１１人・縛鎖（ウィンクルム・ファクティ）となりて・敵（イニミクム・カプテント）を捕まえろ　『魔法の射手（サギタ・マギカ）・戒めの風矢（アエール・カプトゥーラエ）』!!
ネギの存在を忘れていたらしく、誰もマークしていないネギが呪文を完成させ、魔法の射手を放つ。１１本の魔法の矢が呪符使いの女に向かって飛ぶ。
「ひぃぃぃ」
「あ、曲がれ！」
女は咄嗟に木乃香を盾にするので、ネギは魔法の矢を曲げて当たらないようにする。
「あら？」
「こ、このかさんを離してください！　卑怯ですよ！」
「は、はは～～ん。なるほど、読めましたえ。甘ちゃんやな。人質が多少怪我するくらい、気にせず打ち抜けばえーのに」
木乃香を肩にかかえて、お尻とパンツが丸見え状態にしてしまう。
「ホーホホホ。まったく、この娘は役に立ちますなぁ。この調子でこの後も利用させてもらいますわ」
アスナが熊鬼に掴まれて持ち上げられてしまう。
「せやなー。まずは呪薬と呪符でも使（つこ）て口を利（き）けんよにして、うまいことウチらの言うこと聞く操り人形にするのがえーな。くっくっくっ」
その言葉を聞いたネギ、アスナ、刹那がキレ、魔理沙も怒ってミニ八卦炉を向けるが、霊夢が魔理沙の前に手を伸ばしてまた制止する。
「霊夢！」
「うるさい。ちょうどいいところなんだから。邪魔しないで」
霊夢の表情はいつも通りに見える。
霊夢からすれば、この勝負はアスナの力見るためのだけのもの。もしもの時は自分が動けばいい。だから、
怒りという感情が浮かんだ、このタイミングは霊夢からすれば都合がいい。
怒りという感情は力をあげる。つまり、

紫の恐れている隠された力がわかるかもしれない。
霊夢にとって、今はそれしか興味がない。
だから、魔理沙の魔法で邪魔をされては困る。
「ウチの勝ちやな」
呪符使いの女は木乃香の丸出しになったお尻を撫でて、
「フフフ。このかお嬢様か。なまっちろいおケツしよってからに、かわえーもんやなぁ。ほななー。ケツの青いクソガキども。おしーりペンペーン」
そう言って、呪符使いの女は木乃香のお尻を2回たたくと、
「このかお嬢様に何をするか―ッ!!」「このかになんてことすんのよ」
刹那は月詠を一振りで切り飛ばし、アスナも熊鬼を一撃で煙にして、一直線に呪符使いのもとへ行く。
魔理沙もミニ八卦炉に魔力を込めだしたので、霊夢が指をパチンとならすと魔理沙を囲うように結界が張られる。
「霊夢!」
「邪魔をするな。私は見たいの」
魔理沙のほうを見ずにタンタンという霊夢。その光景に魔理沙は恐怖心を覚えるが、いつでも魔法が放てるように魔力は込める。
『風化(フランス)・武装解除(エクサルマティオー)』
まず、ネギの呪文が炸裂。呪符使いの女と木乃香の服が花びらとなり、消し飛ばされる。
「なっ。服が!?」
「なるほど。相手の武器、防具をはぎ取る魔法ってところね」
いきなりネギが敵を素っ裸にしたことに魔理沙は驚くが、霊夢は冷静に分析をしている。
次にアスナのハリセンが呪符使いの頭を叩き、そして別の札を取りだして反撃をしようとしているが、それよりも早く、
刹那の剣が近くにいる式神の猿共も巻き込み斬り飛ばす。
「秘剣　百花繚乱!」
地面を転がり、壁にさかさまで激突する。そして木乃香は、ネギの魔法で優しく受け止められて地面に寝かされる。

「なな、なんでガキがこんな強いんや」
額に2が書かれた猿鬼が現れ、メガネを探している月詠と一緒に飛んで逃げて行ってしまった。
「追うぞ、霊夢」
「必要ないわ」
「なぜ！」
「今回の私たちの目的は近衛木乃香の救出のための拠点探し。ネギ先生がいたから救出を任せたけど、元々の狙いはそれでしょ。無駄に追いかける必要はないわ」
それに、追いかけてもアスナの力は見れない。
霊夢は口には出さないが、内心そんなことも考えていた。
「おい、霊夢。お前、何を企んでいるんだ？」
「企みなんてないわ。ただ、見たいだけ」
霊夢はそういうと組んでいた足をもとに戻し、帰るわよ。とだけ言うと先に駅から出てしまう。
「おい！」
魔理沙もすぐにあとを追いかける。
「なぁ。霊夢。お前は何が見たかったんだ？」
「アスナの力。紫が恐れているみたいだから、どういう力なのかなってね」
「あの紫がか……？　まぁ、確かに退魔の力は紫からすれば脅威だな」
「いや？　あの程度なら紫は問題ないでしょ。だから何か別の脅威があると思っているわ」
「なるほどだぜ」
夜の空を飛ぶ2人。
ネギたちより早く旅館につき、じゃあね、と2人はお互いの班の部屋に行く。
中に入ると、すでに班のメンバーは全員寝ていたので起こさないように自分の布団の場所に行って寝る。

修学旅行2日目

修学旅行2日目の朝。
「ふわぁー」
あくびをしながら霊夢は旅館の廊下を歩く。
向かうのは1階の大広間。そこで朝食を食べるのである。そこに、
「ネギ先生。おはようございます」
「あ、博麗さん。おはようございます」
スーツ姿の子供先生、ネギが目の前にいたので、霊夢はとりあえず礼儀としてあいさつをする。そして、
「昨日の夜はお疲れ様でした」
「えっ!? な、なんのことですか?」
慌てながらとぼけようとしたネギに霊夢は軽くため息をつき、
「ちょっと失礼」
ネギのスーツの内ポケットに手を伸ばして中を探る。
「え、あ、ちょっ」
目当てのものを見つけてスーツからネギの親書を取り出す。
「あ、か、返してください。それは大事な」
「わかってるわよ」
左手で持って、右手の人差し指で四隅をなぞり、封がされているところを軽く数秒当てる。
「お返しします。盗られても大丈夫なようにネギ先生と、ネギ先生が直接渡した人にしか開けないように軽い封印をかけたので。もう取られないように気を付けてくださいね」
「え、ふ、封印!?」
手紙を返して霊夢は食堂へとまた進み始める。
ネギはその場で呆然とし、カモが手紙を開けようとする。
「兄貴。俺っちじゃ開けられねー」
「ええ!?」
ネギが試しに開けようとすると、普通に開く。しかし、閉じるとまたカモは開けることができない。

「兄貴、こりゃマジで封印されてるぜ」
「ど、どういうこと!?　なんで博麗さんが？」
「さあな。だが、これは助かるんじゃねーか？　親書のことを考えず、このか姉さんだけ守ればいいわけだしよ」
「そ、そうだね」
カモ一言にそう考えるようにして大広間へと向かうネギ。
3―A以外の生徒も大広間に集まり、
「麻帆良中の皆さん。いただきます」
『いただきまーす』
ネギの号令で、全員朝食を食べ始める。
「うー。昨日の清水寺の滝から記憶がありませんわ」
「せっかく旅行の初日の夜だったのにくやしー」
酒酔ったメンバーが寝てしまったことに落ち込んでいる。
そんな中、同じように朝食をスプーンで食べているネギのもとに、木乃香が近づいてくる。
「ネギくん、ちょっと眠そやなー」
「あ、このかさん。おはようございます」
「夕べはありがとな」
ウィンクをしながらお礼を言う。
「なんやよーわからんけど、せっちゃんやアスナとウチを助けてくれて」
「い、いえ。僕はほとんど刹那さんについてっただけで」
そんな話をしていると、木乃香は少し離れたところで食べている刹那の姿に気づき、
「あ、せっちゃん」
木乃香の声を聴き、刹那はオボンを持って逃げようとする。
「あんっ。なんで!?　恥ずかしがらんと、一緒に食べよー」
それを追いかける木乃香。
ついには、大声で刹那の名前を呼びながら木乃香とネギが逃げる刹那を追いかける。
「何々ー？　桜咲さんのあんな顔はじめてみたー」

「昨日の夜、何かあったのかなー？」
「うぅっ。私の知らないところで何か楽しいことが……？」
「くぅぅー。今晩こそ寝ないよー」
酔っぱらって寝てしまった人たちの残念そうな声が聞こえてくる。
そして、朝食の時間が終え、ロビーを歩くネギ。
奈良県での班別行動の日のため、親書を持っていくのは難しそうだな、と考えていると、
「ネギくん。今日はウチの班と見学しよー」
まき絵がネギに突撃して班行動のお誘いをしてくる。
それを見た他の人たちもネギに詰め寄る。
「ちょっ。まき絵さん。ネギ先生はウチの3班と見学をー」
「あ、なによー。私が先に誘ったのにー」
「ずるーい。だったら僕の班も―」
「ネギ先生、ぜひ3班に」
「ネギ君。4班4班」
「何々またネギ君争奪戦ー？」
みんながネギの奪い合いを始め出してもみくちゃにされていると、
「あの、ネギせんせー。今日の班別行動。一緒に回りませんか？」
のどかが意外な声の大きさに全員の動きが止まり、ネギは木乃香を守るのならば、のどかのいる5班と一緒に行動するのが一番と考え、
「わかりました。今日、僕は5班の皆さんと一緒に行きます」
そう言うと、のどかは嬉しそうに笑顔になり、周りも「本屋が勝った」とか言っていた。

奈良県。大神神社
「なんで商売敵（がたき）のところに来てるのかしら」
霊夢は愚痴りだす。
「別に構わないじゃないか。遠く離れているわけだから信者が取られる心配もない。取ることもできないがな」
隣を歩く龍宮が聞き役となっていて、ほか運動部4人は少し前を歩いている。

「そうだけどねー」
「それに、敵情視察と考えれば良いんじゃないか？」
「なるほど……。私、他の神社がなにかする時、便乗してそこで饅頭しか売ってなかったわ」
「なぜ敵地で販売するんだ。信者が取られるぞ」
「信仰深くなればまわりに回って私のところに来ると思うのよ」
「随分とポジティブな思考だ」
　笑いながら言う龍宮。なぜかギターケースのようなものを持っている。
「確かに。信仰心がなくなってきた現代ではそういうやり方もありかもな」
「ふふふ。そうでしょ」
　霊夢はすぐに文句を言ってくる仙人に対して内心ほくそ笑んで、今度あったとき同意を取れたと文句を言ってやろう、と考える。
　そして、６人はお賽銭箱の前に。
「お賽銭だしやっぱり５円玉だよね」
「５円はやめといたほうがいいと思うわよ」
　サイフから五円玉を探すまき絵に霊夢が言う。
「ご縁と５円をかけてるんでしょうけど、言葉ができた当時の５円と今の５円じゃ価値が違うわ。今だと……二万円ぐらいだったかしら」
「二万!?　た、高すぎる！」
　霊夢の言葉にまき絵は膝から崩れる。
「じゃあいくらがいいのかな？」
「それは諸説あるが……」
　アキラの言葉に霊夢は答えられないので龍宮が答える。
「この金額を入れると少しきつい、と思う値段だそうだ。だからといってたくさん入れればいいと言うわけではない。つまるところ、気持ち次第ということだ」
　龍宮はサイフから五円玉を出す。
「なので私は５円にする。この五円玉はここに来ると決まってから探

した一番キレイなモノだ。気持ちがこもれば5円でも問題ない」
「ケチくさいわね」
「そういう博麗はなぜ一円玉を持っている？」
「1円でも私にとってはつらいのよ」
「本音は？」
「こんな儲かってそうな神主に生活費なんて渡したくない」
「それはどうかと思うが」
「生活費？」
　霊夢と龍宮の漫才に裕奈が割り込んで入ってくる。
「お賽銭のお金は神主や巫女の生活費、つまりお給料となる」
「え!?　そうなの!?」
「だからといってたくさん入れるのも違うがな。塵も積もれば山となるというが、小さな金額でも入れてくれればーー『ジャラジャラジャラ』ん？」
　たくさんのお金の音が聞こえ、全員そっちを向くと、まき絵がお賽銭箱の上で小銭入れを逆さまにして、さらに上下に振っている。
『えぇー!?』
「ちょっ、まっ、まき絵！　何してるの!?」
「自分には辛い金額で、しかもこれはお給料になるのなら小さい金額はだめ。だから、私は小銭を全部入れることにするよ」
「あーもう、なにしてんの。いくら入ってたの？」
「え？　わかんない」
「アホー！」
　裕奈の叫び声が境内に響き渡る。

　そのころ、
「ひゃーーーーッ。ネギ君どうしたんー!?」
「いやっこれは、ちょっと、あの」
「大変!!　38度もあるよ」
「知恵熱という奴ですね」

「ほんっとうにまき絵はアホなんだから。こんなんだからバカレンジャーピンクなんだよ」
嵐山の旅館に戻ってきた４班。
「えへへー」
「褒めてないからね！」
裕奈とまき絵の漫才を見ながらロビーを歩く。
「バカレンジャー？」
「うちのクラスで特に成績の悪いワースト５の人たちの呼称やね。ピンクはまき絵。あとブラックとブルーとイエローとレッドがおるよ」
霊夢の疑問を亜子が答える。
「そして！　そのバカレンジャーのリーダーが、このバカレンジャーブラック！　綾瀬夕映なのよ！」
「ハルナ。やめるです」
唐突に話に早乙女ハルナが割り込んでくる。盛大に紹介された夕映は後ろで迷惑そうな顔をしている。
５班である２人がここにいるということは特に問題もなかったということか。
と霊夢は少し安堵する。
「いやー、奈良もいいもんだな」
「んー」
「魔理沙のスカートがシカに食べられそうになったときは笑ったアルよ」
「急いで洗わないとなー。臭くてたまらないぜ」
どうやら２班も帰ってきたらしく魔理沙たちがロビーに入ってくる。
「ちなみに、くーちゃんがイエローで、長瀬さんはブルー」
魔理沙の近くを歩いて談笑している古菲（くーふぇい）と楓を指さして言うハル

ナ。
「さぁ、ここで問題！　レッドは誰でしょーか！」
「アスナでしょ」
　スパッと即答する霊夢に驚くハルナに、
「ば、バカな。即答だと!?」
「いや、さすがにわかるやろ」
「博麗さんは良い目を持っていますから、その程度すぐわかると思うですよ」
　亜子と夕映が呆れて言う。
「くそぅ。それならば……」
「大事件大事件！」
　ハルナが何かを言おうとしたところ、まき絵やいいんちょ、裕奈に双子など、クラスでも騒がしい方の人たちが大慌てでロビーまで来た。
「奈良公園でネギ君が告られたって！」
「しかし、相手は不明。いったいどなたが……」
　まき絵といいんちょの慌てっぷりを見て、霊夢は朝の親書を封印するために奪った際の姿から、告られたあとのネギの慌てふためく姿を想像して内心笑いそうになる。
「そーー」
　ハルナのカミングアウトを夕映が口を塞いで止める。
「こうなればあの方に頼むしかございませんわ」
「そうだね、いいんちょ！」
　騒がしいメンバーはあっという間に行ってしまい、亜子もまき絵に無理矢理連れて行かれてしまった。
「……ってか、一人しかいないでしょ。この状況で告白できる娘(こ)って」
　のどかの顔を思い浮かべる霊夢。
「ですよね。よく気づかないものです」
「しかし、そんなことできる娘(こ)に見えなかったけど。意外と勇気あるのね」
「まぁ、ハルナがやれ、と言って、我々があの手この手で2人きりにさ

せてあげたのですが……」
「へぇ……」
　霊夢は今ネギを探せば慌てふためく姿を見れるかしら、と考えていると、
「博麗さん」
　夕映が話しかけてくる。
「なに？」
「博麗って珍しい名字です」
「まぁ、私以外に聞いたことないわね」
「そして、長野の山中に古びた神社があることはご存知でしょうか」
「？　知らないけど？」
「その神社、奇妙なことに、お酒なんかを祀っておくと、消えてしまうことがあるそうなのです」
「珍しいこともあるものね」
「えぇ。そして、その神社の名は、博麗神社と言うそうですが、ご存知ですか？」
　やっぱりか……。
　霊夢はお酒が消える古びた神社という時点で外の世界にある博麗神社のことだとわかったため、そう考える。
　幻想郷の境界線上に建っているとされる博麗神社。幻想郷の中と外。両方にあるからこそ、境界線という特殊な場所に建っていられる。
　消えたお酒は幻想入りしてしまったお酒で、すべて霊夢たちが飲んでしまっている。
「偶然って怖いわね」
「本当に偶然ですか？」
　夕映が詰め寄ってくる。
「その神社は私は知らないわよ」
　霊夢の家は幻想郷内の博麗神社で、外の博麗神社は霊夢からすれば関係ない。
「わかりました。ありがとうです」

納得してなさそうな雰囲気を出しながら夕映は頭を下げてお礼を言い、離れていった。
「嘘はついてないわよ」
小さく呟いて霊夢も自分の班の部屋へと向かう。

お風呂にも入り、あとは寝るだけなのだが。
４班の部屋では裕奈、まき絵、亜子、アキラ、古菲（くーふぇい）、楓、魔理沙が枕投げをしており、部屋の奥にある小さなフローリングの部分で霊夢と龍宮がイスに座っている。会話はないが、霊夢は札に『大入』と大量に書いている。龍宮は枕投げの様子を見ているようだ。
そんな時間が数十分もたつと、
「コラァ！　３―Ａ　いーかげんにしなさい！」
ついに新田先生に怒られる。
ほぼ全員がロビーに集められ、正座で説教をさせられる。
なんで、私まで……。
とばっちりを浴びた霊夢は隣に座っている魔理沙を睨むが、魔理沙はどこ吹く風。決して霊夢のほうを見ない。
「これより朝まで自分の班部屋からの退出禁止！　見つけたらロビーで正座だ」
この言葉にクラスから阿鼻叫喚があふれるが、新田先生は不機嫌なままそこから離れていった。
「つまんなーい。枕投げしたいのに」
「ネギ君とワイ談したかったんだけど」
「ネギ君と一緒の布団で寝たかったのにー」
柿崎とまき絵はさすがに許されないことを言うが、いいんちょは気づくことなく、
「いーから、あなた方は早く部屋に戻りなさい」
とまだ正座しているメンバーに怒る。そこに、
「くくく。怒られてやんの」
説教の場にいなかった朝倉がやってくる。いなかったことをいいんちょは怒るが、

「まぁまぁ、私からみんなに提案があるのよ。このまま夜が終わるのはもったいないじゃない？　一丁３―Ａで派手にゲームして遊ばない？」
　班部屋から出たら正座という罰があるためイヤな人は反対を言い、別にいい人は賛成を言う。そして、そのゲームの内容は、
「名付けて『くちびる争奪！　修学旅行でネギ先生とラブラブキッス大作戦』」
　その言葉に全員顔を真っ赤にして驚く。
　そして朝倉がルールを説明する。
①各班から２人ずつ選手を選出。
②妨害可能
③武器は両手の枕のみ
④ネギ先生の唇を奪えた者には豪華賞品プレゼント
⑤新田先生に見つかったものは他言無用。朝まで正座
　ルールを聞いた生徒たちはみんな楽しそうだといい、いいんちょも顔を真っ赤にして実施することを承認してしまう。

「ふぅん。じゃあ私は宮崎に一点買いで」
「了解や。朝倉に伝えとくでー」
　このイベントにトトカルチョがあるというので、参加メンバーを見て、一番可能性の高いのどかに賭ける霊夢。
「宮崎一点買いとは。何か確証があるのか？」
　龍宮が霊夢に聞いてくる。
「別に。直観よ」
「食券一枚だから失敗しても被害は少ない。だが当たればというわけか」
「そうよ。龍宮はやらないの？」
「ああ。さすがに外れた時の損害がつらいからな。確実に儲かる賭け以外は基本参加しない」
　勝負が開始される。まず、３班（いいんちょ、千雨）と４班（まき絵、裕奈）がぶつかり合い、枕で殴り合う。

その混戦状態に、上の階から2班（古菲（くーふぇい）、楓）が現れ、古菲（くーふぇい）が両手と足で枕を投げ千雨以外の3人を攻撃。
そのまま、楓以外の4人で枕による殴り合いが始まる。楓は様子見をしており、もともと参加したくなかった千雨は早くも戦線を離脱。自分の班部屋に向かって歩いていた。しかし、そこを、新田先生は見つけてしまい、千雨が囚われてしまう。
「ぎゃぴーーーー」
『あーっと。新田につかまってしまった――！』
悲鳴を聞き、全員が急いで逃げる。が、裕奈が古菲（くーふぇい）に足蹴にされて倒れてしまい、そこを新田先生につかまってしまう。
2人ともロビーで正座をさせられてしまい、仕方がなく3班と4班が共闘することにする。
そしてネギ先生の部屋の前では、1班（風香、史伽）と5班（のどか、夕映）が戦う、と思いきや、のどかだけ部屋の中に入れ、夕映が2人を食い止める展開に。そして、そこに新田先生から逃げた2班も登場。
そのうちに、のどかは寝ているネギ先生にキスをしようとするが、周りにネギ先生の作った失敗式神がキスをしようとしているノドカを見て、チューをすることが命令だと認識してしまい、のどかは突如現れた大量のネギに驚いて悲鳴を上げて気絶してしまった。
そこに部屋の前にいたメンバーが部屋に入る。しかし、ネギらしき影が窓から飛び降りており、1班が窓から飛び降りて追いかけて、夕映が気絶したのどかを介抱する。
全員が旅館のどこかにいるはずのネギを探す。そして、式神ネギはそれぞれ、別のメンバー、いいんちょ、まき絵、古菲（くーふぇい）、史伽、そして、夕映に声をかけ、そして、
全員にキスをしても良いか聞いてくる。
むろん、その光景はテレビで全員に放送され、霊夢と魔理沙は、これ全員、式神じゃん。と見破ってしまう。
「すごーい！　一体、どれが本物やの!?」
「まさか影武者とは」

「……これ、全員偽物よ……」
まさかの事態に主催者の朝倉、カモも驚く。
ネギの迫力に問い詰められ、倒れる夕映、そのままカメラからフェードアウトしてしまい、状態はわからなくなる。
いいんちょはカメラの用意、化粧をし始める。
まき絵はそのネギをからかいだし、古菲(くーふぇい)は壁に足で押し付けて、顔を真っ赤にして待つように言う。
そして、風香と史伽は双子なのに史伽だけ言われたことで殴り合いの喧嘩を始めてしまう。
そして夕映はこの状況が変だと考える。なぜ？　のどかに告白されたばかりで自分はネギの木を引く行動はしていないはずだと。
しかし、唇同士が当たる直前、テレビにネギが大量に映っていることに気づき、無理やり押しのけて誰なのか問う。すると、
ネギの手が2倍以上に伸びて、まだ夕映の頭のところをつかんでいる。そこにのどかが起きて悲鳴を上げるが、式神ネギは、のどかに向かって文字通り飛んで近づいてくる。
そこに、夕映が思いっきり式神ネギの後頭部を本で殴りつける。
親友の行為にのどかは驚くが、
「落ち着きなさい、のどか。このネギ先生は偽物です。乙女心を遊んだ不届き者の末路です」
ボゥン。と式神ネギが爆発をして大量の煙とともに、一枚の『ネギスプリングフィールド』と書かれた人型の紙がひらひらと舞う。　その気配を感じ取った他の式神ネギは一斉に走り出し、全員がロビーで競合する。
「ね、ネギ先生がいっぱい」
「気を付けてください。どれかが朝倉さんの作った偽物です」
同じくやってきた夕映が忠告するが、古菲(くーふぇい)が一体の頬にキスをする。すると、
「えーと、では任務完了ということで、ミギでした」
楓と古菲(くーふぇい)を巻き込んで爆発をする。
まさかの爆発という光景がテレビで流れて霊夢は威力を見て引く。

なんで接吻で爆発するのよ。どういう命令!?
霊夢は考えるが、結局わからず考えるのをあきらめる。
爆発の騒ぎに新田先生がやってきてしまうが、残り3人の式神ネギが新田先生を吹き飛ばしてしまい、気を失ってしまった。
そこに委員長がヤケを起こしてみんなバラバラに追いかけだす。
まき絵は新体操で使うリボンをどこからともなく取り出して、前を走るネギに向かって振るうと、体に巻き付く。そのまま引っ張って自分の手元に引き寄せると抱きよせて、頬にキスをする。
すると、同じように爆発をしてしまい、鳴滝姉妹も2人同時に頬にキスをするが、同じように爆発をして吹き飛ばされる。
最後、いいんちょが絶対に本物、と確信をもって口を合わせる、が。
同じように爆発して、いいんちょが黒焦げで倒れる。
『こ、これは一体どうしたことだー!? 何と、全員ネギ先生の偽物！
この瞬間、トトカルチョは親(あたし)の総取りかー!?』
「というか、ネギ先生がこんな騒ぎに付き合う理由がないわよね……」
「そうだな」
霊夢のつぶやきを龍宮が同意する。
まぁ、これでバカ騒ぎはおしまいね。
霊夢はそう考えると、テレビには、本物のネギが映り、のどかと対面する。
そのまま2人は何かを話し合う。ネギも困ったようなような表情をしており、何か重要な話をしている雰囲気に見える。
そしてそのまま、ネギは夕映、のどかと一緒に部屋のほうへと行こうとするが、夕映がのどかの足をひっかけて転ばせる。
足を引っかけられたのどかの体はまっすぐネギのほうへと倒れ、
唇同士がぶつかり合いながら倒れこむ。
『優勝　宮崎のどかー!』
「よかったな」
「博打だったけど。これで当分は食事に困らなくなったわ」
その後、新田先生が朝倉をとらえ、参加したメンバー全員とネギ先生、カモをロビーで正座させた。

「さ、寝ましょ」

助けることは不可能なのでみんな寝ることにする。

修学旅行3日目　朝～夜

3日目朝

朝食を食べ終わった後、のどかが受け取った景品をみんなが見ていた。

それは、のどかの絵が描かれた一枚のカード。

霊夢はそれを少し離れたところから見て、そういえば、初日の夜にネギ先生がアスナの絵が描かれた似たようなカードを使っていたわね、と考える。

「はいはい、皆さん。今日3日目は完全自由行動日よ。部屋に戻って準備してねー」

しずな先生の言葉で全員が班部屋に戻ろうとするが、そこにいいんちょがのどかにライバル宣言をして、まき絵も次は負けないと言い出す。

その後、まき絵はネギを誘おうとしていたが見つからず、仕方がなく4班のみでＵＳＪに行くことにする。

そして2班は、

「今日は予定を変更してシネマ村へと行きましょうか」

「悪いな。私のワガママで」

旅館から出ながら魔理沙が謝る。

「気にするでないでござるよ」

「そうアル」

「もともとシネマ村は候補に上がっていましたし、問題ありませんよ」

シネマ村へと向かう。

「ほうほう。人里みたいな光景が並んでるな」

シネマ村に到着した魔理沙の第一印象はそんなだった。

「魔理沙さんには退屈だと思たがネ」

「そんなことはないぜ。しかし、洋服で人里みたいな風景っていう変な空間を写真にしようとしてたんだが……」

魔理沙の視線の先には着物や新選組の格好になって楽しんでいる観光客の姿。
「確かに洋服や制服もいるが、まぁ、これはこれでいびつな空間にできるな」
インスタントカメラで写真を取る魔理沙。
「では、第二班の私達は自由時間としましょうか」
ハカセの提案で全員バラバラになるが、魔理沙は同心の格好になって着替えスペースから出ると、偶然にも町娘姿のハカセと超にばったりと出会う。
「あれ？　魔理沙さん、それ、男物じゃ？」
「ＺＥ☆」
笑顔で首を斜めに傾け、両手の人差し指をほっぺたにあてるポーズをとる。
「いや、とびっきりの笑顔で何言ってるんですか」
「いやー。私にはこっちの方が似合うだろ？」
「……金髪フワフワの同心ですか」
ハカセと超は足元から頭の上まで全身を見る。
黄色の男物の着物の上に刀を腰に差し、黒い紋付羽織を着ている、金髪のふわふわウェービーヘア。
「時代が時代なら、切腹になりそうネ」
「確かに似合いますが、不良士官って感じですね」
なんだその反応は。と魔理沙は憤るが、とりあえず3人で一緒に行動をする。
すると、なぜか仮装した集団、いいんちょ、ハルナ、夕映、那波、夏美、朝倉、そして、刹那と木乃香と出会う。
「あら。霧雨さんに葉加瀬さん、超（ちゃお）さんもこちらにいらしていたのですか」
「どうしたんだ？」
「実はですね。このかさんをめぐって刹那さんと怪しげな女が戦いますのよ」
「はぁ？」

何を言っているのかわからず魔理沙は詳しくはなしを聞くと、
刹那と木乃香がなぜか付き合っていて、恋人同士。それを奪おうとするやつがいる。自分たちが手伝ってあげますわ。
ということらしい。
「……いや、それって……」
木乃香を狙っている敵じゃねーのか。
と魔理沙は内心思うが、言わないでおく。
その後なぜか3人も一緒に行くことになり、
橋に到着すると、橋の上には一人の女。
「ぎょーさん連れてきてくれはっておおきにー。楽しくなりそうですなー」
1日目の夜に出てきた女だな……。
魔理沙は刹那を見る。
「このか様も刹那センパイもウチのモノにしてみせますえー。フフフ」
刹那が一歩前に出る。
「せっちゃん。あの人、なんかこわい」
「安心してください、このかお嬢様。何があっても私がお嬢様をお守りします」
おー。かっこいいねー
魔理沙は後ろからそれを見て思ったのと同じことを思ったのか、周りから拍手が聞こえ、
「桜咲さんかっこいいねー」
「ウチの部に来てくれないかなー」
「桜崎さん。おふたりの愛。感動いたしましたわ。お力をお貸しします」
「だから違うんですってばー!」
刹那は大声で否定するが、いいんちょは全く聞く耳を持たない。
「ホホホホ。そちらの加勢はないのかしら。私たち、桜咲さんのクラスメートがお相手いたしますわ」
「ツクヨミ……と言ったか？　この人たちは」

「ハイ、センパイ。心得てます～」
紙の束を取り出す月詠。
「この方達には私の可愛いペットがお相手しますー。ひゃっきやこー！」
ゆるキャラのような変な生物、妖怪が大量に出てくる。
何も知らない観客がＣＧがすごい、と喜んでいるが、妖怪たちは３―Ａの娘たちの服をめくりあげる変態行為を始める。
刹那は心配でやってきたネギの式神を術で大きくして木乃香を任せる。
そして、橋の上で月詠ＶＳ刹那が始まる。
二刀の攻撃をコスプレのときについてきたおもちゃの剣と自分の剣で防ぐ。
「ふーむ。魔法を使うわけにいかんしなー」
魔理沙はやってきた妖怪を避けると腕をつかんで、そのまま一回転して遠心力を付けてぶん投げる。
そして、いいんちょが変な河童を合気柔術らしき技で一撃でのした。
「ホホホ。着ぐるみで私の相手をしようなどとは愚か。私とネギ先生の間にはどんな障害も無意味ですわ」
なんでネギ？
とネギの姿を見ていない魔理沙は疑問に思うが、いいんちょの頭上に巨大な招き猫が出現。いいんちょを押しつぶしてしまった。
「いいんちょがやられたー。弔い合戦だよー、みんな」
やれやれ。
魔理沙がそうぼやきながらあたりを見ると、ハカセが何かを取り出した。
それは見た感じ銃のような形をしていて、河童の頭に押し当てると、人差し指で引き金を引く。
バンッ！　と大きな音がして河童が吹き飛んだ。
「おおぉおぉー！　ハカセ！　なんだそれ」
魔理沙が葉加瀬に駆け寄って問いかける。

「ふふふ。これは3Dプリンター銃というものです」
「ちょっと待つネ、ハカセ。それはまだ外では開発どころか計画すらされていないハズの技術ヨ。外でそれを使うのは」
「大丈夫ですよー。どうせ見てもわかりませんって」
「イヤイヤ。今の法案でも銃刀法違反になる可能性高いヨ」
超(ちゃお)とハカセが珍しく言い合いをしていて、
「なぁ、これどうやって使うんだ？」
いつの間にかハカセの手にあった銃は魔理沙の手にある。
「敵に向かって、そこを押せば弾が発射されますよ」
「こうか？」
提灯の妖怪に向かって撃つ。
弾が提灯と突き抜け、提灯の妖怪も消し飛ぶ。
「おおぉ！　すげぇな」
「そうでしょうそうでしょう。1丁作るのに1日もいりませんし、材料も合成樹脂で超お手軽に作れるんです」
「めっちゃすげぇぜ！」
楽しそうにハカセと話す魔理沙を見る超(ちゃお)。
（フフフ。予定通りネ。霊夢さんの言う通り、魔理沙さんは化学の魅力を見せるのが一番だったネ。本当は霊夢さんも仲間に入れたいが、霊夢さんは自分を誘っても無駄って言ってたし……）
考え事をしている超(ちゃお)の後ろから河童が襲ってくるが、自身の少林寺拳法で一撃で伸す。
「あ、アレ見て」
観客が騒がしくなりそっちを見ると、お城の屋根の上で忍者姿のネギと、木乃香、そして弓を弾く化け物に、呪符使いの女がいる。
「ネギ!?　なぜここに？」
魔理沙は周辺を見るが、アスナの姿は見当たらない。
「ってことは、木乃香の危険を感じて来たのか？　いや、それにしてはなんで忍者の恰好を……？」
目を細めてよく見る。遠くだからよくわからないが、
「ありゃあ式神か。危険を感じて式神だけ飛ばしてきたのか」

どうする。
この距離だと魔理沙も魔法を使わざるを得ない。外の世界では魔法の存在は隠されているからあまり使うな、と一応紫にくぎを刺されている魔理沙はどうするべきか考える。
「放っておくっていうのは、後味が悪いんだよな」
ポケットにあるミニ八卦炉に振れる魔理沙。
「きーとるか、お嬢様の護衛、桜咲刹那。この鬼の矢が二人をピタリと狙っとるのが見えるやろ！　お嬢様の身を案じるなら手を出さんとき」
完全に人質にされてるな。
弓を構える鬼を見ながら考える魔理沙。
あのでかい弓。威力も速度もかなりあるよなぁ……。
近づいてきた唐傘のお化けを蹴飛ばして再びお城の上に視線を向ける。
すると、風が吹いたのか、木乃香とネギの耐性が崩れて少し動いてしまう。直後、
鬼が弓を射る。
高速で木乃香に向かって飛ぶ巨大な矢、ネギが前に出て手で防ごうとするが、矢が当たった直後、ネギの腕が肘から先が消し飛ぶ。
威力も速度も落ちずに矢が飛ぶ。それが、
月詠との闘いを中断して木乃香の前に手を広げて、自身の体を盾にして防ぐために出てきた刹那の肩に突き刺さる。
そのままバランスを崩し、屋根の上から落ちる。
「やべぇ」
魔理沙は魔法の詠唱を開始する。小さな声で回りに聞こえないように。
すると、木乃香が屋根から飛び降りて刹那に追いついて抱き着く。
そして、水に落ちる直前。魔理沙の詠唱が終わる直前に、
木乃香から暴風が吹き荒れ、光り輝き、刹那の傷が治った。
しかも水に落ちずに浮いて地面に着地する。
これは、木乃香の魔力……か。

とてつもない魔力で傷を一瞬で直した光景に魔理沙は驚く。
「なるほどだぜ」
これが木乃香の力。
「あの傷を一瞬で。確かに魅力的な力だな。私も欲しいっちゃ欲しいぜ」
傷が治ったことに驚く刹那と木乃香。そして、刹那は木乃香を抱き上げてどこかに行ってしまった。
「追いかけるか？」
魔理沙は一瞬そう考えるが、あたりを見渡してもすでに姿はないのであきらめてハカセと超（ちゃお）と一度合流して、シネマ村を楽しんだのち、旅館に戻ることにする。

そして夜。
ＵＳＪから帰ってきた４班。帰りが遅いといいんちょに運動部４人が怒られるが、龍宮と霊夢は４人から少しおくれて歩いている。
ロビーのソファーには、楓が座っており、近くには古菲（くーふぇい）もいる。魔理沙もソファーにいるがなぜか寝ている。
「疲れた……」
「大丈夫か？」
慣れない人込みに疲れ切った霊夢。そこに、
パーララパララパララララーーー。
携帯から音楽が流れ、チャイナ服のような姿の楓が手に取る。
「長瀬でござる。おや、バカリーダー？」
電話の相手は綾瀬夕映。
「む？　どうした夕映殿。まずは落ち着くでござるよ。落ち着いて。ふむ、ほう。山の中？　ふむ」
ポテチを一口食べる。そして、
「つまり、助けが必要でござるな？　リーダー」
「どうかしたか、楓？」
「……何かあったみたいね」

偶然近くを歩いていた龍宮と霊夢、そして古菲（くーふぇい）が反応する。

数十分後、山の中。

白髪の少年によって関西呪術協会の本部は壊滅。全員が石とされ、無事なのはネギとアスナ、そして刹那のみ。木乃香は白髪の少年に連れ去られてしまった。

３人はすぐさま準備して追いかけるが、呪符使いの女が木乃香の膨大な魔力を使い、１５０体以上の鬼やらカッパやらの妖怪を召喚。作戦会議の結果、ネギが木乃香救出のために追いかけ、刹那とアスナは鬼どもの相手をすることに。

カモの策略に乗り、ネギと刹那が仮契約をする。そして、ネギの魔法で２０体ほど削ると、すぐさま杖で飛んで追いかける。

「大丈夫です。私の剣とアスナさんのハリセン。十分彼らに対抗できる力はあります。精々、街でチンピラ１００人に囲まれたようなものだと考えてください」

「それって安心していいのか悪いのか……」

飛んでいったのはネギのみとわかった鬼の１匹が呟く。

「くっくっくっ。随分と勇敢なお嬢ちゃんや」

妖怪１５０体ｖｓ人間２人の戦いが始まる。

が、特に問題もなくどんどん妖怪どもの数が減っていく。

それもそのはず、まずアスナのハリセンは霊夢も驚くほどの退魔能力がある。一撃かするだけでも、召喚魔法が消えて元の場所に戻される。触れればおしまい。つまりは一撃必殺。これは妖怪たちもたまったものじゃない。

しかし、アスナは素人。どうしても隙となる動きがたくさんあり、そこを狙われるが、プロの妖怪退治屋ともいえる刹那がそこをカバーする。

京都神鳴流は妖怪にとっては天敵ともいえる流派。つまりこの２人のコンビは、妖怪にとっては天敵コンビ。分が悪過ぎる。

３分ほどで半数まで減らされ、驚く妖怪たち。
「け、結構いいコンビ、かもね。私たち」
背中合わせで次に来る妖怪を待ち構える刹那とアスナ。
「修学旅行帰ったら剣道教えてよ、刹那さん」
「え？　いいですけど、私もまだ未熟なので……」
「ぐわははは。元気のいい娘っ子達やなぁ」
鬼の一人が豪快に笑う。そこに、
拍手が鳴り響く。
戦場では絶対に鳴り響くわけがない音。
アスナや刹那はもちろん、妖怪たちもその音のする方角を見る。
そこにいたのは小さな鬼。
小さな鬼が拍手をしているのだ。
小さな鬼は薄い茶色のロングヘアーを先っぽのほうで一つにまとめていて、真紅の瞳を持ち、その頭の左右から身長と不釣り合いに長くねじれた角が二本生えている。
服装は白のノースリーブに紫のロングスカートで、頭に赤の大きなリボンをつけ、左の角にも青のリボンを巻いていて、さらに、三角錐、球、立方体の分銅を腰などから鎖で吊るしている。
「いやー。素晴らしい！　素晴らしいよ、お嬢ちゃんたち」
笑顔で拍手を続ける小鬼。拍手をやめると刹那の方を指差し、
「特に神鳴流のお嬢ちゃんはいいね。その若さでその強さ、素晴らしい」
次にアスナの方を指差し、
「あ、もちろん退魔のお嬢ちゃんも素晴らしいよ。素人とは思えない思い切りの良さ、動き、素晴らしい！」
体を前後左右揺らしながら言う。まるで酔っているかのように顔もほんのり赤い。
「おい、子供がこないなところにくるなや」
狐の面を被った妖怪が後ろから小鬼の肩に触れる。直後、
「馬鹿者！　その御方から手を離さぬか！」
小鬼の正体に気づいた鬼の一人が叫ぶ。

その瞬間、狐の面の妖怪が宙を浮いた。
アスナはもちろんのこと、刹那も周りの妖怪も、宙に浮く狐の面の妖怪も何をされたのか理解できない。気がついたら宙に浮いていた。
そのまま背中から落ちる。下が水だったこと、三メートルほどの高さだったため妖怪からすればダメージはほぼない。だが、混乱のあまり起き上がることができない。
「最近の若いもんは私が子供に見えるのかい。確かに小さいけどさー」
腰についているひょうたんを手に取り中身を飲む小鬼。
「い、伊吹様。なぜこちらに」
先程叫んだ鬼が叫ぶように聞く。
「んー？　いやー。こんな時代にこんな大規模召喚なんて珍しいからさー。飛び込んじゃった。見てるだけのつもりだったんだけど、こんな面白いもの見ちゃったらさ、我慢できなくてねー」
ケラケラと笑いながらひょうたんに口をつけて中のものを飲む。
「いぶ、き……。まさか、伊吹鬼!?　酒呑童子か」
「しゅ、しゅてん？」
「さすがは神鳴流。よく勉強してる。そして退魔のお嬢ちゃん。さすがに歴史は勉強しておくべきだよ～」
刹那の顔が真っ青になっていることにアスナは気づく。
「ちょっ。刹那さん。どうしたの!?」
「……まずい。まずいです。もしも本当に酒呑童子だとしたら、私たちではかないません」
「え、なんで!?　あんな子供なのに。さっき投げ飛ばしたのは驚いたけど、私のハリセンで叩けば」
ハリセンをブンッ、ブンッ。と振り回すアスナ。
「退魔のお嬢ちゃん。見た目で判断するのは良くないよ～」
楽しそうに言う小鬼。
「確かに私は見た目から弱そうだもんねー。よーし、わかりやすく見せてあげよう。『ミッシングパープルパワー』！」
両手を挙げて体を伸ばすようにすると、その体がどんどん大きく

なっていき、身長１０メートル以上の巨人となった。
「え？　は？　な、ナニコレ――！」
　アスナが文字通り絶叫する。
「私の能力は『密と疎を操る程度の能力』。こうやって巨大化することもできるし」
　一度言葉を区切ると、その姿が消える。
「え？　き、消えた⁉」
「こんな風に霧みたいにもなれる」
　アスナと刹那の耳元で霧状のままつぶやき、アスナは驚きのあまりハリセンを振り回す。
「霧に当たるわけないだろー」
　元の場所で元の大きさに戻る小鬼。
「さて、これで私と君の実力の差が理解できたと思うけど」
「ふ、ふん。大きくなったら的が大きくなるだけだもん」
「む？　あぁ、確かにそうだね。これは盲点だった。あはは」
　ケラケラと笑いひょうたんの中身を飲む。
「アスナさん。逃げてください」
「え？　なんで⁉」
「酒呑童子と戦うとなると、さすがの私も周りを気にすることはできませんし、絶対勝てないでしょう」
「で、でもそうしたら刹那さんが一人に。しかも勝てないって……」
「ネギ先生がこのかお嬢様を助けてくれるまでの時間稼ぎはできるでしょう」
　刹那が刀を構える。
「手――出すなよ、お前ら。神鳴流の嬢ちゃんは私のもんだ」
　小鬼は後ろの妖怪に向かって言っている。
「退魔のお嬢ちゃんは後ろのやつらが相手してくれるから心配しなくていいよ。殺すなよー。稽古つけてやりな。成長したら戦いたいんだから」
　後ろの妖怪たちがなぜかやる気になっているのか、おー、などと言っている。。

「さて、やろうか。神鳴流のお嬢ちゃん」
「ふーー」
刹那は緊張を解くかのように息を吐く。
「京都神鳴流　桜咲刹那！」
「山の四天王が一人　伊吹萃香」
お互いが名乗る。
「斬る」
「さぁ、踊ろうか」

修学旅行3日目　夜①

「神鳴流奥義　斬岩剣」
　岩を真っ二つにする京都神鳴流の奥義。それを萃香は軽々とよける。
「当たらないよ！」
　萃香は拳を振るってくる。刹那は刀で防ぐとあまりの威力で後ろに吹き飛ばされる。
「ぐっ」
「休んでいる暇なんて与えないよ。戸隠山投げ」
　萃香が右腕をぐるぐると回すと、岩が集まって塊になる。そして、それを刹那に向かって投げつける。
「斬岩剣」
　飛んでくる岩を真っ二つにして防ぐ。が、その岩の陰から萃香が飛び出してくる。
「しまっ」
「頭が固いねー」
　刹那はギリギリ左の拳を回避するが、空いている右手で胸元をつかまれる。
「もっと柔軟に考えな！　天手力男投げ」
　刹那の胸元をつかんだまま高々とジャンプして、ぐるぐると腕を回すと先ほどと同じように岩が集まってきて刹那の体に張り付いていく。そして、そのまま投げつける。
　岩が張り付いているため受け身を取れず地面にたたきつけられる。水によってある程度の衝撃はなくなったが、ある程度のダメージをくらう。
「ん？」
　追撃をかけようとした萃香は何かに気づいたのか立ち止まる。
「ゴホッゴホッ」
　刹那が岩をはがしながら立ち上がる。
「刹那って言ったっけ。嬢ちゃん」

腰に手を当てて刹那を見る萃香。
「刹那。気か魔力、どっちか止めな。気と魔力の同時使用は相反するよ。どこかの素人が気と魔力両方使えば2倍とか言い出したんだろうねー。そう考える気持ちはわからなくはないが……」
刹那はやはりそうだったのか。と考えると、ネギからの魔力の供給を気を使って遮断する。
「気と魔力だけじゃなく、妖力や霊力も同じだ。４つの力はどれを合わせようとしても相反して消し去ってしまう。感化法っていう例外もあるけどね」
まるで教師のように語る萃香。
そして腕をぐるぐる回す。
「さぁさぁ。まだまだ踊れるよね」
萃香は岩を投げる。
刹那はそれを今度は斬らずに飛んで避けるが、そこにもう一つ岩が飛んでくる。
「動きが読みやすい。安直すぎるよ」
「斬岩剣」
空中で回避できないため斬る。その陰から再び同じ軌道で岩が飛んでくる。
刹那はそれがわかっていたかのように刃を返して同じように斬る。
「そう！　そうだ！　私が何をするのか考えるんだ。私の一挙手一投足を見るんだ」
萃香の体が大きくなり先程の半分、5メートルほどの大きさになると、右拳をハンマーのように振り下ろす。
「雷光剣」
その拳を刹那は剣で受け止めるが、刃に通っていた電気エネルギーが爆散することで、萃香の右拳を弾く。
「おおっ」
拳が無理やり上に上げられたため体のバランスを崩して後ろに倒れる萃香。倒れたショックからか、萃香の意思がわからないが、体がもとのサイズへと戻っていく。

「トドメ！　雷鳴剣」
高々とジャンプして萃香めがけて雷をまとった剣を振り下ろす。が、
その剣を倒れたまま、両手の平で挟んで防ぐ。
「ぐっ」
「いいね、いいね！」
倒れたまま足で刹那を蹴り飛ばす。圧倒的に鬼のほうが力が強いため、手のひらに挟まれた刀は動かず、刹那はそのまま刀を手放してしまい、水面を転がっていく。
萃香は立ち上がると、手にある刀を右手だけで、ちゃんと柄の方を持って刃を見る。
「良い刀だ。名のある刀匠が打ったんだろうね。銘は？」
「夕凪」
刹那は立ち上がって武器無しで構える。
神鳴流は武器を選ばない。徒手空拳の技もある。それはもちろん萃香も知っているが、
「うん。良い銘だ」
そう言って刀を上に放り投げる。
クルクルと回転しながら落ちて、刹那の目の前に落ちて、地面に突き刺さる。
「くそっ」
舐められている。刹那はそう感じる。
萃香にとって、この戦いは遊び、いや、遊びですらなく、戦い方を教える場でしかない。刹那はそう感じて自分の不甲斐なさに苛つき出す。
「鬼という種族はね」
それを感じ取ったのか動かずひょうたんの中を飲む萃香。
「大好きなものが2つある。1つは酒。そしてもう一つが、戦いさ」
刹那は自分の愛刀を手に取る。
「この戦いもすごく楽しいよ。敵に教えられているって思ってるのかもしれないけど。その若さでその強さは素晴らしいよ。君はもっと

上に行ける。もっと強くなった君と戦いたい。だから自分の弱さを嘆く必要はないよ」
諭すように言う萃香。しかし刹那の目を見て、ふー、と息を吐く。
「ここが潮時か。悪いけど、刹那には気絶してもらおうか。この敗北を糧に強くなればいい」
これ以上やっても手加減されている、遊ばれている、という意識が付いてしまうと考えた萃香は刹那を見限ってアスナのほうに興味を移そうとしている。
「まだだ。お嬢様が戻るまで、負けるわけにはいかない」
「その気持ちは大事だから、忘れちゃだめだよ」
右足を少し上げると踏み抜くかのように思いっきり地面を踏む。
「さて、次は退魔のお嬢ちゃんだが」
萃香が視線だけアスナに向けると、ハリセンをもつ右手首を捕まれ、上に持ち上げられて宙に浮くアスナの姿が見える。
「あーあ。やりすぎだよ、鵜族め。あれじゃあ私が鍛えるの無理じゃないか」
「アスナさん！」
自分の戦いで目を向けられなかったアスナが捕まっていることに気づいて名を叫ぶ。
直後、遠くで光の柱が現れる。
「な、なんだ!?」
「ほほーう。こりゃ見物やなぁ」
人も妖怪も光の柱を見る。そして、
「どーもー、センパイ。大変そうやなー。あの可愛らしい魔法使いは間に合わへんかったんやろかー。まぁ、ウチには関係ありまへんけどなー」
そこに現れるのは初日と同じ格好の月詠。
「くっ」
月詠のほうへと意識を向けてしまう刹那。
そこに、
「よそ見しちゃダメだろ」

萃香が声をかけ、
「これは勇儀の得意技なんだけど。私も使えるんだよ」
同じ山の四天王の鬼の名前を出して、構える萃香。
「四天王奥義」
萃香は一歩で刹那との距離の三分の一を詰める。
「一歩」
再び同じ距離を1歩で詰める。
「二歩」
月詠へと向けてしまった意識を戻して刀で防ごうとするが、間に合わない。
そのまた一歩で刹那の眼前に行く萃香。
「三歩必殺」
あらゆるものを破壊する鬼の拳が刹那に振るわれる。

四天王奥義「三歩必殺」
山の四天王の一人、力の勇儀の得意技。
一歩進むごとにその力を高め、三歩目で足元から練られた力が拳にたまりあらゆるものを粉砕する最強の拳となる。
刹那は迫りくる死の恐怖から反射的に目を閉じてしまった。
剣士として恥じる失態。だが、いつまでたっても死を呼ぶ拳はやってこない。目を開くと、拳が刹那の目の前で止まっている。青白いかすかな光の壁が拳を止めていた。
「？」
萃香もわからない。刹那はなにかする暇はなかったはず。そう考えて、判断が遅れた。
まるでテレポートしたかのように人影が現れ、萃香の頭をサッカーボールのように蹴飛ばした。
水を切りながら水面を転がる萃香。そして、
「ぐおっ。ぬかったー」
同時に、アスナの右手首を握り上に持ち上げていた鵜族の頭が煙と

なり吹き飛ぶ。
アスナは手放され地面に落ちるが、何が起こったのかわからずあたりを見渡す。
鬼の棍棒の上のほうが砕け、萃香に投げ飛ばされたのと別の個体の狐面の妖怪は肩を射抜かれる。
「これは、術を施された弾丸！　なにやつ！」
木陰から出てくるのは二人の少女。
「随分と苦戦しているようじゃないか、刹那」
「あいやー、化物がたくさんアルね」
一人はライフルを持った龍宮。もう一人は古菲（くーふぇい）。
そして、萃香を蹴った人影は……、
萃香は水面に浮かび考える。
普通に近づいてきたのならば、どんなに素早くても萃香は気づいた。だが、何も気づくことなく蹴られた。そして三歩必殺を防いだもの。
「あはははは」
笑う。誰かわかったから。
零時間移動（テレポート）ができて、自分に恐れることなく攻撃できる人間は1人しかいない。
「久しぶりだなー。れ～い～む～」
起き上がる萃香は刹那の近くで立つ霊夢を見る。いつもと違う巫女服ではない服装に一瞬戸惑うが、顔を見ていつもの霊夢だと思うとニヤッと笑う。
「霊夢、珍しい格好してるな～。似合うぞ！」
親指を立てて、手の形をサムズアップにして言う萃香。
「あら、ありがとう」
霊夢の服装は何か意味不明のアルファベットが白字で胸元に書かれた赤いTシャツに、白いショートパンツ。頭にはいつもと同じリボンで髪を縛っている。
服装を褒められていい気になったのか笑顔の霊夢。それを疑惑の目で見る刹那。

酒呑童子と知り合いとはどういうことだ？
刹那はそう考えて疑惑の目を向ける。
「萃香。あんたこんなところで何してるのよ」
「いやー。こんな大規模召喚魔法なんて久しいからさ。つい飛び込んじゃった」
「飛び込んじゃった、じゃないわよ」
自分の頭をコツンっと叩くような仕草をする萃香にため息つきたそうに言う霊夢。
「でさ、萃香。見てわかると思うけど。私、こっち側なのよね」
刹那を指差す霊夢。
「そうだよねー。わかってるよー」
腕をぐるぐる回す萃香。
「霊夢。ここは幻想郷じゃない。つまり、弾幕ごっこじゃないよ！」
ぐるぐる回す右手に岩が集まる。
「そんなもの。わかってるわよ」
どこからともなく札を手に取る霊夢。
「龍宮！　そっち任せていい？」
「あぁ。そっちは頼んだ」
銃を構える龍宮を見ずに言う霊夢にすぐに答える龍宮。
「合図は？」
「もうすぐ鳴るわよ」
龍宮のもつライフルの銃声が鳴り響く。その瞬間に萃香と霊夢は動き出す。
まず投げられる岩を霊夢は上に飛んで避けて、そのまま空中から近付こうとする。
が、その身体に鎖がまとまりつく。
「施餓鬼縛りの術」
霊夢は鎖を無視して飛ぶ。すると、その身体が消える。
霊夢が無意識に零時間移動（テレポート）をしているのは霊夢と深く知り合っている人妖ならば共通の認識。鎖を外されるのは想定の範囲内。だから萃香は次の動きを読む。読んだ結果、

その場で高くジャンプをする。
直後、その足元を狩るように、水を掻き分ける霊夢のスライディングが通り抜ける。
「ちっ」
萃香の頭上に巨大な火の玉ができる。
「まずっ」
それを見た霊夢は右手を伸ばす。
「『二重結界』」
「『超高密度燐禍術』」
結界と火の玉がぶつかり合う。
「おりゃ」
結界で火の玉を防ぐことに意識が向いている霊夢に近づき、殴り飛ばす。
「楽しいねー、霊夢」
笑顔で無邪気に楽しそうに言う萃香。だが、その光景を見ていた刹那からすると、気が気ではない。鬼の力で殴られた。先ほどの四天王奥義ほどではないにせよ、力の強い鬼に殴られたのだ。
霊夢は水面を跳ね、森の中へと転がっていく。
「まだまだこんなものじゃないよね」
ひょうたんの中身を飲む萃香。そこに、
「夢想妙珠」
霊夢の声とともに森の中から3色の輝く玉が7つ、萃香めがけて飛んでくる。
萃香それを軽々と避けると、
「ミッシングパープルパワー」
巨大化する。そこに森の上から霊夢が飛んできた。見たところ傷らしきものは見当たらない。その霊夢に萃香が拳を振るう。
「封魔陣」
赤と青の結界が互い違いに広がり、萃香の拳を弾く。
そして、胸元に入ると、手の平に霊力の塊ができ、
「陰陽鬼神玉」

胸元にそれをぶつける。すると、どんどん玉が大きくなり、萃香の体を巻き込んで吹っ飛んでいく。
巨大化した萃香が吹き飛ばされたため、あたりに地響きが鳴り響き、地面が揺れる。
「博麗、そして幻想郷。まさか、博麗の巫女か!? 実在したのか」
「はくれいのみこ? なにそれ、刹那さん」
アスナが戦いを見ていて動かない刹那を心配して近づいてきた。
動かないといっても月詠も闘いを見ていて動く気配がないのは気づいていた。月詠は人外の闘いを見て笑顔で楽しんでみている。
「私も噂でしか聞いたことがないのですが、幻想郷という妖怪の楽園が存在し、そこに住むとされる妖怪退治の専門家です」
「妖怪の楽園なのに妖怪退治?」
萃香の倒れた体が小さくなっていく。霊夢はそれを一瞥すると、刹那の隣に着地する。
「妖怪というのは人の恐怖心から生まれるものだから、妖怪だけの場所というのは無理なのよ。だから、人も住む。そして、人は妖怪を退治する。妖怪は人を襲う。そういった関係性が必要なの」
なんの話をしていたのか聞いていたため刹那が言う前に答える霊夢。
「え、ええ!? 人を襲うのはだめでしょ」
「だから、食物連鎖のような関係性がないと世界を維持できないのよ、ってそんなことバカレンジャーに言っても意味ないか」
「なんてすってー!」
呆れたようなジト目で怒るアスナを見る霊夢。
「あとで詳しく図でも使って説明してあげるから、今はこれをどうにかするわよ」
近づいてきた妖怪を見ないで裏拳で殴り飛ばす霊夢。
「特に桜咲。あなた神鳴流の剣士なら妖怪退治屋でしょ。仕事しなさい」
「はい。すみません」
刹那は立ち上がると刀を構える。

そこに3匹の妖怪が襲ってくる。
刹那が1匹を刀で防ぐと、すぐさま刀を返し、
「神鳴流奥義　斬岩剣」
かっぱのような妖怪を真っ二つに斬る。
アスナは狐面の妖怪のトンファーのような武器をかわすと、ハリセンで叩いて煙にする。
「夢想封印」
霊夢から虹色に輝く玉がいくつも出て鬼の妖怪に当たると爆発していき、吹き飛ばしていく。そして、その姿が消える。
「おいおい。手出しするなって言ったろー。お前らじゃあ霊夢にかなわないんだから」
吹き飛ばされていた萃香が元のサイズで出てくる。
「あれだけの技を喰らって無傷なのか」
「無傷、ではなさそうだけど……」
服がところどころ破けているが、怪我のようなものは見当たらない。
「さて、行くよ」
ジャンプする。それだけで一瞬で霊夢たちの目の前に来る萃香。
「四天王奥義『三歩壊廃』」
「まずい」
技名を聞いて霊夢は刹那を平手で押し、アスナを蹴飛ばして2人ともその場から離すと急いで結界を張る。
ギリギリ拳を防ぐことができるが、萃香の体が大きくなり再び殴る。
それも先ほど張った結界で防げたが、ヒビのようなものができてしまい、次で砕けることは誰でも予測できる状態となってしまった。
萃香の体がまたも大きくなって三度、拳を振り下ろす。結界の貼り直しは間に合わない。霊夢はそう判断して、
「龍宮！」
霊夢の声に反応して、他の妖怪と戦ってた龍宮が右手のハンドガンを萃香の頭をめがけて撃つ。

しかし、萃香はそれを頭を上げることで避けてしまう。が、
目線から外れた霊夢は飛ぶ。拳を避けて再び無意識の零時間移動(テレポート)で萃香の眼前に移動。そして、蹴飛ばす。
「お、おおぉぅ」
萃香が背中から倒れて、足元の水があたりに飛び散り、雨のように降ってくる。
霊夢は龍宮の後ろに着地して背中合わせになる。
「助かったわ」
「気にするな」
光の柱に巨人の姿が映り始める。
霊夢は間に合わなかったのね。と考え、
「ありゃあ、両面宿儺じゃないか。よくあんなもん召喚しよう考えるなー」
光の柱の巨人を見て萃香がつぶやく。
「行け！　刹那。あの可愛らしい先生を助けに」
「しかし」
「大丈夫だ。仕事料ははずんでもらうがな」
「え？　そんなものもらえるの？　じゃあ私もほしい」
「わかった。すまない真名」
刹那とアスナが巨人の元へと向かう。
「せんぱーい、逃げるんですかー？」
刹那を追いかけるように月詠も走るが、龍宮が銃を放つ。すると、器用に刀で弾丸を弾く。
「あーん。邪魔してー。神鳴流に飛び道具は効かへんえー」
「知ってるよ」
霊夢が月詠の近くまで飛ぶと、札を大量にばら撒く。すると、札が右手に集まりだし、刀の形となる。
「ふっ」
空中で札の刀を振るう。が、それを小刀で防がれる。
「おもちゃみたいな刀やなー」
右手の刀を振るってくる。それを自分の周りに結界を張って防ぐ。

「あらー。なら」
つばぜり合いようになっていた小刀と札の刀が弾かれる。そして、霊夢は札の刀で月詠を突こうとするが、
「斬岩剣　弐の太刀」
結界が張られたままで通じないはずなのに刀を振るう。すると、結界をすり抜けて、札の刀の刃に当たる部分が真っ二つに斬られる。
「なっ」
すり抜けるのは予想外で霊夢も驚く。
「封魔陣」
とっさに術を発動。赤と青の結界が互い違いに広がっていき、月詠を弾き飛ばす。
霊夢は龍宮と並ぶところまで下がる。
「あー。桜咲行っちゃったわね。今のやつの詳細聞きたいのに」
妖夢呼びたい。
霊夢はそんな無理なことを考え出す。
「おいおい、れーいーむー。こっちで遊ぼうよー」
立ち上がった萃香がゆっくりと歩いてくる。
「あのちっちゃいの強いアル。戦いたいアル」
古菲（くーふぇい）も近くに来てそんなことを言い出す。
「あのねー。あれ、鬼よ。しかも鬼の親玉クラス。さすがに古（くー）じゃ無理よ」
「とはいえ、あの神鳴流剣士もどうにかしないといけないが、あれを古（くー）に任せるのも無理だろ」
「龍宮は？」
「正直、神鳴流相手に拳銃は相性が悪いな」
「こっちもまさか、結界すり抜けるなんて想定外よ」
「となると、この場にいる人間、全員が神鳴流と相性が悪いことになるな」
「最悪ね。魔理沙こっちに連れてくればよかったわ」
寝ていた魔理沙に行くことを書いたメモを残しておいた。魔理沙のことだから膨大な魔力につられて向こうに行っただろう、というあ

る一種の信頼による考え。
「いない人(やつ)のことを考えても仕方がない。誰が誰の相手をするか」
「その場その場で状況に合わせるしかないわね。まず私が萃香を――」
「話し合いはそこまでにしようかー」
萃香が走って迫ってくる。
そこに古菲(くーふぇい)が前に出て、萃香と右拳がぶつかり合い、衝撃が辺りに広がる。
「おぉ！」
萃香が感動の声を上げる。一度離れる。そして、
「お嬢ちゃん。いいね！　すごくいい！　名前は？」
「古菲(くーふぇい)アル」
「私は伊吹萃香。その名前、そして先ほどからの体術。大陸のほうの出身かな」
「うむ」
それを聞いた萃香が笑う。
「ハハハ。いやー。素晴らしい！　だが、気の練りこみが足らないな。おそらく、鍛錬によって自然と気に目覚めたタイプだね。この時代にそんなのがいるなんてすばらしい！」
「バカにされているアルか？」
「バカに？　違う、誉めているのさ。素晴らしい！」
ひょうたんの中身を飲む萃香。
「気の練りこみについての練習が必要だね。あとは実践あるのみ。さぁ、やろう！」
そこに銃弾が撃たれ、萃香はそれを軽々と回避する。
「古(くー)。お前は向こうをやれ。私がこっちの相手をする」
龍宮が古菲の前に立つ。
「むぅ」
不満そうな顔をするが、仕方がなく鬼やら鵜族の群れのほうへと駆ける。
「銃使いのお嬢ちゃんも素晴らしいよ。実戦経験が多いんだろうね。

名前は？」
「龍宮真名」
「私は伊吹萃香。鬼をしているよ」
萃香は霊夢のほうを見ると、札でできた刀を2本作って二刀流にして、空中での移動を加えた三次元の攻撃で月詠と戦っている。
「霊夢は忙しそうだね。じゃあ真名、勝負といこうか」
龍宮が両手の拳銃を構えて、頭めがけて撃つ。

修学旅行3日目　夜②

アスナ、刹那と離れて木乃香救出に杖で飛んで向かうネギ。そこに、昼間に戦った犬上小太郎という少年が襲撃してくる。
影から出てくる式神のような黒い犬、気による身体強化でネギを襲う。
戦いたいだけならあとで、というネギに対して、小太郎は今の決着を望み、今すぐ自分を倒せば木乃香の救出に間に合うかもしれない、という言葉から、ネギは頑固さと子供っぽさが悪い方向に出てしまい、それに応じてしまう。
しかし、そこに楓が助けに入る。楓の助言でネギは先に向かい、小太郎の相手は楓がすることとなる。そして、
杖で飛んで召喚魔法の儀式場に近づくネギ。そこに、白髪の少年が式神を召喚。ネギを足止めしようとするが、
自分に魔力を供給、杖の速度を最大にすることで1撃で倒しながら突破する。
さらに、風を使って下にある湖の水を霧状にして目隠しをして、さらに杖を囮にして、白髪の少年に拳を振るう。しかし、当たる直前に透明の壁にさえぎられる。
右拳をつかまれてしまい、逃げることもできなくなる。
慣れない近接を選んだことを蔑み、期待外れだという白髪の少年。しかし、
不敵に笑うネギ。左手を胸元にあて、そして、
『魔法の射手　戒めの風矢』が無詠唱で発動。遅延呪文(ディレイ・スペル)で0距離で発動。0距離ならばどんな強力な魔法障壁があっても効力が最小になる。それを利用したネギの作戦勝ち。体がどんどん縛られていく。
数十秒の時間稼ぎができる。その隙に救出しようとするが、木乃香の姿がない。周りを探そうとすると、
四本腕の巨人が光の柱の中に現れていて、木乃香と呪符使いの女は巨人の顔の付近で浮いている。
ネギはまだ完全に封印が解けていないことに気づき、今自分が使え

る一番強い魔法を使おうと呪文を唱える。
『雷の暴風（ヨウイス・テンペスターズ・フルグリエンス）』ネギが今使える魔法で一番強い魔法。
雷を纏った暴風が一直線に巨人、リョウメンスクナノカミへと向かう。が、
直撃を受けても無傷。ダメージが一切ない。
「そ、そんな」
そこに白髪の少年の縛っていた魔法の射手が解ける。
「善戦だったけど。残念だったね」
白髪の少年が一歩ずつ近づいてくる。そこに、
「なるほどなるほど。確かに強力な魔法だぜ。だが」
声が聞こえネギもカモも、白髪の少年も上を見る。すると、そこにはホウキに乗った魔理沙の姿が。
「マスタースパーク!!!」
ミニ八卦炉を構えて、得意の極太レーザーをリョウメンスクナノカミに放つ。
数秒間のレーザー。だが、リョウメンスクナノカミは無傷のまま立っていた。
「なにっ」
得意の必殺技が通じていないことに魔理沙は驚くが、降りてネギの近くに行く。
「悪いな、ネギ」
「き、霧雨さん。今のはいったい？」
「なるほど。君は脅威になりそうだ」
白髪の少年がすぐそこまでくる。
「殺しはしない。けれど、自ら向かってきたということは、相応の傷（リスク）を負う覚悟はあるということだよね」
魔理沙は八卦炉を向ける。
「ネギ君はもう限界だね。よく頑張ったよ」
右手をネギに向ける。魔理沙はミニ八卦炉に魔力を込める。
「やれ、兄貴」
カモの言葉と同時にカードを取り出すネギ。

「召喚（エウオケム・ウォース）・ネギの従者（ミニストラェ・ネギィ）・神楽坂明日菜（カグラザカアスナ）・桜咲刹那（サクラザキセトウナ）」
魔法陣が表れて、２人の姿が現れる。
「おぉ!? 召喚魔法か」
「アスナさん、刹那さん、僕、すいません。このかさんを」
「わかってるネギ！ ってぎゃああ。何よあれ」
後ろを見たアスナがリョウメンスクナノカミの姿に驚く。
「それで、どうするの？ ヴィシュ・タル・リ・シュタル・ヴァンゲイト（バーシリスケ・ガレオーテ）小さき王（メタ・コークトー・ポドーン・カイ）・八つ足の蜥蜴（カコイン・オンマトイン）・邪眼の主よ」
「なに、これは、始動キー!? こいつ、西洋魔術師、しかもこれは。姐さん、やつの詠唱を止め」
「ダメです。間に合わない」
カモが止めるように言うが、間に合わない。
「時（プノエーン・トウー・イウー）を奪う（トン・クロノン・パライルーサン）・毒の吐息（プノエー・ペトラス）を」
「マスタースパーク！」
「『石の息吹（プノエー・ペトラス）!!』」
石化の煙が爆発するように一気に広がるが、その煙をレーザーが白髪の少年ごと吹き飛ばす。
「き、霧雨さん!?」
「どうだ！」
煙で何も見えない。魔理沙が一歩進むと、煙の隙間から無傷の白髪の少年が見え、
「『石の息吹（プノエー・ペトラス）!!』」
再び煙がばらまかれる。
４人はなんとか逃げ、数十メートル遠くへと逃げた。
だが、ネギは煙が掠ったらしく、右手が石化し始めていた。
「大丈夫。かすっただけです」
刹那はそれを見て、何か覚悟を決めたようで、
「３人は今すぐ逃げてください。お嬢様は私がすく出します。お嬢様は千草と共にあの巨人の肩のところにいます。私ならあそこまで行けますから」
「私だって行けるぜ」

「申し訳ありません。私は、このかお嬢様にも秘密にしていたことがあります。この姿を見られたら、もうお別れをしなくては、なりません」
ん？　妖力？
魔理沙は刹那からわずかだが、妖力が出ていることに気づく。
「でも、今なら、あなた達になら」
刹那は力を入れると、背中から大きな白い翼が現れる。
「これが、私の正体。奴らと同じ、化け物です。でも、誤解しないでください。私のお嬢様を守りたいという気持ちは本物です。今まで秘密にしていたのは、この、見にくい姿をお嬢様に知られて嫌わるのが怖かっただけなんです」
「ふぅん」
「ひゃっ」
アスナは全く気にせずに翼に触れ、翼にふれ、匂いを嗅いだり抱き着いたりしている。
「あの、明日菜さん？」
そして、背中をたたく。
「なーに言ってんのよ、刹那さん。こんなの背中から生えてくんなんてカッコイイじゃん」
「え」
「あんたさぁ、このかの幼馴染でそのあと2年間も陰からずっと見守ってたんでしょ？　その間、あいつの何を見てたのよ。このかがこのくらいで誰かのことを嫌いになったりすると思う？　ホントにもう、バカなんだから」
「あ、明日菜さん」
笑顔で言うアスナに刹那が涙目になって名前をつぶやく。
「ほら、早く」
「ハイ！」
翼を広げる刹那。そして、煙の中からゆっくりと白髪の少年が現れる。
「ネギ先生。このちゃんのためにがんばってくれてありがとうござい

ます」
翼をはばたかせ、白髪の少年のはるか上を通り過ぎて、リョウメンスクナノカミへと向かう。
それを白髪の少年は止めようとするが、魔法の射手を一本放って止める。
「さて、ここからどうしようか、カモ君」
「ああ。こっちはもう手を出し尽くしちまったしな。そっちの姉さんは？」
「私はまだ手はあることがあるが。こいつ相手に通じるかわからないぜ……」
魔理沙も手持ちの魔道具を手で触れるだけで探る。
『坊や。聞こえるか？　坊や』
頭に響く声が突如として鳴り響く。
「こ、この声は!?」
『フフフ。わずかだが、貴様の闘いのぞかせてもらったぞ。まだ限界ではないハズだ、坊や。意地を見せてみろ。あと1分半持ちこたえられたなら私がすべてを終わらせてやろう』
「な、なんだこの声。どこかで聞いたような？」
『ぼーや、さっきの闘い、作戦といい見事だった。だがな。貴様、少し小利口にまとまり過ぎだ。今からそれじゃ、とても親父（あいつ）にゃ追いつかんぞ？　たまには後先考えず突っ込んでみたらどうだ。ガキならガキらしく、あとは大人に任せな」
「アスナさん、霧雨さん、いきます！」
「ＯＫ」
「ネギ、魔力もまだ残っている私がまず出る。後ろからサポートを頼むぜ」
「はい」
魔理沙が前に出て、後ろで2人が構える。
「来るのかい？　では、相手をしよう」
「ＧＯ！」
カモの言葉と同時に魔理沙は自分の周りに入れ物のようなものを

投げる。すると、それが爆発して、緑色の魔力の弾が白髪の少年に向かって飛ぶ。
「マジックミサイル！」
そして、と付け加えて、ホウキの後ろにミニ八卦炉を付けて、
「ブレイジングスター」
ミニ八卦炉の力で超高速で白髪の少年に突進するが、
白髪の少年の直前で壁のようなものに止められる。
「くっ。かてぇ」
次の瞬間、魔理沙は横から蹴飛ばされ、湖の水面を何度も跳ねて、湖を超えて森の中へと転がって行ってしまった。
「き、霧雨さん！」
ネギが心配して声を出し、アスナはハリセンをもって突撃する。
しかし、白髪の少年の姿が消え、後ろに現れると上からの蹴りで足場の橋にたたきつけられる。
次にネギの後ろに現れて左手で殴り飛ばされる。
そのままアスナとぶつかり2人がさらに遠くへと転がっていく。
さらに白髪の少年の追撃。高速で殴り、動きを止めると、肘で殴り飛ばして転がす。そして、
「ヴィシュ・タル・リ・シュタル・ヴァンゲイト　小さき王（バーシリスケ・ガレオーテ）・八つ足の蜥蜴（メタ・コークトー・ポドーン・カイ）・邪眼（カコイン・オンマトイン）の主よ」
上に飛んで上空から輝きだした人差し指と中指をくっつけてネギとアスナに向ける。
「その光（ト・フォース）・我（エメーイ・ケイリ・カティアース）が手に宿し（トーイ・カコーイ・デルグマティ）・災いなる（トク）・眼差し（セウ）で射（サ）よ（トー）」
アスナがネギをかばうように抱きかかえる。そして、
「『石化（カコン・オンマ・ペトローセオース）の邪眼』!!」
光線がネギたちを横切り、切断するかのように走ると、足場の橋も光線が触れた近くは石になる。ネギの後ろの橋は砕け落ち、アスナは服だけが石化していた。
「やはり。魔力完全無効化能力者か？」
白髪の少年がその光景をみてつぶやき、魔力のこもった拳を振るおうとするが、その腕はネギが手首をつかんで抑える。

「あ、アスナさん。大丈夫、ですか？」
「大丈夫よ。いたずらの過ぎるガキには、おしおきよ」
服が砕け上半身だけ裸体があらわになるが、気にせずハリセンで白髪の少年を叩く。
すると、あたりに砕けるような音が聞こえ、
ネギが石化している右手でその顔を殴る。
アスナのハリセンの退魔能力で魔法障壁がなくなり拳が入った。ネギの懇親の一撃で顔は後ろを向いている。そして、
「身体に直接、拳を入れられたのは、初めてだよ。ネギ・スプリングフィールド」
顔をネギのほうに向ける白髪の少年。しかし、
その眼前には、八角形の物体が広がった。
「!?」
黄色い魔法陣が浮かんでいる何者かの手でつかまれている八角形の物体、ミニ八卦炉。
魔理沙が横からものすごい勢いで戻ってきて、上からさかさまでネギと白髪の少年の間に手を伸ばし、白髪の少年の眼前にミニ八卦炉を突き出している。そして、
「ファイナルスパーク」
魔法障壁がない状態でレーザーが直撃してしまう。
「き、霧雨さん」
横から流れるように魔法を放った魔理沙はネギのところで止まることができず、その勢いのまま進んでいくが、反転して足を下に戻すと、水をまき散らしながら急ブレーキして止まる。
「すまないぜ、ネギ。ってか、霧雨って言いづらいだろ、魔理沙でいいぜ」
煙によって白髪の少年はどうなったのかわからない。だが、その方角に魔理沙はミニ八卦炉を向ける。
「行くぜ。ファイナルマス――――」
とどめに最も威力のある、最強の魔法を使おうとするが、眼前に広げられた手が現れて魔理沙の視界を封じる。

隙間から見えた光景、それは白髪の少年の姿。
まずい。
魔理沙はそう考えるが、回避は不可能。反撃も無理。ファイナルマスタースパークの準備中でミニ八卦炉も使えない。
「永久石（アイオーニオン・ペトロー）――――」
言葉はわからない。だが、この一撃は死の一撃。
直感的に理解するが、魔理沙はどうすることもできない。
そして頭に浮かぶのは、まずミニ八卦炉を作ってくれた半妖、森近霖之助の顔。
これが、走馬燈か。
死を回避するために、今までの記憶から解決策を探るという説がある走馬燈を見て、なんでこーりんの顔が浮かぶんだよ、と魔理沙は内心笑う。
次に思い浮かぶのは、霊夢、そして同じ魔法使いのアリス・マーガトロイドとパチュリー・ノーレッジ。
そして、最後に浮かぶのは、思い出したくもない両親の顔。
最後にそんなやつの顔見せるんじゃねー。
解決策は見つからない。
死を覚悟した魔理沙。だが、
魔理沙の眼前に広げられた手の手首が突如掴まれて、魔理沙の眼前から動く。
白髪の少年と魔理沙はその手の持ち主を見るために視線を下げる。すると、水面に浮かぶ影から一人の女が出てきていた。
「うちの坊やが世話になったようなだな、若造」
そして、影から出てきた人影は一撃で白髪の少年を吹き飛ばし、水面の水を分けながら進んでいき、そのまま湖の中へと消えていった。
出てきたのは、金髪の長い髪に黒いワンピースのような服の少女。
「え、エヴァンジェリンさん！」
橋の上からネギが少女の名前を言う。
「これで貸し借りはなしだな、ぼーや」
「え、エヴァンジェリン……？　ってこの妖力!?」

「霧雨か。奴が最後に使おうとしたのは永久石化だ。危なかったな」
「あ、あぁ、助かったぜ。このお礼は今度精神的に」
「ちゃんと実物で返せ」
　そんな話をしていると、リョウメンスクナノカミが結界に包まれる。
「ちゃ、茶々丸さん!?」
　アスナが高い視力で空を飛ぶ茶々丸が銃を放ったのが見えてつぶやく。
　そして、エヴァンジェリンの周りに蝙蝠が大量に近づいてきてマントになる。
「ぼーやはよくやったよ。だが、まだまだだな。いいか？　このような大規模な戦いで魔法使いの役目とは、究極的にはただの砲台！　つまり火力がすべてだ」
　お。エヴァンジェリンいいこと言うぜ。
　弾幕はパワーの格言をよく言う魔理沙はそんなことを思う。
「私が今から最強の魔法使いの最高の力を見せてやる」
　高笑いをしながら空を飛ぶエヴァンジェリン。だが、途中で止まって振り向くと、
「いいな！　よーく見ておけよ！」
　なぜかネギとアスナを指さして念押しをする。
「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック　契約に従い・我に従え・氷の女王・来れ・とこしえのやみ！・えいえんのひょうが!!」
　リョウメンスクナノカミを中心に周辺が一瞬にして凍り付く。
「あ、あんた何者や」
　せっかく誘拐した木乃香を刹那に奪われ、しかも突如として現れたやつに結界でリョウメンスクナノカミを一時的とはいえ封印されてしまった呪符使いの女が叫ぶ。
「くくく。相手が悪かったな、女。ほぼ絶対零度、１５０フィート四方の広範囲完全凍結殲滅呪文だ。そのデカブツでも防ぐことはかなわずぞ」

すげぇ威力だ。
自分の魔法とは全く違う、圧倒的な力に魔理沙は驚く。
外の世界の魔法に感動をしていると、エヴァンジェリンが続きの呪文を言う。
「全ての命ある者に等しき死を・其は安らぎ也（パーサイス ゾー サ イ ストン・イソン・タナトン ホ スアタラクシア）」
最後振り返りながら指を鳴らす。
「『おわるせかい（コズミケー・カタストロフェー）』ふっ、砕けろ」
その言葉通り、リョウメンスクナノカミは凍り付いたまま砕け散った。

修学旅行3日目　夜③

「くくくく。アハハハハ。バァカめ！　伝説の鬼神か知らぬが私の敵ではないわ！」
「すげぇぜ、エヴァンジェリン！」
　魔理沙が鼻息荒くネギたちの近くに来て、そこにエヴァンジェリンもおりてくる。
「どーだ、ぼーや。私のこの圧倒的な力、しかと目に焼き付けたか？ん？」
「すごいよ、エヴァちゃん。やるじゃん！　最強とか自慢してただけあって見直しちゃった」
　いや、まぁ、そりゃそうだろう。吸血鬼由来の強力な妖力に、オーラみたいに放出されちゃってる魔力。やばいだろ。
　アスナの言葉を聞きながらそんなことを考え、ついでに、レミリアより強いんじゃね？　と考えてしまう。
「す、すごかったです、エヴァンジェリンさん」
「そーかそーか、よしよし」
　ネギの言葉に笑顔でめっちゃ喜ぶエヴァンジェリン
「でも、登校地獄の呪いは？」
「あ、そーよ。学園の外には出られないんじゃなかったの？」
　ああ。そういうことか。
　魔理沙は今の会話で大幅に理解する。
　エヴァンジェリンは強力な吸血鬼だが、投稿地獄という変な呪いで学園に封印されてしまっているのだと。
「それですが、強力な呪いの妖精をだまし続けるため、今現在、複雑高度な儀式魔法の上、学園長自らが5秒に1回『エヴァンジェリン（マスター）の京都行きは学業の一環である』という書類にハンコを絶えず押し続けています」
「今回の報酬として明日、私が京都観光を終えるまで、じじいにはハンコ地獄を続けてもらう」
　いや、それ、儀式を変えてやれよ。どうにかして書類1枚で1日持

つようにすればいいのに。どうにかならなかったのか？
　魔理沙はそう考えて学園長をちょっとだけ心配する。
「この事件はそもそもじじぃの見通しの甘さが原因だ。この程度の苦労、当然だ！　投稿地獄の呪いと学園結界から逃れた今の私の力はほぼ全盛期と同等。反則気味の最強状態というわけさ」
　いやー。強すぎだろ。
　内心冷や汗をかく魔理沙。でも、戦ってみたい！　とも思っている。
「ふふ。久々に全開でやれて気持ちよかったよ、ぼーや」
　笑顔でハートマークがつきそうな甘い声で言うエヴァンジェリン。

「はぁ、はぁ」
　霊夢が肩で息をする。服はボロボロでところどころ肌が見えており、一部、服の下に仕込んでおいた防御用の札も服の穴から若干見えている。
　霊夢と対峙する月詠は息が切れておらず平然としているが、スカートもストッキングもビリビリとなっている。
「ふむ。どうやら決着がついたみたいだね」
　光の柱が消えたことを見て萃香が言う。
「お嬢ちゃんたちの勝ちだ。どうする？　お嬢ちゃんたち」
　ひょうたんの中身を飲む萃香。
「こっちは助っ人なんでな。そっちが退くなら戦(や)る理由はない。お前はどうなんだ？　神鳴流剣士」
　銃をしまう仕草をする龍宮。霊夢もボロボロになっている札の剣をバラバラにする。
「そうですねー。お給料分は働きましたし。センパイと戦えへんかったのは残念ですけど。ウチも帰りますぅ～。刹那センパイによろしくお伝えください、封印術のお姉さん」
「いやよ。龍宮やってあげて」

「嫌いすぎだろ」
　生き残りの妖怪たちも煙となっていき、
「ほななー、お嬢ちゃんたち」
「なかなか楽しめたぞ、大陸の拳法使い！　さっきの坊ちゃん、嬢ちゃんたちにもよろしゅうな！」
「久しぶりに愉快やったわ。今度会ったときは酒でも飲もう」
　それだけ言い残して完全に消えてしまう。
「私が付き合ってやるわよ。幻想郷に来たらね」
「私たちは未成年なのだがな」
「結構いい人たちだったアルね」
　霊夢はふぅっと息を一度吐くとあたりを見る。すると、なぜかまだ萃香が残っていてひょうたんの中身を飲んでいる。
「さっさと帰りなさいよ」
「霊夢、今度と言わずに今飲もうよ」
「イヤ。疲れてるの。それに、さっきの巨人をキチンと封印されているか確認しないと」
「あれはリョウメンスクナノカミだね。霊夢ならまた封印解けても対処できるよ」
「イヤよ。めんどくさい」
　霊夢は札を取り出すと萃香に投げる。
　萃香はそれを避けると煙となり帰ろうとする。
「じゃあーねー、宴会の時に会おう」
　完全に姿が消えたのを霊夢が確認すると、軽く空を飛ぶ。
「さっきの巨人のところに行きましょ。多分ネギ先生たちもまだそこにいると思うし」
　霊夢だけが空を飛び、他２人は走ってネギのもとへと向かう。

「いいか、ぼーや。今回のことを私が暇なときにやっている日本のテレビゲームに例えるとだな、最初のほうのダンジョンとかで死にかけていたらなぜかラスボスが助けてくれたようなものだ」

「なんだその例えは」
「次はこんなことが起こっても私の力は期待できんぞ。そこんところは肝に命じておけよ」
魔理沙のツッコミを無視してエヴァンジェリンは次は助けてやらんぞ、と説明している。
が、ネギは小さな声で返事をして、腕の石化と疲労がたまっているのが原因なのか、顔色が悪い。
エヴァンジェリンはさすがにそれを心配して大丈夫か声をかけると、突如ネギがエヴァンジェリンの名前を叫んで走り出し、エヴァンジェリンに抱き着く。
まさかの行動にエヴァンジェリンも驚くが、次の瞬間、白髪の少年が近くに現れて魔法を放とうとしたのが見える。
「障壁突破(ディエルクサストー)『石の槍(ドリュ・ペトラス)』」
「バカっ！　どけ！」
エヴァンジェリンはネギを弾き飛ばす。その瞬間、床から石の槍が何本も飛び出し、一本がエヴァンジェリンのお腹に直撃、貫通する。
「がっ、ぐっ。貴様！」
「エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル。人形使い(ドールマスター)か」
「ふっ」
口から血を吐き、苦しそうなエヴァンジェリン。だが、その身体が一瞬にして何匹もの蝙蝠となり、白髪の少年の後ろに蝙蝠が集まってエヴァンジェリンの姿が出来上がる。
「その通り！『不死の魔法使い』さ」
魔力がこもった一撃が、足場ごと、白髪の少年を削り取る。
「なるほど。相手が吸血鬼(ハイ・デイライトウォーカー)の信組では分が悪い。今日のところは僕も退くことにするよ」
体が真っ二つになっている白髪の少年はそう呟くと、完全な液体となって消えてしまう。
「幻影……逃げたのか」
その光景を見て魔理沙がつぶやく。
「え、エヴァちゃん。今のって」

「ふむ。今のガキも人間ではないな。動きに人工的なものを感じた。どこの手のものかはわからんがな。まぁ、安心しろ。修学旅行中は私がついてる」
　服に大きな穴が開き、へそが見えてしまうが全く気にせず口元の血を手で拭う。
「じゃなくて今、岩がグサーって、血がドバーッて」
「ん？　ああ、吸血鬼、特に真祖はただの剣や銃では指南。映画とかであるだろ。再生は疲れるしメンドイからキライなんだが……」
　大慌てのアスナに対して冷静なエヴァンジェリン。
　無事だった後継を見てネギが安心するが、地面に倒れこんでしまう。
「ど、どどどうしたぼーや！」
「ネギ先生!?」
「ネギ、ちょちょちょっと」
「ネギ!?」
「兄貴、やべぇ。右半身が石化を…」
　全員ネギに駆け寄ると、ちょうど木乃香と刹那、楓に夕映に小太郎が来て、遅れて龍宮と古菲と霊夢も到着する。
「危険な状態です。ネギ先生の魔法抵抗力が高すぎるため、石化の進行速度が非常に遅いのです」
　茶々丸がネギの診察を始める。
「このままでは首部分まで石化した時点で呼吸ができず、窒息してしまいます」
　最悪のパターンが伝えられ、全員慌てだす。
「ど、どうにかできないの!?　エヴァちゃん」
「わ。私は治癒系は苦手なんだよ、不死身だから」
「そうだ！　幻想郷に行けば永琳なら治せるだろ」
「アホなこと言わないで。ここから幻想郷には時間がかかりすぎる。紫のスキマ移動がないと間に合わないわよ」
　魔理沙は霊夢の零時間移動ならば、と考えるが、霊夢自身は無意識で使っているので意識的に使うことができない。

「昼に着くっていう応援部隊なら治せるだろうが、間に合わねぇ」
　そこに、
「お嬢様」
「うん」
　刹那が木乃香の名を言うと、木乃香がアスナに近づいて、
「あんな、アスナ。ウチ、ネギ君とチューしてもええ？」
「な、何言ってるのよ、このか。こんな時に」
「あわわ。ちゃうちゃう。あの、ほら、ぱ、パクテオーとかいうやつや」
　ぱくておー？
　霊夢と魔理沙は話がわからず頭に？　が浮かぶ。
「みんな、ウチ、せっちゃんにいろいろ聞きました。ありがとう」
　古菲、龍宮、夕映、楓、エヴァンジェリン、霊夢、魔理沙のほうを見て言う木乃香。
「今日はこんなにクラスのみんなに助けてもらって、ウチにはこれくらいしかできひんから」
　ネギを抱きかかえる木乃香。
　仮契約（パクティオー）には対象の潜在能力を引き出す力がある。
　木乃香の力を引き出すことで、シネマ村で刹那を治したようにネギを治そうとする。
　木乃香とネギの唇が触れる。
　するとシネマ村のように魔力の光が輝き、ネギの石化が治ってネギが目覚める。
「うっ。このかさん？　よかった、無事だったんですね」
　全員が目覚めたことを喜び、日が昇ってから応援部隊がみんなの石化を治すことで、この事件は解決。

　その後、一休みしていたところ、刹那が鵜族とのハーフだとばれたことで消えようとしたのをネギが止めていたところ、
　旅館に飛ばしたみんなの身代わりの式神が大暴れしていると情報が来て、全員大慌てで帰ることに。
「ホラ、刹那。身代わりはお前の専門だろ」

「せっちゃんはよー」
「刹那さん。僕たち黙ってますから」
「仕方ないですね、ありがとう、ネギ先生」
涙をぬぐって言う刹那。そして全員慌てて旅館に帰還する。

修学旅行４日目～５日目

４日目。昼間の露天風呂。
４班は昼間っから露天風呂に入っている。
「いよいよ明日で修学旅行も終わりだねー」
「ものすごく長かったような、短かったような。さすがに四日目ともなるとみんなだらけモードやな」
慣れていない人ごみや萃香との戦闘で疲れ切った霊夢は口まで湯船につかり目を閉じている。
口から息を吐き、ぶくぶく泡も出している。
「何が一番良かった？」
「んー、やっぱり二日目のネギ君争奪戦かなー」
「うん。面白かった」
「私は儲かったからよかったわ」
「ええー、ダメダメ」
亜子の質問にまき絵が答え、アキラが同意して、霊夢は口だけ湯から少し出して答えるとすぐにまた潜る。ところが、裕奈だけ否定して、
「負けたし正座の痛みしか覚えてないよ！」
そう言って身体を洗っていた龍宮のほうへ振り向き、
「それよりＵＳＪだよ、ねぇ！　龍宮さん」
「ん？　あ、あぁ。そうだな」
いきなり話を振られて困惑しながら答える。と、龍宮が何か気配を感じ取る。
桶の下に隠してあった銃を取り出そうとするが、パシャっと写真が撮られる音が鳴る。
そして、草むらの中から朝倉が出てくる。
「コラ―。何やってんのよ、朝倉」
「いや、ホラ。記念写真……班別の」
「盗撮やん」
「こりゃ高値で売れる」

「売るなー！」
朝倉が逃げ出す。
霊夢は相変わらず口まで湯船につかって口から泡を吐いている。
そして2班では、夜いなかった古菲（くーふぇい）を超（ちゃお）とハカセが尋問していた。
「昨夜はどこ行ってたネ。さ、吐くヨロシ」
口に肉まんを詰められ喋れない古菲。
「フオレハヒヘナハアフネ（それはいえないあるね）」
「仕方がないデスね。では、ニューマシーンの実験体に―」
ハカセが変なマシンを取り出す。手足と顔の付いたせいろの機械。
それがどんどん古菲の口に突っ込んでいく。
「しゃべるまで肉まんをほおばってもらいますよぉー」
その光景を見ながら魔理沙が肉まんを食べる。
「むむっ。いいね、くーちゃん。こっち向いて」
声が聞こえ全員がそっちを向くと、いつの間にか部屋に入ってきた朝倉が写真を撮った。
「もがっ」
古菲は急いで口の中の肉まんを飲み込むと部屋から逃げた朝倉を追いかけた。
そこにお風呂あがりの霊夢が部屋にやってきて、
「魔理沙、ちょっと付き合いなさい」
「どっか行くのか？」
「ええ」

エヴァンジェリンがネギたちを巻き込んで京都観光しているとき、
昨夜の闘いの場所、湖のど真ん中。リョウメンスクナノカミの封印の場所に霊夢と魔理沙が来ている。
「昨日の夜、お前が残って封印したんだろ？」
「そうだけど。あれ、簡易的にやったやつだから、念のためキチンとしておこうかと」

札が大量に飛んで札同士を線で結べば魔法陣のような形になるように浮いている。
「魔理沙、いったん封印を解除するから、もしもの時はよろしく。すぐに封印するけど」
「あいよ」
目を閉じて集中する霊夢。
「解除、封印」
解除の言葉と同時に一瞬、リョウメンスクナノカミの姿が現れるが、続けていった封印の言葉と同時にその姿が消える。
「うん。これで問題ないわ」
「一瞬で終わったな」
「準備しておけばこんなものすぐに封印できるわ」
旅館に帰ろうとする霊夢と魔理沙、そこに木乃香の父、近衛詠春が近づいてきた。
「スクナの再封印、ありがとうございました」
「おう、長さんか」
「キチンと封印したから、このかの力を使っても復活は一苦労するわよ」
「ありがとうございます。さすがは博麗の巫女ですね。我々が封印するよりも強固な封印です。これならもう二度と封印が解けることはないでしょう」
「じゃ、私たちは帰るわね」
空を飛ぶ霊夢と魔理沙。
「お待ちを。これからネギ君たちと会う予定です。よろしければご一緒にどうです？　ネギ君のお父さんの別荘に行くのですが」
「お。面白そーじゃねーか。霊夢、行こうぜ」
「……わかったわ。いきましょ」
一人で帰ってもいいのだが、仕方なく霊夢も詠春についていく。
関西呪術協会の本部から少し離れたところで詠春と魔理沙と霊夢が待っていると、ネギだけでなく、アスナ、このか、刹那、朝浦、エヴァンジェリンに茶々丸。そして図書館3人ののどか、夕映、ハルナ

が一緒に歩いてやってくる。
「やあ、皆さん。休めましたか？」
「どうもー、長さん。あれ？　博麗さん？　霧雨さん？　どうしてここに」
「偶然」
「だぜ」
　ネギの問いかけに2人ともまともに答えない。
「この奥です。3階建ての狭い建物ですよ」
　吸っていたたばこを娘の木乃香にとられる詠春。
「スクナの再封印、完了しました。さすがは博麗の巫女です。我々がやるよりも強固な封印がされましたので万全です」
　詠春はエヴァンジェリンに言う。
「うむ。ご苦労、近衛詠春、博麗霊夢。面倒を押し付けて悪いな」
「いえ、こちらこそ」
「あとで迷惑料でも貰おうかしら」
　霊夢は冗談のように言うが、本気でもらえないかと考えながら言う。
「長さん。小太郎君は？」
　ネギが詠春に、一連の事件で戦った同世代の狗族の子を心配して聞く。
「それほど重くはならないでしょうが、それなりの処罰があると思います。天ヶ崎千草についても、まあ、そのあたりは私たちにお任せください」
「そっか」
　ちょっと残念そうにつぶやくネギ。
「それより問題はあの白髪のガキか」
「現在調査中です。今のところ、彼が自ら名乗った名が『フェイト・アーウェルンクス』であることと、一か月前にイスタンブールの魔法協会から日本へ研修として派遣されたということしか。おそらく偽名でしょう」
「ふん」

魔理沙はそれを聞いて、次は絶対に勝つ。と内心決意する。
少し歩いて家に到着する。草木が茂っているが、見たところ秘密の隠れ家のような家。
中に入ると、きれいに掃除がされており、壁の一面が本棚になって古書のようなものが大量におかれている。
「彼が最後に訪れた時のまま保存しています」
中にある本をみんなが見たり調べたりする。
「どうですか、ネギ君」
頃合いを見て詠春がネギに話しかける。
「は、はい！　見たいものや調べたいものがたくさんあって、時間がもっとあれば」
「ハハハ。またいつでもきていいですよ。鍵をお渡ししましょう」
「あの、長さん。父さんのことを聞いていいですか」
父とのつながりがないネギは少しでも父のことが知りたく聞くと、
「ふむ。そうですね。このか、刹那君こっちへ。明日菜君も。あなた達にもいろいろ話しておいたほうがいいでしょう」
木乃香と刹那、アスナ、エヴァンジェリンと茶々丸が3階の一番奥の部屋に集まる。
「私も聞かせてくれ」
そこに魔理沙もやってくる。
魔理沙を特に咎めることはせず、詠春はネギたちに机に置かれている写真を見せる。
「この写真は、サウザンドマスターの戦友たち」
写真には右からタバコを吸った白スーツのおじさん。刀を持った若い詠春、その前に小さな子供のような白髪の少年。白髪の少年の横にはネギそっくりの青年。そして、その左隣には本を持った若い男。そして、写真中央の奥に剣を肩にかついだ色黒の長身の男。そして、本を持った若い男の隣には、眠そうな目をした紫髪の少女が映っている。
「２０年前の写真です」
全員がネギの父親のイケメン具合に、ネギも将来こうなるのか、な

どと話していると、アスナはなぜか写真の一人に何か既視感を覚える。
アスナはわけがわからず自分の頬をつねっている。
「おい、これ、パチュリーじゃねーか！」
写真を見た魔理沙が写真の一番左にいる眠そうな目をした少女を指さして言う。
「おや、パチュリーのことをご存知ですか」
「なんでここに」
詠春に詰め寄って問いかける魔理沙。
「その写真に写っているのは、サウザンドマスターの戦友です。つまり、パチュリーも私たちの戦友です」
「ま、マジか」
まさかの驚愕の真実に魔理沙は驚く。
「私は、かつての大戦（おおいくさ）でまだ少年だったナギと共に戦った戦友でした。そして、２０年前に平和が戻ったとき、彼はすでに数々の活躍から英雄、サウザンドマスターと呼ばれていたのです」
ほうほう。すげーな。
魔理沙は説明を聞きながら声には出さずに聞く。
「天ヶ崎千草の両親もその戦で命を落としています。彼女の西洋魔術師への恨みと今回の行動もそれが原因かもしれません。
以来、彼と私は無二の友であったと思います。しかし、彼は１０年前に突然姿を消す。彼の最後の足取り、彼がどうなったのかを知るものはいません。ただし、公式の記録では１９９３年、死亡――。それ以上のことは私にも、すいません、ネギ君」
「い、いえ。そんなありがとうございます」
３階から吹き抜けとなっているところを眺めるネギ。
「結局手がかりなしか。残念だったな、兄貴」
「ううん。そんなことないよ、カモ君。父さんの部屋を見れただけでも来た甲斐があったよ」
「そうか？」
詠春が何か巻いてある紙をネギに渡す。すると、そこに朝倉がやっ

てきて記念写真を撮ってないから撮るよ、と言い出し、1階の部分で、霊夢と魔理沙以外のメンバー全員の写真を撮る。
そして翌日の京都駅。
「ハーイ。皆さん、この後私たちは午前中のうちに麻帆良学園に到着。そのあとは学園駅にて解散。各自、帰宅となりまーす。みなさーん、修学旅行楽しかったですかー」
しずな先生の言葉にみんなが、はーい、などと大盛り上がりで返事をする。
そして、ネギに〆の一言をお願いすると、地面に置いてあったリュックに引っかかり、転んでしまう。
そして、新幹線の中ではほとんどの生徒が眠ってしまい静かになっていた。
魔理沙も同じように寝て、霊夢は大入と札を書いて時間をつぶしていた。
「これが、紫の言っていた渦なのかしらね」
つぶやきながら札を作る霊夢。
「ならば、渦はどんどん大きくなる。次は、何が起きるのかしら」
高速で景色が流れる窓の外を見る。
修学旅行編、完結

パチュリーの思い出

幻想郷。紅魔館、地下図書館。
そこの主、パチュリー・ノーレッジはソファーにだらけて座り、一枚のカードを親指と人差し指で挟んで上下へパタパタと揺らしながらカードの絵柄をボーっとみている。
カードには、パチュリーの絵が描いてある。右手で本の上を掴み、片手だけで開いた本を向けている絵。その本には白紙が広がっている。
次にパチュリーはテーブルの上においてある写真を一瞥する。そこにあるのは、かつての仲間たちと撮った集合写真。
「パチュリー様」
突如、パチュリー以外いない空間のはずのこの部屋で、パチュリーを後ろから声をかける人物。
「また時間を止めたの？　咲夜」
この声掛けになれてしまったパチュリーはそうつぶやいて後ろを見る。そこにいたのは、この館で唯一の人間、十六夜咲夜。
「紅茶のおかわりはいかがでしょうか」
パチュリーは机の上のティーカップを見る。冷めてしまった紅茶が若干残っている。
「そうね、お願いするわ。もったいないからそのまま入れていいわよ」
「はい」
なれた手付きでティーポットからカップに入れる咲夜。
昨夜が紅茶を入れているときも、パチュリーはさっきと同じようにカードをパタパタと動かす。
そして、咲夜は紅茶を入れながらそのカードが気になるようで、チラチラと視線を向ける。
「……。このカードはね」
パチュリーは一度も咲夜を見ずに、気にしているだろうという推測から勝手に答えだす。咲夜は考えていたことがバレたと動揺して紅茶をこぼしそうになるが、なんとか一滴も落とすことなく入れ終わ

り、テーブルに置く。
「魔法使いの契約の証、アーティファクトカード、私専用の魔道具のようなものよ」
「魔道具、ですか」
「そうよ。私の昔の仲間との契約した証。ま、全然使えないアーティファクトだけど」
カードに記載されたアーティファクト名は、『Ｈｏｃ　ｅｓｕｓ』。
パチュリーは使いづらい専用のアーティファクトの効果を思い出して苦虫を噛み潰したような顔をする。
最後に使ったのはいつかしら。確か、幻想郷に来る前、レミィと喧嘩したときかしら。
そんなことを考えながらパチュリーは裏面を見る。魔法陣と、契約主の名前、ナギの名前が書かれている。
「そういえば、パチュリー様」
思い出したかのように声をかける咲夜。
「スキマ宅急便から魔理沙が撮った写真が届きまして」
「そういえば外の世界に行ってるんだったわね」
「これなんですが」
写真の束をパチュリーに渡す咲夜。
そこに写っているのは美しい風景、そして楽しそうに笑う魔理沙や知らない娘たち。
「京都ね。懐かしいわ」
旧友の１人の出身地であり、かつて行ったことのある風景を思い出して呟く。そして、
「あら」
写真をめくっていくと、懐かしい初老の男の姿が写っている。
「詠春じゃない。年取ったわね」
「お知り合いですか？」
「私の旧友の一人よ。私の知る限り世界最強の剣士ね」
咲夜は優しそうな御仁にしか見えないのに、とギャップに驚く。
そして、次の写真を見た瞬間、

「!?」
パチュリーの目が見開き、明らかに動揺し始める。
「……ア、アス、ナ？」
写真に写っているのは、笑顔のアスナとこのか、そしてこのかにむりやりフレーム内に収まるように引っ張られている刹那。
三人の写る写真を見て固まるパチュリー。
「パチュリー様？」
明らかに様子がおかしくなったパチュリーを咲夜が心配して声をかける。
「……大きく……なったわね」

数年前、魔法界
港で海に向かって、コンクリートのような足場に座って本を読むパチュリー。波の音をＢＧＭにページをめくる。
そこに近づく一人の小さな影。
すぐそこに来て、パチュリーはその存在に気づく。顔を上げるとそこにいるのは無表情でパチュリーを見る少女。
「あら、アスナ。どうしたの？」
「ナギが、いない」
「はぁ？　あいつどこ行ったのよ……。まぁいいわ。ナギは私がここにいるのは知ってるはずだし、私と待つ？」
アスナはパチュリーの隣に座る。
それを見て、再び本に視線を戻す。
この子、私には懐いてないから、２人きりはやめてほしいのに……。
パチュリーはそんなことを考えながら本を読み、そして、数ページ読んだところで退屈そうにしてたアスナが声をかけてくる。
「パチュリーって、ずっと本読んでる」
「ん？　そうね」
「そんなに本って面白いの？」
「ええ。面白いわよ。それに、知識は力となるしね」

「知識は力？」
首を傾げるアスナ。
それを見て、パチュリーは表情が出てればかわいい仕草なのに、と思いながら疑問に答える。
「そうよ。力って聞くと腕っぷしだと思うでしょうけど、私みたいな魔法使いには腕っぷしはそこまで必要ではないの。だって、ナギと違って殴り合うことはしないもの。そうなると、魔法使いの力とは、魔法の習得数や熟練度になる。それはつまり、知識なのよ。だって、覚えていないと魔法なんて使えないもの」
「んー、パチュリーの言うことはわかる気がする」
「今はそれでいいわよ。できればアスナからナギにいい加減あんちょこ見ないで呪文唱えろって言ってほしいくらいだし」
頭に手をポンっと置くパチュリー
「うん。わかった」

「パチュリー様！」
昨夜の声で昔を思い出していたパチュリーは現世へと引き戻される。
「どうされたのですか？　その写真を見てからぼーっとされましたが」
「だ、大丈夫よ。昔を思い出していただけ」
写真を改めて見る。
そこに写るアスナの姿。笑顔で写る姿に、
タカミチが頑張ったのね。
かつての頼りなかった少年を思い浮かべて思う。そして、
「でも、これはどういう因果関係なのかしら。霊夢と魔理沙が行った場所に、偶然にもあの子がいるなんて」
写真を更に見れば、エヴァンジェリンの姿に、ネギの姿。
「エヴァに、ナギの息子……。偶然にしてはできすぎている。これは調べる必要がありそうね」

帰ってきて

修学旅行から帰った翌日の朝。
「おはよう。霊夢」
霊夢が目を覚めるとなぜか視界に紫の顔がドアップで映る。
紫が同じベッドで布団の中に入り込み、霊夢の顔を至近距離で見つめていたのだ。
「……」
霊夢は一気に不機嫌になると、首をそらして反動をつけると思いっきり紫の額に頭突きをする。
「い、いったーー」
頭突きされた額を抑えながら紫はスキマを使って霊夢のベッドから抜けてすぐ目の前のリビングの部分に出てくる。
「ひどいじゃない、霊夢」
涙目で霊夢を見る紫。
「寝起きでそんな顔見せられる私の身になりなさい」
ベッドから出て体を伸ばして凝り固まった筋肉をほぐす。
「ドキッとした？」
「しない」
霊夢はキッチンに行って水道の水を一口飲む。
「てか、何しに来たの？」
定時報告をやめてから全くの連絡がなかったのに、突如として現れた紫の目的を考える。
修学旅行で何があったのか私の口からききたい？
どうせ覗き見ているだろう、という考えからめんどくさい、と考える霊夢。
「ええ。実は、重大なことを忘れていたの」
紫が忘れていた、ですって!? なに？ もしかして、とてつもない情報だったりする？
霊夢は紫の前に座ってきちんと話を聞く体制を取る。
「実は」

「実は？」
数秒の空白。静かな時間が流れ、そして、
「携帯を買い与えてなかったわ」
「……は？」
「携帯必要でしょ？　連絡が取れなくて私、寂しかったの」
泣いているかのように両手で目を覆う紫。
「……修学旅行中もちょくちょくスキマから覗いてたように見えたけどね」
あら、ばれてた？
と泣き真似をやめてあざとく拳で軽く頭を叩くような仕草をする。
「じゃ、魔理沙が帰ってきたら買いに来ましょう？」
「そういえば魔理沙は？」
「ちょっと出かけてるのよ」
「ふーん」

「……よっしゃーー！　携帯ゲット！」
携帯ショップから魔理沙と霊夢、紫が出て、魔理沙が携帯を掲げて大声で言う。
「恥ずかしいからやめなさい」
ため息をついて霊夢がぼやくが魔理沙は全く聞かずにはしゃいでいる。
紫は日傘をさして魔理沙を見て微笑んでいる。
「ごめんなさいね。携帯のことを忘れていたわ。もしも何かあったら私の携帯に連絡頂戴」
そう言って紫はスキマに潜って消えてしまう。
「もう帰るのかよ。霊夢、番号交換しようぜ」
「はいはい」
赤外線通信で魔理沙と番号を交換する霊夢。
その後学園に戻ると、コーヒーショップで楓と巫女服姿の龍宮と古菲がお茶をしていて、霊夢と魔理沙も一緒にどうかと聞かれたので一

緒の机で、魔理沙はコーヒーを、霊夢はココアを買って飲む。
「京都では助かったわ」
「気にするな」
　そんな話をしていると、ネギとアスナが現れる。
「今回はありがとうございました」
「なんのなんの」
「それであの、バレるとオコジョなので、僕のことは」
「わかっているよ、ネギ先生」
「私たち、口堅いアルよ」
　ネギとアスナが離れると、霊夢が龍宮に声をかける。
「オコジョって？」
「魔法使いは存在がばれたらオコジョの刑なのさ」
「こわっ」
　魔理沙は自分がオコジョにされる光景を想像してしまい顔が青くなる。
「魔理沙がオコジョになったら私が飼ってあげる」
「お断りだぜ。飯の量が足りなさそうだ」
「あら。そこまで貧乏じゃないわよ」
　なぜかにらみ合う霊夢と魔理沙。
「そもそもお前らは幻想郷の出身だから、大丈夫だと思うぞ」
「龍宮も幻想郷は知っているのね」
「話に聞いたことがあるぐらいさ。それが本当か嘘かわからんが」
　そう、と興味をなくしたようにココアを飲む霊夢。
「そうだ。博麗、私の神社に来ないか？　興味あるんだろう？」
「あら、いいわね。これから暇だし、いいわよ」
　その前に携帯買ったから全員番号交換しようぜ、と魔理沙が提案して全員と番号を交換して、龍宮と霊夢は龍宮神社へと歩いて行った。

　そのころ、
「ぬむん！　ふふふ。匂う、匂うわよ。そっちの方から淡く甘酸っぱい『ラブ臭』が!!」

「『ラブ臭』!?　何ですか、そのイヤなネーミングのモノは」
「そんなもんしないわよー！」
アスナの食べた惚れ薬の効果をハルナが掴んで変な話をしていた。

初めての海

そこから数日、ネギが古菲にカンフーを教えてもらい、エヴァンジェリンの弟子になったり、夕映に魔法使いのことがばれたりしたが、よくわからんうちに霊夢と魔理沙は飛行機に乗せられ、そして、

「海だーーー！」

クラスの大半が砂浜を走り、海に飛び込む。

「……。霊夢」

「ええ。わかってるわよ」

赤色で白い水玉のついたビキニ型の水着を着た霊夢に、白色で星のマークがついたワンピース型の水着を着た魔理沙。２人ともここに来る途中に運動部４人によって買わされたものだった。

「これが、海か!!!」

魔理沙が大興奮で叫ぶ。

幻想郷内に海はない。ゆえに、霊夢も魔理沙も海を見たことはない。聞いたことはあるが、あまりの広さに２人は圧倒される。

「確か、塩水、なんだよな」

魔理沙は恐れ恐れ近づいていき、指先を海の水につけると、それをなめる。

「マジで塩水だ！　すげぇ！」

魔理沙はそういうと、水に飛び込む。そして古式泳法でばちゃばちゃと泳ぎまくる。

「霊夢もこいよー、わぷっ」

霊夢に声をかけた直後、波に飲み込まれてその姿が水の中へと消える。

「……」

「ぶはっ。しょっぺ。楽しー！」

魔理沙が水から勢いよく出てきて笑いながら言う。

さすがに危なくて行きたくないわね。

霊夢はそう考えてパラソルの下で寝転がろうと歩き出すが、それを、まき絵が腕をつかんで止める。

「へ？」
「霊夢ちゃんも遊ぼうよーー」
「ちょっ、いや、私は」
強制的に海へと連れていかれる霊夢。
その後、まき絵はネギのところに行くというので別れ、霊夢は潜って、水の中の風景を楽しむ。
魚がいないわね。
捕まえて焼こうかと考えていた霊夢はつまらなそうに泳ぐ。
一度息継ぎで水面に上がると、砂浜がちょっと遠くに見える。
そういえば、遠くまでは行かないように。って言われたわね。奥に行き過ぎると帰ってこれないって。まぁ、私なら飛べば帰れるからいいけど。
先ほど大河内に注意されたことを思い出すが、別に気にせずに再び潜る。
数分後、ガチで帰れなくなったので、海の上を飛ぶことで元の砂浜に戻るということをして、魔理沙がキレたのはまた別の問題。

夕日が水平線に沈んでいく。それをコテージ群で見る魔理沙と霊夢。霊夢はなぜか水面に立っている。
「お前な。人に見られたらどうするんだよ」
「感知結界張ったから。見られたらマズイのが来たら潜るわよ」
「潜るなよ」
霊夢と魔理沙はそんな話をしていると、ネギとカモ、のどかと夕映も現れた。
「あ、霊夢さん、魔理沙さん」
「よう。どうした？　なんか今日、ネギ、やけに落ち込んでなかったか？」
「そうね。それはちょっと気になっていたわ」
霊夢は振り向かずに夕日の方だけを見てつぶやく。
「実は、アスナさんと喧嘩を……」

「……ふーん」
「そりゃ災難だな。喧嘩の原因は？」
「それが、わからなくて……」
「「……」」
霊夢、魔理沙が無言になる。
この少年は、余計なことをして知らずに怒らせたな。
２人の思考は一致した。
「まぁ、ここに会話の内容があるんだが」
カモが紙の束を取り出す。
「そこでゆっくり話をしましょう」
夕映の提案で屋根のあるところで４人でその文章を読む。
「……おい、ネギ。これはそりゃ怒るだろ」
「パイ○ンってとこ？」
「ああ」
魔理沙と霊夢が夕映とのどかが読んでいるところを後ろから見てつぶやく。
「うぅ。すみません」
ネギが涙目になって謝る。
すると、夕映が、アスナは無関係の人間なのだからというところで怒ったのでは、と教えてくれる。そして、
「ネギ先生。私たちも魔法使いになれないのでしょうか」
と聞いてくる。
ネギも驚き、危険に巻き込みたくない。と断ろうとするが、危険も承知で足を踏み入れる決意をした、と食い下がらない。
さらに、仮契約をできないか、とも聞くと、ネギが真っ赤になる。
「？」
仮契約のことを知らない霊夢と魔理沙は首をかしげる
そこに朝倉が来て、のどかと夕映が仮契約（パクティオー）についての詳細を知らないことを看破し、夕映の耳元だけで仮契約（パクティオー）にはキスが必要だと説明する。
のどかに知られないように夕映は焦りだすが、そこに木乃香と刹那

が来て、パクテオーてキス以外にやり方ないんー？　などと爆弾発言をしてしまう。
魔理沙の全部説明しろ！　の言葉で、朝倉が詳しく説明してくる。
魔法使いの従者としての契約。仮契約（パクティオー）は魔法使いとキスをすることで契約が完了する。魔力の供給を受けたり、専用のアイテムが与えられることがある、など。
「へぇ。接吻一つでアイテムがもらえるの。面白いわね」
「せ、接吻か……」
平然としている霊夢に対し、魔理沙は顔を真っ赤にしてつぶやく。
「しかし、仲間が一気にそろってきやがった。こいつぁ、なかなか戦略の立て甲斐があるぜ」
カモがネギたちの戦闘スタイルから前衛後衛を考え出す。
「そういえば、霊夢の姐さんの戦闘スタイルは？」
「なんで教えないといけないのよ」
「霊夢は博麗の巫女だからな。妖怪退治に使う札や針を投げつけることもできる。最も得意なのは結界術や封印術だな。さらに、霊夢にかかればどんな封印も簡単に解除できるぜ」
答えずに離れようとする霊夢に対し、魔理沙が勝手に答える。
「ちょっと！」
「ほほう。なら後衛ってところか」
「いや、霊夢は体術もできるぜ。ほい！」
突如、魔理沙が霊夢に向かって拳を振るう。
霊夢は不意打ちで飛んできた拳を回避すると、その腕をつかんで背中に魔理沙を背負う形ををして、背負い投げの容量で魔理沙を投げつけて、海に落とす。
「なにするのよ」
「あの。博麗の巫女ってなんなんです？」
水面に浮いてきた魔理沙の頭を右足で踏みつけて、ぐりぐりしている霊夢を見ながらネギが問う。
「ぶはっ。殺す気か！」
「私の知っている情報でよろしければ」

刹那は博麗の巫女について語りだす。
「まず、ネギ先生。妖怪については、ご存知ですよね」
「はい。京都で戦った鬼たち、ですよね」
「ええ。広い定義で言うならば、ネギ先生にも身近な吸血鬼なども分類されますが……。彼らは一部の例外を除き、人間たちに認知されていなければ存在を維持できないんです」
「認知……。なるほど。つまり、忘れられた場合……」
「はい。ネギ先生の予想通り。その存在そのものが消えてしまいます。科学による研究で昔は妖怪の仕業とされていたものも科学的根拠によって存在が消えてしまう。そういった可能性もありました。それを恐れた妖怪の賢者とされる妖怪は、とある山奥に妖怪を集めて、結界を張ることで妖怪の楽園を作り出しました。これが、幻想郷、お2人の故郷です」
「つまり、お2人は妖怪、なのですか？」
「違うわよ！」
夕映が控えに聞くと、霊夢はすぐさま大声で否定する。
まさかの大声でみんなが驚きのあまり固まる。
「私はまっとうな人間よ」
「おい、霊夢。その言い方だと私は普通の人間じゃないみたいじゃないか」
「あんたはあっち側に片足入れ始めてるでしょ」
「いやいや。そこまで行ってねーよ」
他を放って喧嘩を始める二人。
「あの2人は置いておいて。先ほども言いましたが、妖怪は人間に認知されていなければなりません。つまり、幻想郷は妖怪の楽園と言いましたが、妖怪を認知し、恐怖する人間がどうしても必要になります。いうならば、幻想郷内は妖怪と人間が共存して生きている特殊な土地ということになります」
「ついでに言うと、食物連鎖のような妖怪は人間を襲い恐怖させ、私たち人間は妖怪を退治する。という関係性も必要になるわ。だからお遊びで妖怪と人間は競い合ったりするわ」

「霊夢や私はその妖怪と競い合って疑似的な退治を行う、妖怪退治屋ってわけだ。むろん、幻想郷の決まりを守らない妖怪は本当に退治するけどな」
　霊夢と魔理沙が喧嘩を一時中断してそれだけ付け加える。
「そして、その結界を維持、管理する役割を持った幻想郷のバランサーが、博麗の巫女と呼ばれる存在です。これが、私が知っている情報のすべてです」
　話を終えると、まず霊夢が反応する。
「よくもまぁ、そこまで情報を探れたわね」
「霊夢さん、一つ警告しておきますが。幻想郷に入って妖怪を殺して楽しみたい、と考えている連中がごく一部ですがいるとのことで、その者たちもこの程度の情報はつかんでいます。霊夢さんが博麗の巫女だと知られれば、彼らが襲ってくる可能性があります」
「そんなもの。来たら逆にぶっ飛ばすわ」
「まぁ、霊夢さんならできるでしょうね……」
　その後、カモが霊夢が前衛も後衛もできるという考えでどんどん床に書いていくが、アスナがいないと前衛が足りなすぎる、ということに気づき、ネギに言い、ネギはすぐに謝りに行く。
　ネギとアスナはその後なんとか仲直りしたらしい。

　そして、地球のどこかでは。
「……魔理沙。なつかしいわね」
「おや。お知り合いですかな」
　メイド服を着た金髪の女性と、黒いスーツに黒い帽子をかぶった老紳士が歩いていた。
「ええ。昔ちょっとやりあったことがあるの。あれからどれくらい強くなったのか、興味深いわね」
「ほう。私もネギ君がどれほど使えるようになったのか、とても興味があります。私と同じですね」
「あんたと一緒にしないで、変態」

「変態ではないのですが……」
　奇妙な2人だ。横並びに一緒に歩いているのだが、老紳士よりもメイドの少女のほうが言葉に力がある。そう、メイドのほうが立場が上な雰囲気があるのだ。
「さぁ、日本に行きましょうか」
「ですな」

　幻想郷
『アリスちゃーーーん』
「神綺様。涙と鼻水で汚らしいです」
『あぁーーん。アリスちゃんが冷たいーー』
「もう。何の用ですか」
『夢子ちゃんと連絡が取れないの～』
「そんなの知らないわよ」
　そんな会話があったとかなかったとか。

エヴァンジェリンの別荘

海に行った数日後。平和な日常のさなか。
教室で授業を行うネギはなぜかふらふらとやつれた様子で授業をしている。
「……？」
さすがの様子に霊夢は首をかしげて魔理沙を見る。魔理沙は霊夢がこっちを向いているのを気付いて首を振るう。どうやら魔理沙も事情は知らないらしい。霊夢はそう判断して授業へと意識を戻す。
授業終了のチャイムが鳴り、ネギは、今日はここまで～と言って頭を下げる。しかし、まっすぐ教室を出ることができず、ふらふらと歩いて黒板やら扉にぶつかりながら出て行く。
さすがの光景にクラスメイトが全員心配し、アスナが追跡をしようとする。そこに、のどか、夕映、朝倉、古菲が合流し、さらに魔理沙も面白がって追加。このか、刹那も追加され、ネギと一緒に歩いているエヴァンジェリンを追跡する。
霊夢はくだらない、と言って龍宮のもとに行ってしまった。
雨が降る中、エヴァンジェリンの家、ログハウスに入っていく2人。
「雨が降ったから室内で修業ですか？」
「まさか――。あんな狭いところで」
「ふむ。魔力の効率運用とかなら場所に限らずできると思うぜ」
唯一の魔法使いである魔理沙が想像で答えるが、内心では魔力運用だけであんな疲労はおかしいな。とも考えていた。
「こりゃ、やっぱり？のアレ」
「も、もうやめてよ、それ」
朝倉のセクハラをアスナが真っ赤になって止める。
他の人は来ていないか心配しながら雨の中を走ってログハウスに入るが、中には誰もいない。
「おかしいなー。確かに2人で家に入ったのに」
「お風呂にもトイレにもいないアルよ」
魔理沙は窓を見る。雨が部屋の中に入っていないところからおそ

らく窓から外に出たわけではないだろうな、と考える。
「てことは、転移系の魔法で移動したか、もしくは亜空間に移動したか」
「みなさん、こちらへ～」
別の場所を捜索していたのどかがやってくる。
のどかが言うには地下室に何かがあるらしく、全員で地下室へと行く。
人形が大量に置かれた地下の廊下を歩き、突き当りに到着すると、ガラス玉に入った、何かの建物のミニチュアのようなものが淡い光を放ち存在していた。
「のどかがさっきこの中にネギ先生がいるのを見たそうです」
「え!?　どーゆーこと?」
「ですから小さいネギ先生がー」
と夕映とアスナが言い合っていると、朝倉が何かを起動したのか消える。
さらに古菲、のどか、夕映までも消え、魔理沙もその光景を見て、
「あぁ、そういうことか」
小さくつぶやいて、魔力を流して無理やり起動。同じように魔法が発動して、魔理沙もアスナを置いていって中に入ってる。

中はまさに別荘地ともいえる場所だった。夏のような気温に、美しい海。そして、長い橋の先にあるとてつもなく長い、下の海へとつながる螺旋状の階段に、南国のような建物。
「あっついな」
「あ、魔理沙さん」
中にはやはり予想通り、朝倉、古菲、のどか、夕映がいた。
「これは、亜空間か……?　エヴァンジェリンの作った修行場ってところか」
朝倉と古菲が下をのぞき込んであまりの高さに絶句している。

「とりあえず行こうぜ」
臆することなく橋を渡ろうとする魔理沙に膝が震えている夕映。
「い、いえ。魔理沙さん、アスナさんを待ちませんか？」
「んー。アスナが来る前にそのあたり見といたほうがいいだろ」
魔理沙はブツブツと何かを唱えると、宙に浮く。
「その辺見てくるぜ」
「え、魔理沙さん、飛べるんですか」
夕映が驚愕の表情を向ける。朝倉はカメラを構えて写真を撮り始める。。
「ホウキ使った方が早いし楽なんだけどな。なくても飛べるぜ」
魔理沙は飛行魔法を一度止める。すると、そのまま重力に従って落ちていく。
海中に落ちる前に再び起動。
海面寸前で止まる魔理沙。
「ふーむ。見事な閉鎖空間だな」
サーチの魔法を使って周囲を確認する。外を全く観測できない。
海を適当に飛ぶ魔理沙。
「陸地と呼べるところは中心部の建物があるところだけか」
３０分ほど飛んで元の転送されてきた位置に戻る。すると、ちょうどアスナがやってきたところだった。
「よう、アスナ。ようやく来たのか」
「魔理沙ちゃん!?　なんで飛んで!?」
「おいおい。私は魔法使いだって言わなかったか？　とりあえず周囲を見てきたが、陸地はそこだけみたいだな」
夕映の隣に降り立つ魔理沙。
「大丈夫か？　震えてるぜ？」
「こ、これは武者震いというやつです。望んでいた非日常を目の当たりした喜びです」
「とてもそうとは見えないぜ……」
「ファンタジーもいい加減にしてよー」
魔理沙は文句タラタラのアスナに振り向く。

「それにしてもずいぶんと遅かったな。３０分ぐらいか？」
「え？　私、１，２分しか探してないわよ？」
その言葉に魔理沙は、え!?　と聞き返す。
どんな人間だろうと、１分と３０分は間違えるはずがない。時間の認知、感覚は人それぞれで、楽しいときとつまらないときの時間の感覚に差が出るのは仕方がないが、流石に３０倍の差はありえない。
「時間の流れが違う……？」
魔理沙は誰にも聞こえない声でつぶやく。
そして考える。そんなことは可能なのか、と。
パチュリーから借りている（と、魔理沙本人は認識している）魔道書等の記憶を漁る。
しかし、結果はわからない。可能性はある、と仮説をたてても、そこから先はわからない。
「くそ、もどかしいぜ」
橋を歩きながら魔理沙はぼやく。
橋を渡りきったところで、階段を降りた先から声が聞こえるというので全員でこっそりと降りることに。すると、
「ふふふ。いいだろ？　もう少し」
エヴァンジェリンのそんな声が聞こえてくる。
全員が物陰に隠れて耳をすませる。すぐそこにエヴァンジェリンがいることが声からわかる。
「も、もう限界ですよっ」
続けてネギの声も聞こえてくる。声からエヴァンジェリンとすぐそこにいるらしく、
「少し休めば回復する。若いんだから」
「あっ、ダメ」
「いいから、早く出せ」
「だ、ダメですよ。エヴァンジェリンさん」
「フフ。私のことは、師匠（マスター）と呼べ」
意味深な会話が聞こえており、ネギのほうは本当に嫌がっているような声色だった。

「ま、まさか、本当に？」
朝倉はここに来る前にしていた、卑猥な妄想が現実だったのかとつぶやく。
他のメンバーも同じことを考えているのか全員顔が真っ赤で焦っている。そして、
「こらぁ！　子供相手に何をしているのよ」
アスナがハリセン片手に飛び出すとそこには、ネギの腕に噛み付いて血を吸っているエヴァンジェリンの姿。
「なんだ、お前達」
口を離して呆れ顔で言うエヴァンジェリン。
「何って、何やってんのよ！」
「授業料に血を吸わせてもらっているだけだよ。多少魔力を補充せんと稽古もつけれんし」
その言葉にアスナが再び叫ぶ。
「どうせそんなことだと思ったわよ」
「なんだと思ったんだ？」
「うるさいわね！」
いかがわしいことを考えていたらしく、大声で叫ぶアスナ。

「で、ここはなんなんだぜ？」
「ここは私の造った別荘だ。しばらく使ってなかったんだが。ぼーやの修行のために掘りだしたんだ」
「へー。こんなモノ造ってしまうとは、魔法使いとはスゴイアルねー」
「全く。勝手に入って来おって。一応言っておくがな。この別荘は1日単位でしか利用できないようになっているから、お前たちも丸一日ここから出れんからな」
「「「ええーー!?」」」
エヴァンジェリンの言葉に驚いて、明日の授業どうするんだーと、みんな文句を言う。しかし、安心しろ、とエヴァンジェリンは言い、
「日本の昔話に浦島太郎の竜宮城ってのがあったろ。ここはそれの逆

だ」
別荘内での1日過ごしても、外では1時間しか経過しない。
この別荘はそういうシステムだと教えてくれる。
「つまりだ。ネギは1日学校で仕事した後、1日修行してたってことか。しかも血を吸い取られて。そりゃあんなにやつれるわな」
魔理沙がやれやれ、と言いたげに言う。
「教職の合間にちまちま修行しても埒があかないからな」
ネギの1日は実質2日だということに驚愕するみんな。そんな中、アスナが心配そうにネギに声をかける。
「ネギ。あんたまたそんな無理して」
「大丈夫ですよ、アスナさん。それに、また修学旅行みたいなことがあったら困るし、強くなるためにこんなことくらいでへこたれてられませんよ」
「……」
やる気満々で笑顔で言うネギに、アスナは何も言えないでいた。

外の世界で数分、別荘内で数時間後。
夕食の時間、別荘の地上に出ている部分の中心部で秘蔵の食糧さえも食べてしまうみんな。さらに、エヴァンジェリンが飲むな、と言うジュースと書かれているものも勝手に飲みだす。
魔理沙はエヴァンジェリンと一緒にワインを飲む。
「なぜ魔理沙さんだけええのー？」
飲むなと怒られて文句を言われた木乃香が文句を言う。
「こいつは幻想郷で普段から飲んでいるからな」
「外では２０まで飲んじゃダメなんだろ？　我慢しとけだぜ」
そんなことをしていると、夕映とのどかがエヴァンジェリンに魔法を教えてほしいと頼み込んできた。
「なんで私がそんなことを。そこに魔法先生がいるんだからそっちに頼みな」
「ええ!?　魔法を教える？　今ここで!?」

話を聞いたネギが驚き、エヴァンジェリンに確認をするが、めんどくさそうに勝手にしろー、と言う。
「まぁ、『別荘(ここ)』は外より魔力が充溢してるから素人でも案外ポッと使えるかもしれんぞ？」
ネギは小さなとき使っていた練習用の杖を数分出してみんなに渡す。
「この杖を振りながら、プラクテ・ビギ・ナル　『火よ灯れ(アールデスカット)』です。
ネギが実演をすると、小さな三日月のついた杖から小さな火がつく。
「こんなものよりライター使ったほうが早いんですけど、初心者用の呪文ですね」
みんなでそれを持ち、それぞれ呪文を唱える。しかし、火は出てこない。
「貸してみな」
魔理沙が1つ手に取ると、同じように呪文を唱える。すると、星の形をした杖先に火が灯った。
「おぉ！」
その光景を見た全員が驚きの声を上げ、
「すごいです、魔理沙さん。普通は何ヶ月も練習しないと出ないのに」

フフン。とネギに褒められドヤ顔の魔理沙。
「コイツは形式が違うとはいえ、普段から魔力を扱いなれてるからな。むしろ出なければ、何をしているんだ、と言われるところだ」
しかし、エヴァンジェリンが辛辣に言う。
「おいおい、エヴァンジェリン。もっと私をほめてくれていいんだぜ」
「くだらん」
その後、日が暮れてから全員寝るが、ネギだけは起きて修行をしている。
それにお手洗いに起きたアスナが気づく。
そして、ネギは過去をアスナに語る。
魔法が一つも使えない幼い時代。村が襲われ、村人たちはみんな石

に。
それを救ってくれたのは、死んだはずのナギ。という過去。
そして、ネギはアスナにのみまずは話すつもりだったのだが、エヴァンジェリンの手によってのどかのアーティファクト、『いどのえ日記』を使って内容を解読してしまう。

そしてそんなころ。別荘の外。
「んー！　あぁ、疲れるわね」
丸テーブルで勉強をしていた霊夢は首を動かして、固まった筋肉を動かす。
コキコキ。と音が鳴る。
「大丈夫か？」
「悪いわね。教えてもらって」
「気にするな。国語は大丈夫だろうが、英語だとか理科だとかはさすがに幻想郷出身者には難しいだろう」
目の前で勉強を教えてくれていた龍宮にお礼を言う霊夢。
「ん？」
休憩にお茶でも入れようと立ち上がると、霊夢は何か違和感を感じる。
「これは、学園に誰かが侵入した？　学園結界を誰かが通ったのかしら」
霊夢は結界に意識を向ける。
「侵入者か？」
「ま、どうでもいいや」
霊夢は自分には無関係だと判断して、無視してお茶を入れ始める。
龍宮も別の魔法生徒、魔法先生が何とかするだろう。ここに来たら容赦しないがな。と放置することにした。

別荘内で２４時間。外で１時間が経過をして、別荘組が別荘から出る。

雨の中を走って帰る８人。
魔理沙は寮の入り口でみんなと別れると、自室へと向かう。そして、
一人の老人によって、狗族の少年、犬上小太郎を保護した那波千鶴が連れていかれ、さらに、宮崎のどか、綾瀬夕映、朝倉和美、古菲がお風呂の中でスライムの手にさらわれ、刹那も廊下で隙をつかれて連れていかれてしまった。
そして魔理沙は、……。

伯爵と魔界のメイド

犬上小太郎と再会したネギは一緒に世界樹の下にあるステージに向かう。
そしてステージでは、
「うっ。ここは？」
同じように攫われていたアスナが目を覚ます。
なにやら触手のようなものが上から伸びて、アスナの腕をつかんで抑えている。
そして、恰好はなぜか下着姿に、ガーターベルトという先ほどまで着ていたパジャマではない。
アスナは自分の恰好に驚き、声を上げると、今回の誘拐犯である全身黒づくめの老人が声をかける。
「ハハハ。お目覚めかね。お嬢さん」
「誰!?」
「囚われのお姫様がパジャマ姿では雰囲気が出ないかと思ってね。少し趣向を凝らせてもらったよ」
その言葉にアスナが自由な足を動かし、
「何なのよこのエロジジイ」
その顔面を蹴飛ばす。
「いやいや。ネギ君のお仲間は生きがいいのが多くてうれしいね」
鼻血を出しながら笑顔で言う老人。その背後からメイドの服の金髪の女性が近づく。
「悪趣味よ、伯爵」
「そうかね？　しかし、パジャマ姿というのは少々間抜けに感じるが」
メイドの少女がアスナをジッと見る。
「仲間？」
「仲間？　ふざけないで、お姫様。こんな変態と仲間と思われるなんて心外だわ」
「夢子くん。そう辛辣に言わないでくれないかね」
「少なくとも、全裸の少女を攫うのは趣味が良いとは思えないわね」

「あれはその子たちがやったことで私ではないのだがな……」
　その言葉にアスナが疑問に思うと、視線だけで後ろを向くように伝える夢子と呼ばれたメイドの少女。
「アスナ―」
　アスナが後ろを何とか見ると、そこには、水の球体があり、そこに下着姿の木乃香に、全裸姿の夕映、のどか、朝倉、古菲がいて、めちゃくちゃ怒っていた。
「みんな!?」
「ネギ君の仲間と思われる8名のうち、霧雨魔理沙君以外を招待させてもらった」
　刹那と那波は気を失っているのか、球体の中で目を閉じ、浮かんでいた。
「退魔師の少女は危険なので眠ってもらっている。そちらのお嬢さんは成り行きの飛び込みでね。霧雨魔理沙君は、夢子君が手紙を出したというが……」
「魔理沙なら気づくでしょう」
　夢子が手をかざすと、2本の鞘に収まった剣が現れる。それを手に取ると両腰にさす。メイド服に西洋風の剣はまるで漫画に出るような戦うメイドだ。
　囚われの少女たちが、目のまえにいる小さい女の子、スライムに話しかけて出してと頼むが、内部で強力な魔法でも使わないとでられねーぜ、と言うだけで出してくれない。
「こんなことして何が目的なのよ」
「なに、大したことではない。仕事でね。『学園の調査』が主な仕事だが……」
　アスナの質問になぜか普通に答えてくれる老人。
「『ネギ・スプリングフィールド』とキミ、『カグラザカアスナ、キリサメマリサが今度どの程度の脅威となるかの調査』も依頼内容に含まれている」
「え、私？　ど、どーゆことよ!」
「ふむ。来たようだ」

空を見ていた老人がそう呟く。
「夢子君が霧雨魔理沙君に対して何か思い入れがあるように、私もネギ君に対しては個人的にも思い入れがあってね。彼があの時からどの程度使える少年に成長したか、私自身、非常に、楽しみだ」
遥か空からネギと小太郎が近づいてきていた。そして、小太郎の言葉に従い、先制攻撃として『魔法の射手（サギタ・マギカ） 戒め（アエール・アエール・カプツウーラエ）の 風 矢』を放つ。
「ふむ。いいね！」
だが、矢は老人に当たる前に何かに当たったかのように消えてしまった。
その瞬間、アスナのつけているネックレスが一瞬光る。
「来たで、おっさん！」
「みんなを返してください！」
ネギはアスナの恰好を見て、何かエッチなことをされたのでは、と心配するが、アスナがすぐに否定をする。そして、
「あなたは一体誰なんです。こんなことをする目的は!?」
「いや、手荒な真似をして悪かった、ネギ君。ただ、人質でも取らねば、君は全力で戦ってくれないかと思ってね。
私はただ、君たちの実力が知りたいだけだ。私を倒すことができれば彼女たちは返す。条件はそれだけだ。これ以上、話すことはない」
「はん、それだけでえんか、楽勝や」
老人の言葉を聞いて、小太郎がやる気満々で言うが、ネギはまた自分のせいで巻き込んでしまった、と考え、
「よし。僕が行く。小太郎君は下がってて」
杖を背中に背負って構えるネギ。
「何ゆーとんやネギ。魔法使いのくせに勝てる訳ないやろ。ひっこんどれ！」
「ええ!?　小太郎君こそ、何言ってんの。今、あのおじさんに負けたばっかじゃん」
「な、アホ！　狗神出せたら勝ててたわ」
「じゃ、狗神ないから今ダメじゃん。小太郎君、僕にも負けたしね」
「アホか。あんな奇襲二度も喰らうか。もっかいやったらボコボコ

や」
「そんなことないね、とにかく僕がやる」
今そんなコトをしている状況でもないのに、口げんかに発展するネギと小太郎。そして、しまいには、今すぐ白黒つけると戦いだそうとする。
「元気があってよろしい。が、2人で来るのが賢明だと思うがね」
老人が指を鳴らすと、スライムの少女3人が2人の元へ。1人が2人の足をつかんで固定すると、残り2人が、同時に2人を蹴り飛ばす。
あまりの威力に観客席の中段まで転がる2人。
「なんだあいつは」
「ありゃ、スライムってやつだ」
3体が襲い掛かってくる。
「へっ。ネギ、休んでててええんやで。接近戦は苦手やろ」
「大丈夫！　小太郎君こそ、女の子は殴れないんじゃないの？」
「ハン」
小太郎は近づいてくるスライム娘を見て、拳を握る。
「女ゆうても、軟体動物がフリしてるだけなら、関係ないわ」
小太郎がスライム娘を1体殴りつける。しかし、それを腕をクロスして防ぐスライム娘。
対してネギは、エヴァンジェリンにまず教えてもらった自己強化魔法、『闘い（カントウス・ベラークス）の歌』を使用。魔力を纏って身体能力を向上させる。
ツインテールのスライム娘の一撃を受け流すと、続けてくる2撃目を腕で防ぐ。しかし、そこにスライムの軟体動物らしい動きで、防いだ腕にスライム娘の腕が巻き付いていく。
ネギはそれを顔に掌底を当てて突き放すと、続けて拳を振るうスライム娘を両手で逆八の字の形にして防ぐと、両手で突き押す技、双撞掌で何メートルも突き飛ばす。
「おお!?　なんやソレ、ネギ!?」
「何って、魔力供給の呪文だよ、完全版」
ネギと小太郎が背中合わせになると、ネギが纏外れた答えを言う。
「ちゃうちゃう!!　その体術や！　流派は？　変な動きや」

「中国拳法だけど」
「アハハ！　中国拳法か。そらええわ!!」
　3体のスライム娘の連撃。人間にはありえない軌道で来る攻撃にも、体術に長けた小太郎はもちろんのこと、ネギも茶々丸よりも遅い、と軽々と防ぎ、一瞬の隙をついて、2人は3体をまとめて老人のもとへと突き飛ばした。
「あいつら、打撃はきかねぇ。相手にすんな！　狙いはあのおっさん一人や」
「うん」
　スライムは有名なとあるゲームなどでは弱く設定されているが、実際はかなりの強さを持つ。基本、柔らかな身体で打撃を無効化してしまうからだ。
「なかなかやるやないか、ネギ」
「小太郎君もね」
　打撃が無効化されているため、無傷のスライム娘3体が来るが、それをそれぞれ一撃でいなすと、小太郎が足止め係となる。そして、ネギが小さな星がついた杖と小瓶を取り出す。
「しぶといな。さすが軟体動物」
　相変わらず無傷のスライム娘を見て小太郎がつぶやく。
「けど、お前らの相手は、この俺や」
　小太郎が3人に分身、1人1体のスライムを対処できるようになる。そして、
　ネギは杖を振るうと、魔法（サギタ・マギカ）の射手が1本、まっすぐ放たれる。
　エヴァンジェリンの別荘では1本しか使えなかった無詠唱での魔法（サギタ・マギカ）の射手。しかし、それも老人に当たる前にかき消される。しかし、そのかき消した際の光で目くらましができた。その隙に後ろに回り込んだネギは、小瓶を向けて、
「僕たちの勝ちです」
　呪文を唱える。
「『封魔の瓶（ラゲーナ・シグナートーリア）』」
　あらゆるものを封印する。ネギの過去の記憶でも、おじいさんが使

用したものと同じ形の魔法瓶。これによって老人は瓶の中へと封印される。
はずだった。
魔法の発動と同時にアスナのつけているペンダントが光り輝く。アスナから力を奪い取るように輝き、アスナは悲鳴を上げる。
「ひゃ、あああああっ、いやあああ」
「アスナさん!?」
そして、魔法瓶の魔法はキャンセル。瓶は地面へと落ちてネギの足元へと転がる。
「え、なっ。封印の呪文がかき消された？」
「へぇ。実験は成功ね。放出型に関しては完璧。これはすごいわね」
今まで静観していた夢子はそう呟く。そして
「では、そろそろ私も本気でやらせてもらうとしよう。まさか、これで終わりではあるまい？　ネギ・スプリングフィールド」
老人が動き出そうとする。が、
「待ちなさい、へんた……じゃなくて、ヴィルヘルム・ヨーゼフ・フォン・ヘルマン伯爵」
その老人の前に、夢子が一瞬でやってくる。
「むっ。なにかね、夢子くん」
「彼らは、私がやるわ」
「それは困りますね。ネギ君は私がやると、すでに決めていたのではありませんか」
「魔理沙が来ないのだもの。仕方がないでしょう？」
「それはあなたが直接呼ばないからです！　手紙を置いてきたと言ってましたが、気づかなければ来るはずがないでしょう！」
戦闘中のはずの場で、２人がなぜか言い合いを始めてしまう。
「はぁ。しょうがないわね。じゃあ私はそこの子犬をもらうわ」
「ええ。それなら構いませんよ」
夢子は小太郎にゆっくり近づいていく。
「へっ。なめられたもんやなぁ」
「スライムたち。邪魔よ。手出し無用」

夢子の言葉を受け、スライム娘たちがステージのほうへと退避する。
夢子は腰の剣を一本抜く。
小太郎は抜き放たれた刃が一瞬、燃えているように見えた。
しかし、それは幻想。
しっかり見れば、その刃は揺らめく炎を模した、波立ような独特な形状をしていることがわかる。人によっては恐怖による幻想で、ずっと燃えた剣として見えてしまってもおかしくはない。
「変わった剣やなぁ」
「これはフランベルジュと呼ばれる剣よ。冥途の土産に覚えていくといいわ」
「メイドが冥途の土産て」
小太郎はそんなことを言うが顔は笑っていない。
剣を構えたときに理解した。実力の差から笑っている暇ではない。笑って一瞬でも目線を外せば、自分の首が飛んでいたと直感的に考えて目を離さない。
「行くわよ、犬」
「犬上小太郎や、メイドの姉ちゃん」
「私は夢子。短い間だけど、覚えておいてあげるわ」
小太郎の気で覆った拳と夢子の袈裟斬りがぶつかり合う。
「では、こちらも始めようか。ネギ君」
老人、ヘルマン伯爵が構える。
「僕が勝てば、皆さんを離してくれるんですね？」
ネギが同じように中国拳法の構えをする。そして、
「ああ。もちろんだとも」
ヘルマン伯爵が拳を振るう。ネギは受け流そうとするが、あまりの威力に受け流すことができず、客席を何メートルも殴り飛ばされる。

伯爵との闘い

小太郎ＶＳ夢子。
ネギＶＳヘルマン伯爵。
その二つの闘いは、まさに子供と大人の闘い。一方的な戦いだった。
夢子と小太郎は、小太郎に反撃を許してくれない。一本の剣が剣舞のように美しく振られ、小太郎は防ぐしかできない。
普通ならば剣を腕で防ぐなどできるはずがないが、小太郎は気を腕にまとうことで剣をそれで受け止めている。もしも気がなければ、その腕は炎を模した波打つ刃によってズタズタに引き裂かれていた。
「ぐっ」
小太郎は後ろに飛んで一度距離を作る。しかし、その細身の身体のどこにそんな力があるのかと言いたくなるほどの脚力で一瞬で距離を詰められ、剣が振られる。
上から振られる剣を小太郎は白刃取りの要領で刃をつかむ。
「はぁはぁ。や、やるやないか、メイドの姉ちゃん」
「私は、失望したわ。犬上小太郎」
「あぁ!?」
夢子から告げられた言葉に小太郎が叫ぶ。
「あなた、本気を出してないわ。もちろん、力の一部を封じられているというのもあるんでしょうけど。それにしても今出せる全力を出さないというのは相手に失礼よ」
「へっ。女に本気が出せるかよ」
小太郎のその言葉に、夢子の表情が消える。
「撤回するなら今よ、犬上小太郎」
「あぁ!?」
「女に本気が出せない？　ふざけているの？　自らの意思で戦場に立つものに、男も女も子供も老人も何もない。そこにあるのは戦士。戦う意思がある者に対して本気を出さない？　あなたは、それが最上級の無礼であることを理解しているのかしら？」

「それは姉ちゃんの考えやろ。俺はそうは思わん」
「考えを変えるつもりはないのね」
「ああ」
夢子は小太郎の目を見る。そしてあきらめたようにため息交じりに息を吐き、
「ならば、愚かな選択をしたと後悔して死になさい」
腰の二本目の剣に手がかかる。そして、鞘から抜かれると同時に小太郎を斬り飛ばした。

ネギＶＳヘルマン伯爵は、同じように一方的な戦い。
ヘルマン伯爵の攻撃はただのアッパーですら、地面を走る衝撃となるし、その力はネギが受け流せる威力ではない。
さらに、魔法はアスナの魔法無効化能力を使用され、消されてしまう。となると、最近修行を始めたばかりの中国拳法しかない。
圧倒的な経験値の差。あっという間にネギは地面に倒れる。
「やれやれ。この程度かね。先ほどの動きはなかなかよかったが、どうやら私が手を下すほどではないかったようだね」
ネギが気合を入れて立ち上がる。
そしてネギは杖を使った突きを使った連続攻撃をするが、それもすべて防がれてしまう。
「いや、違うな。ネギ君、君は、本気で戦っていないのではないかね？」
「なっ。ぼ、僕は本気で戦っています」
「そうかね？　いやはや。サウザンドマスターの息子だと聞いているから楽しみだったのだが。彼は正反対。戦いには向いていない性格だよ」
魔法を無効化してこの言い草。とてつもなく厳しく、分が悪い。
「君は、何のために戦うのかね？」
２人は動きを止め会話を始めてしまう。
ヘルマン伯爵は小太郎と夢子の方に視線を向ける。
「見たまえ。小太郎君は実に楽しそうに戦う」

夢子の剣を小太郎が腕で防いでいるのをネギが見る。苦しそうではあるが、楽しそうでもある。
「君が戦うのは仲間のためかね？　くだらないぞ。実にくだらないぞ、ネギ君。期待外れだ。
戦う理由は常に自分だけのものだよ。そうでなくてはいけない。『怒り』『憎しみ』『復讐心』などは特にいい。誰もが全霊で戦える。あるいはもう少し健全に言って『強くなる喜び』でもいいね。小太郎君のように。そうでなくては闘いは面白くならない」
「ぼ、僕は別に戦うことが面白いなんて」
ネギの性格では闘いとは本来避けるべきこと。戦わなくて良いのなら戦わない。それがネギという少年。
「僕が、僕が戦うのは」
「一般人の彼女を巻き込んでしまったという責任感かね？　助けなければという義務感？　義務感を糧にしても決して本気になどなれないぞ、ネギ君。実につまらない。いや、それとも、君が戦うのは、あの雪の夜の記憶から逃げるためかね？」
「え？」
ネギの記憶。悪魔に襲われ、村の人たちが全員石となってしまった6年前の記憶。それを、ヘルマン伯爵は告げる。
「何で、それを。ち、違います。僕は」
「そうかね？」
否定するネギにヘルマン伯爵は帽子を手に取り、帽子で一度顔を隠すように帽子を外す。
「コレなどは、いかがかね？」
その顔を見たネギは、一つの記憶を思い出す。
封印の瓶を使用した、近所のおじいさん。そして、それを石にした……、
「ははは。喜んでもらえたかな、いいカオだよ、ネギ君。その表情（カオ）だ。いやぁ、今頃、『ワシが悪魔じゃー』と出て行っても、若いものには笑われたりしてしまうからね」
「あ、あなたは……」

「そうだ。君の仇だ。ネギ君」
その顔は、あの時、おじいさんを石化し、姉であるネカネの足を石にした悪魔。瓶に封印されたはずの悪魔がそこに立っていた。
「あの日召喚された者たちの中でも、ごくわずかに召喚された爵位級の上位悪魔の一人だよ」
爵位級の上位悪魔。悪魔たちの中でも、格別の強さを誇る悪魔。自分をそれだと言うヘルマン伯爵。
「君のおじさんやその仲間を石にして村を壊滅させたのもこの私だ。まったく、あの老魔法使いにはしてやられたがね」
元のひげ面に戻るヘルマン伯爵。そして、
「どうかね？　自分のために戦いたくなったのではないかね？」
その言葉の直後、ネギは一瞬でヘルマン伯爵の懐に入り込み、掌底で何メートルも上空に突き飛ばす。
続けてそのまま高々とジャンプして追いかけるネギ。今まで攻撃を許してはくれなかったのに、とてつもない速度で一気に近づき、殴り、肘打ち、蹴りで攻撃しまくる。
魔力の暴走（オーバードライブ）。ネギはまだ修行不足ゆえにすべての魔力を使いこなすことができていないが、最大魔力はとてつもない量を誇る。それが、怒りによって解放されたのだ。
しかし、それはいうならば、火事場の馬鹿力。体への負担がとてつもないのだが、ネギは怒りに任せて拳を振るう。
「ふはははは。素晴らしい、これだよ。これが見たかったのだよ。それでこそ、サウザンドマスターの息子だ」
ヘルマン伯爵は空中で顔だけでなく、全身が悪魔の元の姿に戻る。翼も生え、何倍もの大きさになり、口を大きく開く。
未来ある若者が好きだ、というヘルマン伯爵。しかし、その一方でその才能が潰えてしまうのを見るのも好きだと告げる。夢子がヘルマン伯爵をちょくちょく変態だという理由でもある。
開いている口が光りだす。これは、石化の光。このまま解き放たれれば、ネギの全身は石となってしまう。
回避は間に合わない。ネギに直撃するように光が放たれる。しか

し、
ネギの足に細い何かが絡みつき、引っ張られる。
「!?」
そのおかげで石化の光を回避、そのまま地面に落ちる。
「あ、う……」
暴走（オーバードライブ）で記憶があいまいになっているネギ。
意識がはっきりしてくると、ネギは近くに立つ女性に気が付いた。
女性は金髪で、一見すると人形のような姿をしている。
瞳の色は青。青のワンピースのようなノースリーブにロングスカートを着ている。肩にはケープのようなものを羽織っていて、頭にはヘアバンドのように赤いリボンがまかれている。そして、左手で一冊の分厚い本を持っていて、それはリボンで十字に縛り、鍵もかけられている。
「魔力の暴走（オーバードライブ）ね。そんなものに頼っていては強くなれないわよ。まずはその魔力を使いこなす練習をしないとね」
「あ、あなたは……？」
「アリス・マーガトロイドよ。あなたがネギ君ね。魔理沙の言ってた通り、本当に子どもなのね。びっくりだわ」
女性が名乗ったとき、小太郎と夢子のところでは、夢子の一撃をやってきた魔理沙がホウキで受け止めていた。
「よう、久しぶりだな、夢子」
「魔理沙、ようやく来たのね」
待ち人がようやく来たことで夢子が一瞬笑顔になる。しかし、
「どうして、アリスちゃんまで来てるのかしら？」
アリスのほうを見る夢子。
「……かあさ、じゃなくて、神綺様から『夢子ちゃんがいないの』って泣きつかれたので探しに来たんです。魔理沙と一緒に」
「まったく、あの方は」
ヘルマン伯爵はアリスを見る。そして、
「アリス……。もしや。アリス嬢かね。神綺様のお気に入りの」
「……あなた、悪魔ね。それもかなり上位の……」

「お久しぶりですな、アリス嬢。私の名は、ヴィルヘルム・ヨーゼフ・フォン・ヘルマン。しがない没落貴族です」
「久しぶり？　あなたにあったことがあったかしら？」
「まだ幼き頃の話です。覚えていらっしゃらなくても仕方がない」
　ヘルマン伯爵はそう言って拳を握る。
「さて、どいていただけますかな？　私は今ネギ君と楽しんでいるところでしてな。邪魔をするというのならば、あなたといえど、容赦いたしませんよ」
　アリスは指を動かす。すると、たくさんの人形がアリスの周りを浮かぶ。
「魔理沙に頼まれたのよ。悪いけど、邪魔させてもらうわ」
「そうかね。残念だ」
「ネギ君。まだできるわね」
「はい！」
「無理はしないように。いくわよ」
　アリスは腕と指を動かす。すると、ランスや剣を持った人形たちがヘルマン伯爵めがけて飛ぶ。
「人形遣いですか」
　人形の武器での一撃を回避しながら少しずつ近づくヘルマン伯爵。そこにネギが突撃して肘打ちで殴り飛ばす。
「ぬぅ」
　人形による多角的な攻撃にネギの攻撃。さすがにすべて受け流すことができずに直撃を食らうヘルマン伯爵。
「リン・ラン・リ・ティウス・グリモワール」
　加えてアリスは始動キーを唱え、
「魔法の射手（サギタ・マギカ）　光の３７矢（セリエス・ルーキス）」
「ダメです！」
　魔法の射手を放ったのを見て、ネギが叫ぶ。しかし、もう遅い。光の射手はヘルマン伯爵の近づくと、アスナのペンダントが輝き、壁に当たったように消えてしまう。
「消えた？　なぜ」

「魔法無効化能力（マジック・キャンセル）と言う能力だよ、アリス嬢」
「魔法無効化。なるほどね……」
アリスは抜け目なく、アスナのつけているペンダントが光ったことを見逃していなかった。
「リン・ラン・リ・ティウス・グリモワール　『闘い（カントウス・ベラークス）の歌』」
魔法が通じないのならば近接攻撃しかできない。
指を少し動かすだけで一目もせず、人形を1体、アスナのところへと突撃させる。
「させねーぜ！」
しかし、それはスライム娘にはじかれてしまう。
「スライムね。また面倒な」
「デーモンアッパー」
ヘルマン伯爵の拳が振られる。アリスはそれを闘いの歌で強化された反射速度で回避する。さらに手を振るって糸を操作。ヘルマン伯爵の全身を縛り上げる。
「ぬぅ。厄介な糸ですな」
「ネギ君」
「はい！」
一気に近づいて弓歩沖拳で殴り飛ばす。
しかし、糸で固定されているためその場から動かないヘルマン伯爵。
「もう一発！」
「ぬううう！」
ブチッ、ブチッ。と糸が切れる音が鳴り響き、ヘルマン伯爵の右腕だけが動く。そして、ネギが続けて肘打ちしようとした腕をつかむ。
「くっ」
「逃がさぬよ、ネギ君」
ヘルマン伯爵が口を開く。すると、口の中が発光しだす。間違いなく石化光線の準備である。
が、発射寸前にアリスが高々とジャンプして石化光線の準備中でネギしか見えていなかったヘルマン伯爵の頭を思いっきり蹴飛ばす。

「さすがにそれは使わせるわけにはいかないわよ」
「ぬぅ。アリス嬢。やはり君は厄介ですな」
再び糸が切れる音が鳴り響くとすぐにその場を離れる。
「ネギ君はそこまで脅威ではない。アリス嬢をまずなんとかしなければ」
ヘルマン伯爵はそう呟くと、夢子のほうを一瞥する。
魔理沙がホウキを振り回し、夢子が剣を振り回す。
近接戦闘が得意ではない魔理沙は1人では夢子にはかなわないが、そこは小太郎が援護をすることでどうにか戦いになっている。
「夢子君の援護は期待できそうにないな」
アリスが追撃に走る。周囲にはランスを持った人形が数体。
「近づかせはしない！」
ジャブのように拳を軽く振るう。すると魔力の塊が拳を振るうたびにアリスに向かって飛ぶが、それはアリスにはあたらず、周囲の人形にあたり地面に落ちる。
「デーモンアッパー！」
さらに拳を振り上げるとアリスめがけて衝撃が地面を走る。
横によけるアリス。だが、そこに近づいてアリスのお腹を直接殴りつけるヘルマン伯爵。
「がっ」
何メートルも殴り飛ばされ客席に転がるアリス。
「アリスさん！」
「終わりだ！　アリス嬢！」
アリスに突撃するヘルマン伯爵。が、突如としてその身に痛みが走る。
「？」
ヘルマン伯爵が痛みのある所を見ると、そこにはアリスの人形が1体、ランスを突き立てていた。
「ば、バカな。アリス嬢は指を動かしていない。なのになぜ人形が動く」
ヘルマン伯爵は人形の操作をしているかどうかの識別として指の

動きを見逃さないようにしていた。
「これが、私の研究の成果よ」
悠然と立ちあがり言うアリス。
「私の目的は、全自動型の人形を作ること。その上海は私が作った人形の中でも最高傑作」
ヘルマン伯爵のもとから離れる人形、上海。
「残念ながら全自動はまだ完成していないけど、上海は半自動型の人形。私の命令なしでは動けないけど、私の命令に対して自分で考えて最適な行動をしてくれるわ」
「自分で考える人形だと……」
ありえない。ヘルマン伯爵はそう考える。
「お疲れ様、上海」
アリスが人形の頭をなでると人形は喜んでいるように笑顔になる。
「アリス嬢自身の魂を中に入れている……？」
ヘルマン伯爵は自分の知識から一つの可能性を考える。が、これは今は必要のない思考。と考えるのをやめる。
「それは確かに脅威ですな。しかし、それならば3人を相手にしていると考えればいいだけのこと」
「それは、どうかしら。上海、あの少女のペンダントを取りなさい。人形は3体まで使っていいわ」
上海人形は敬礼をすると、アスナに向かって直線に飛ぶ。
「させませんぞ！　スライムたちよ、人形を止めよ！」
スライム娘たちが全員、上海人形の進行方向に行き、止めようとする。しかし、上海人形は人形でありながら人形を操作できる。スライム娘は3体だからアリスは3体の人形を使ってもいいといった。
つまり必然的に1体だけがノーマークとなる。
その結果、ペンダントは上海人形のランスによって鎖の部分を貫かれペンダントが外れ落ちる。
「ぬぅ、しまった」
ヘルマン伯爵が上海の方に意識が向いている隙にアリスは足で蹴り上げてガラスの瓶を手に取る。そして、上海の操っている人形の操

作権を奪い、自分に近づくように操作する。
「『封魔の瓶（ラゲーナ・シグナートーリア）』」
アリスは機転を利かせ、厄介なスライムだけをまずは捕える。
「いやあああああ」
「また瓶の中カヨーーー」
「まあ、悪役デスシ」
瓶がコルクによって閉じられ、スライムたちが完全に封印される。
「ネギ君！」
「はい！」
ネギがヘルマン伯爵へと向かう。
「ぬぅ。さすがアリス嬢。しかし、ネギ君だけならば全く問題ない！」
迎撃しようと拳を握るヘルマン伯爵。
アリスは人形を1体手に取ると、それをオーバースローで投げつける。
見事、人形はヘルマン伯爵の目の前に落ち、爆発した。
「がっ」
まさかの攻撃にヘルマン伯爵がひるむ。
そこを狙って爆発の煙をまっすぐ走り抜け、肘打ちの？打頂肘を魔法の射手（サギタ・マギカ）雷の一矢（ウナ・フルグラーリス）を加えて使い、ヘルマン伯爵を攻撃。直撃して突き飛ばされるヘルマン伯爵にネギは奥の手で、エヴァンジェリンに教えてもらったばかりの父親が好んで使っていたというコンボを使用する。
「ラス・テル・マ・スキル・マギステル　来たれ（ケノケートス）・虚空の雷（アストラルブサトー）・薙ぎ払え（ザ・テメトー）
『雷の斧（ディオス・デュコス）!!!!』」
ネギが右手を振り下ろすと、巨大な雷の斧が現れて、ヘルマン伯爵を撃ち抜いた。

闘いの終結

美しい軌道で振られる剣。それを魔理沙はホウキでどうにか防ぐ。
「近接戦闘は苦手でしょう？　魔理沙」
「へ。魔法使いの近接戦闘ってのを教えて」
「無駄よ」
夢子が剣で明後日の方向を指す。魔理沙がそっちを見ると、ちょうどアリスの魔法をヘルマンが無効化したところだった。
「ああ、そういうことかよ。だからネギが苦戦してたのか」
０距離からのマスタースパークを使おうとしていた魔理沙はこれで作戦を変更せざるを得なくなった。
「手伝うぜ、姉ちゃん」
小太郎が後ろから拳を握りながら言う。
「ああ。頼むぜ」
魔理沙も快くそれを受け入れる。だが、夢子がそれを否定する。
「何を言っているのかしら、この負け犬は」
「あぁ⁉」
さすがの負け犬発言に小太郎が叫ぶ。
「犬上小太郎。あなたはこの戦いに参加する資格はないわ。少なくとも、本気を出さないのであれば」
「おい、どういう意味だ、夢子」
「教えてあげるわ、魔理沙。この犬はあろうことか、女と本気で戦えない、などと言って私に対して攻撃しなかったのよ」
指をさす代わりに右手に持つ剣を小太郎に向けて言う。
「そんなことをするやつに戦場に立つ資格はない」
「女を殴れるわけないやろ！」
「ふーむ。別にいいんじゃねーか？」
「は？」
魔理沙の言葉に夢子が変な声を出す。何を言っているのか理解できていないんか若干固まる。
「まぁ、しょうがないんじゃねーか？　ほら、女は守るものっていう考

えは昔からあるし、その教えを守るように言われ続けていたのならば、仕方ないと思うぜ」
魔理沙の言葉に夢子はため息をつく。
「甘過ぎよ、魔理沙。その負け犬は参加するだけであなたのジャマになるわよ」
「そうか？　やってみなきゃわからねぇぜ」
「そう。あなたも愚かな選択をするのね、魔理沙」
「愚かかどうかは試してからだぜ！」
ホウキを振り下ろす魔理沙。それを右手の剣で軽くいなして反撃に左手の剣を薙ぎ払う。
それを小太郎が気で覆った両手をクロスして魔理沙の懐に入って防ぐ。
「あら」
自然とこういう形となった。魔理沙がホウキを振るい、魔理沙の隙を狙った夢子の一撃を小太郎が防ぐ。
「いつまで持つかしらね」
右手に持っているホウキに八卦炉を装着する魔理沙。
八卦炉から炎が噴き出る。その炎によってホウキが加速し、夢子の胸元にホウキの先、掃く部分と逆で夢子の胸元を思いっきり突き押す。
夢子は突き飛ばされながらも後ろにステップ。少しでもダメージを減らそうと思い切り後ろに飛び過ぎて1回転。バック転の要領で無事着地する。
夢子は胸元を思い切り叩かれたことで肺の中の空気が出てしまったのか、苦しく息を吸う。
「かっ、はぁ、はぁ」
「まだまだ！　ブレイジングスター！」
次はホウキにまたがって、一直線に突進。
夢子はカウンター狙いで両の手に持つ剣を2本とも振るう。
魔理沙はその剣を見て、急旋回。一度剣を回避。しかし、そのまま円を描くように飛び、速度を上げていく。

夢子は剣を構える。もう一度近づいたところを斬ろうとするが、そこに小太郎が夢子に突撃する。
「邪魔をするな、犬っころ」
右手の剣を振るう、左手の剣は魔理沙を狙えるように構えたままにしておく。
小太郎はそれをできるだけ寸前で回避。
髪の毛が少し斬られるがどうにか回避すると、気を込めた拳を振るう。
「ふん」
夢子はブラフだと判断して回避や防御を破棄。魔理沙にのみ注意を向ける。夢子の予想通り、小太郎の拳は夢子に当たる寸前で止まる。
ほら、見たことか。
と、夢子は剣を振るおうとするが、直後、おなかに衝撃が来る。
「は？」
小太郎は殴っていない。だが、寸前であえて止めることで、空気を殴り飛ばす。これが空気砲となり、夢子のお腹に直撃。
「がっ。バカな」
そこに、魔理沙が突っ込んできて、夢子をホウキの柄で突き飛ばす。威力で何メートルも飛ばされ、観客席のベンチを砕きながら地面を転がる。
どんどん加速してとてつもない速度となっていた魔理沙のブレイジングスターの直撃。とてつもないダメージのはずだが、
「や、やってくれるじゃない。犬っころ、魔理沙」
全身ががくがくと痙攣しながらも無理やり立ち上がろうとする夢子。
夢子の周りに何本も剣が浮かび上がって宙に浮いている。
「引き裂かれなさい！」
その剣が魔理沙と小太郎に向かってまっすぐ飛ぶ。
「マスタースパーク！」
八卦炉からのレーザー光線で全部まとめて叩き落す魔理沙。しか

し、
『魔法の射手（サギタ・マギカ）　連弾（セリエス）・氷（グラキアーリス）の１７７矢』!!」
　レーザーが収まると同時に、夢子の詠唱は完了。氷の散弾が魔理沙めがけて飛んでくる。
「ちぃ!」
　ホウキに八卦炉を装着。それを利用して加速してその場を離れる。しかし、氷の散弾が魔理沙を追いかけ続ける。
「くそ。追跡（ホーミング）かよ!」
　上へと飛ぶ魔理沙。それを追いかける氷の散弾。
　ついには追いつかれると、氷の散弾がどんどん魔理沙に当たり、砕けた氷の散弾が砕け、煙のように魔理沙を覆う。
　全ての散弾が当たり終わると、ホウキからも落ちて地面に向かって頭を下に自由落下する。意識を失っているのか目が閉じられている。
「姉ちゃん!」
「終わりよ、魔理沙」
　夢子が追い打ちをかけようと、剣を両手に持って魔理沙に向かってジャンプする。
　だが、それを狙っていたかのように目を閉じていた魔理沙の目が開く。そして、体をひねって動かすと、夢子めがけて八卦炉を向ける。
「それは効かない」
「周りをよくみな」
　魔理沙の言葉に不安を覚え下を見る夢子。ちょうど、アリスの人形、上海がアスナにかかっていたペンダントをランスで取り除いたところだった。
「しまった!」
「これで、魔法が効くぜ!『ドラゴンメテオ!』」
　防御魔法も間に合わない完璧なタイミングで夢子めがけてレーザーが照射される。
　地面に鈍い音を立てて落ちた後さらにゴロゴロ転がる夢子。普通ならば死ぬようなダメージだが、夢子は立ち上がろうとする。しかし、膝ががくがくと震えてうまく立ち上がれない。剣を地面に突き刺

してそれを杖替わりにすることで立ち上がろうとする。
「ファイナル・スパーク」
さらにそこに追い打ちのレーザー。
夢子は右手の剣を縦に振るってレーザーを切り裂く。
「はぁ、はぁ。まだ、まだよ、まり――」
上空から落ちてきた魔理沙が、落ちながら拳を振るって夢子の顔面を殴りつける。
自由落下による威力増強された拳に殴られた夢子は地面を転がり、地面に倒れ伏せ動かなくなる。
そして、そのまま落ちるはずの魔理沙を小太郎がスライディングのように地面を滑ってキャッチする。
「ぐっ。おもっ」
「おいおい、乙女に重いはねぇだろ」
だが、ありがとうよ。
魔理沙はそう言って立ち上がる。
「……強くなったわね、魔理沙」
「なんだ、もう目覚めたのかよ」
寝転がったまま夢子が声をかけてくる。
「魔法の射手（サギタ・マギカ）をあんなに食らってなんで無事なのよ……」
「あぁ、単純な答えさ」
「私が糸の結界を魔理沙の周辺に張ってすべての魔法の射手（サギタ・マギカ）を破壊したのよ」
アリスが近づいて魔理沙より早く答えを言う。
「ヘルマンと戦いながらサポートしたというの？」
「あの時点ではもう私はサポートに回ったからね。サポートに徹すれば両方をサポートするなんて簡単よ」
近づいてきた上海の頭をなでるアリス。
「犬っころにもやられたわね。まさか空気を殴って空気弾を撃つなんてね」
「おい、いい加減名前で呼べや」
夢子は起き上がると、メイド服をはたいて砂埃を落とすと、首を動

かしてゴキゴキと音を鳴らす。
「あー、痛い痛い。魔理沙が容赦ないから体が痛くてしょうがないわ」
「どう見ても無傷じゃねーか」
魔理沙のぼやきを夢子はスルーする。

その光景を世界樹の上から眺める影が４人。
「……ふん。乗り切ったようだな」
「内心ハラハラ。半場おろおろだったようですが。無事でよかったですね、マスター」
「ふふ……。ニンニン」
「……まさかアリスに夢子が来るとはね」
「茶々丸。お前な、いい加減その方向のつっこみはよせ。まあ、ぼーやの潜在力を見れたのは思わぬ収穫だったよ。ヘルマンとやらには、例を言わねばな」

黒焦げとなったヘルマン伯爵に近づいてみているネギ。
アリスは魔法で水泡を割って全員を救出する。
「大丈夫？」
「ありがとうございます」
裸の人たちはタオルで体をどうにか隠すとネギに近づいていく。
「君たちの勝ちだ。……とどめを刺さなくていいのかね？」
ヘルマン伯爵の足の部分は煙となって消えて行っている。
「このままにすれば、私はただ召喚を解かれ自分の国へと帰るだけだ。しばしの休眠を経て、復活してしまうかもしれないぞ？」
かつて、ネギの故郷を襲った際に、ヘルマン伯爵とスライムを封印した瓶はアリスの手によって使われてしまった。
それによってこの悪魔に対する封印は不可能となった。
「……僕は……」
「君のことは調べさせてもらった。君が日本に来る前に覚えた９つの

戦闘用呪文のうち、最後に覚えた上位古代語魔法……。そのための呪文のはずだぞ。本来、封印することでしか対処できない我々のような高位の魔物を完全に撃ち滅ぼし消滅させる超高等呪文。君が復讐のために血のにじむ思いで覚えた呪文だよ」

復讐、か。

魔理沙はエヴァンジェリンの別荘で教えてもらったネギの過去を思い出す。

復讐したくなるよな……。生まれ故郷を破壊されつくされたわけだしな。

ネギの気持ちを考えて魔理沙は表情を暗くする。

「僕は、とどめを、刺しません」

「ほう」

「6年前、あなたは召喚されただけだし、今日だって人質にそんなひどいことはしなかった」

いや、それはそうだけどよ。

魔理沙は物言おうとするが、さすがに空気を読んで黙る。

「それに、あなたの方こそ本当の本気で戦っているように見えませんでした。僕には、あなたがそれ程ヒドい人には」

「どうかな？　やはり私は全くの悪人かも知れぬぞ。何せ悪魔だからねぇ。ハハハ」

「それでも、とどめは指しません」

「ふ、フハハハハ。ネギ君。君はとんだお人好しだなぁ。やはり闘いには向かんよ」

性格的に戦いは確かに不向きだよな、ネギは。

ヘルマン伯爵の下半身はすでに敢然に霧となっている。残すは上半身のみ。

「コノエコノカ嬢。おそらく極東最強の魔力を持ち、修練次第では世界屈指の治癒術師ともなれるだろう」

おー。それは同意するぜ。木乃香の魔力やべぇからな。

「成長した彼女の力をもってすればあるいは、今も治癒のあてのないまま静かに眠っている村人たちを治すことも可能かもしれぬな」　木

乃香の力で!?　話を聞いていると永久石化クラスの魔法で石にされたんだろ。それすらも治せるのか。
「まぁ、何年先になるかはわからんがね」
ネギは木乃香を見る。その間にヘルマン伯爵の身体は完全に煙となり、消えてしまう。
「ふふ。礼を言っておこう、ネギ君。いずれまた成長した君を見る日を楽しみとするよ。私を失望させてくれるなよ、少年」
ふふ、ふはははは。
と、高笑いしながら完全に消えてしまう。
短い沈黙の時間。
「で、夢子。お前はどうするんだ？」
沈黙を破る魔理沙の声に、全員の視線が金髪メイドに注がれる。
「もちろん帰るわよ。私は魔理沙に会いに来ただけだから、こんな仕事興味なかったし。ヘルマン伯爵が適当に報告してるでしょ」
「その依頼主ってのは誰なんだぜ？」
「答えると思う？」
「無理やり言わせてやるぜ」
八卦炉を向ける魔理沙に対し、夢子はスルーしてアリスの方を向く。
「帰りましょう、アリス」
「先に帰ってて。私は用事があるから」
「そう」
夢子は高々にジャンプして観客席を超え、姿が見えなくなる。
「あ、待ちやがれ、夢子！」
魔理沙がマスタースパークを撃つ前にすでに姿が見えなくなってしまった。

始まりの密会

×
×年×月×日　地球のどこか
※人の少女が懐中時計を手に見つめている。
静寂な月と星の輝きしかないこの場所に響き渡るのは時計の時を刻む音のみ。
「ミルクの様に濃厚な魔力ね」
その静寂を打ち破る女性の声。
一人の女性が少女の後ろから突如として声をかけた。しかし、少女は後ろから突如話しかけられたにしては慌てずに、最初から声がかけられることがわかっていたかのように返事をする。
「そうネ。これでカシオペアは起動するヨ」
女性は少女の隣に立つ。
女性は、脇の部分が離れている赤と白の服、巫女服のようなものを着ていて、頭には大きなリボン。それで髪を一つに束ねている。見た目からして２０代といったところだろうか。
「本当に行くの？」
女性の問いかけに少女は笑みを浮かべる。
「もちろん。これは私の悲願ヨ。もしかして止めるつもりかナ？」
「止めても行くんでしょ？　ならそんな無駄なことはしないわよ」
いじわるを言うような笑みをする少女にため息をつきながら答える女性。
「おーい、私も連れて行ってくれよ」
そこに、黒髪に白と赤のメッシュが混在した頭に、小さな二本の角を持っている、赤色の瞳の少女が走ってきて、懐中時計を持つ少女に抱きつく。
「ちょっと正邪。何言ってるのよ」
女性が正邪と抱きついた少女の名を言うと、
「そうだよ、正邪。正邪は私と一緒にいるの！」
新たな少女の声が正邪の服の中から聞こえてくる。
正邪の服装は、矢印がいくつも連なったような装飾がなされている

ワンピースのようなもので、腰には上下逆さになったリボンを付けている。足元は素足にサンダル履き、右腕にのみブレスレットを付けてた。
服が一部膨らみ、もぞもぞって膨らんだ箇所が動くと、それがどんどん上へと登っていき、襟元から、小さな赤い着物を着た少女が現れた。
正邪は、へいへい、と言うと、
「わがままなお姫様ですなー」
嫌そうな感じでいうが、声色はそんな感じには聞こえなかった。
「針妙丸。あなた、どうしてそんなところにいるのよ」
女性が小さな少女の名前を言う。
「正邪が勝手に行かないように監視してたの」
「心配性な姫様ですねー」
ニヒヒ。と笑いながら言う正邪。
「正邪さん、私一人で大丈夫ヨ」
「それに、この子だけ行くって決まったでしょ？　わがまま言うんじゃないの」
「天邪鬼の私は行くなと言われれば行きたくなるもんでねー」
「ダメよ」
「はいはい。わかってるよ」
針妙丸が正邪の頭の上まで登る。
「そうダ。向こうで魔理沙さんと霊夢さんを誘いたいんだけど、何か良い手はないかナ？」
「そう、ね。魔理沙は科学の魅力を見せてあげればいいんじゃない？
あの子好奇心旺盛だったし」
「なるほどなるほど。霊夢さんは？」
「私は無理ね。幻想郷に影響がないって嘘をつくぐらいじゃない？」
「なるほど。じゃあ嘘をつかずに仲間に引き入れてやるネ」
少女がゆっくりと歩きだす。
それを3人は動かずに背中を見る。
「そういえば、名前はそれで本当にいいの？　もっとわかりやすいよ

うにしたら？　スプリングフィールドだから、春場（はるば）とか？」
「いや、このままでいいヨ」
「そう」
　十分離れたと認識した少女は、手に持っている懐中時計を操作する。すると、上空に巨大な魔法陣が何層にもわたってできる。
「さて、帰ってきたときは泣きっ面か、笑顔か」
「もちろん、笑顔で帰ってくるヨ」
「じゃあ、泣きっ面で帰ってくる方に賭けようかしら」
　女性がニヤニヤしながら言うと、少女は女性を見て頷く。そして、魔法陣が強く輝きだし、少女の姿が消えた。
　それを確認した正邪と女性は後ろを向き、歩き出す。もうこの場には用がないというかのように。
　しかし、すぐに再び魔法陣が浮かび、若干背が伸びた少女が帰ってきた。
「さて、泣きっ面か笑顔か、数年たっても覚えてるわよね？」
　女性が振り向きながら問うと、
「もちろんヨ」
　そう言う少女の表情は、……。

学園祭の準備開始

「アリスは帰ったの？」
「ああ。外の世界の人形屋やら布とか綿とか売ってる店とかめぐってたらしいな」
「じゃあまた新しい人形ができそうね」
ずり落ちてきたカバンを持ち直す霊夢。
「ねえ、周りなんか変じゃない？」
霊夢が周囲を見渡して言う。
登校はいつも2人で歩く。
しかし、周りの風景がいつも違う。
恐竜のようなぬいぐるみが走っていたり、ロボットのようなものもいる。
不審な周囲の光景に霊夢が訝しげに見ている。すると、目のまえに巨大な門のような建築物があることに気づく。
「な、あんなのあったか？」
「まるでパリの、なんとかって門みたいね」
「パリの、凱旋門か？」
「そう、それ」
魔理沙は近くにいた作業員のような恰好をした若い男に声をかける。
「なぁ、あんちゃん。あれなんだ？」
「なにって、学祭門だよ。もうすぐ学園祭だからね。木製だけどね」
「門でこんなの作るって、どれだけ規模でかいんだよ」
話をさらに聞いていると、全学園合同の学園祭で、中高の中間テストが終わってから本格的な準備期間。しかも部費も学祭で稼ぐサークルがあるとかで、とてつもない規模になっているらしい。
「いや、やばすぎるだろ」
学園祭の規模に驚きながらも2人が教室に入ると、なぜかクラスの三分の一が制服ではなく、別の服を着ていた。
「なにこれ」

「3―Aの出し物は『メイドカフェ』がいいのでは、となりまして」
メイド服を着た委員長がそんなことを言ってくる。
「確かお金稼げるんだっけ？　それなら結構集客ありそうね」
霊夢が関心していると、ハルナが霊夢の肩に手を置く。
「さ、霊夢ちゃんも着替えようか」
「は？」
「ほらほら、一名様ご案内ー」
「え、いや、ちょっと」
そのまま裕奈が霊夢の腕をつかんで引っ張っていく。
そのまま同じメイド服を着せられる。
黒いスカートに白いエプロンを付けたメイド服。
頭にはホワイトブリムではなく、ドアキャップのような帽子をかぶる。
霊夢が着ているのは委員長と同じタイプ。唯一違うのは、頭にかぶっているのは柿崎と同じタイプだ。
「まぁ、ロングスカートでよかったわ。正直制服のスカートも短いのよね」
スカートのつまんでひらひらさせる霊夢。
「えー、短いほうがかわいいよー？」
まき絵が近づいてきてそんなことを言ってくる。
「言いたいことはわかるけど。正直制服のスカートももうちょい1，2センチぐらい長くてもいいと思うのよね」
「えー、そうかなー」
まき絵は自分のスカートをつまんでピラピラとする。
「ならスカート長くすりゃいいじゃねーか」
魔理沙がツッコミを入れたところで、
「おはようございます」
ちょうどネギが教室に入ってきたので、柿崎、朝倉、委員長、桜子、円（まどか）がドアの前に集まり、
「いらっしゃいませーー。ようこそ。3―Aメイドカフェ。『アルピオーニス』へ」

ネギを出迎えると、ネギは何事かと驚く。
「3―Aの出し物が『メイドカフェ』に決まりましたの」
「ウチの学校、お金儲けしていいからね。お小遣い稼ぐならこれだよ！」
そのまま練習としてネギがお客第一号として接客を始める。
ソファに座り、桜子と柿崎の接客を受けるネギ。なぜかホストのような感じとなっており、円がカクテル飲んでいいかな、と言い出したり、桜子が胸の谷間に指した栓抜きをネギに取らせようとメイドカフェとは思えない雰囲気となっていく。そして、
「ハイお会計です。７８００円となります」
桜子の言葉にネギが真っ白となるが、さらに追い打ちがかかる。
「ネギ君、見て見て。まだいろいろ衣装用意してあるよー」
チャイナ服のような給仕服や大正娘のような衣装、バニーガールなど、いろいろな衣装を着たメンバーが現れ、
「１万２０００円になります。払え」
見ただけで料金が発生。さらに真っ白となるネギを置いて、朝倉と祐奈が何か足りない、と思考し、
「よし。龍宮は巫女!!」
「何？」
「ミニスカシスター」
「え、うん」
「猫耳スクール水着」
「え、意味がよく……」
「ミ、ミニスカ猫耳ナース」
「ひぃぃ!? なんやソレ」
「んんーーー。よ、幼稚園」
「よっ」
「えーと、女王様」
「ぜ？」
袴が短い巫女服を着た龍宮に、ミニスカのシスター服を着た春日。さらに顔を真っ赤にしたミニスカでさらに猫耳猫しっぽを付けた和

泉に、同じように猫耳と猫しっぽをつけてスクール水着を着て顔を真っ赤にした刹那。体操服を着た史伽に、赤ずきんの恰好をした風香。そして、ボンデージを着て、鞭を持った魔理沙が現れる。
やりすぎたか。と言い出しっぺの朝倉たちが真っ白になっていると、ネギがさらに2万４０００、と追加で支払いを求められる。
「ふふ。二人とも甘いわね」
そこにさらにトラブルメイカーのハルナがしゃしゃり出てくる。
「このクラス、素材がいいのが多いんだから、味付けは薄味が基本」
そう言って着替える図書館組3人。普通にウェイトレスの恰好をしたのどかが前に出てきて、フツーにカワイイ、と高評価を得る。
「2万７０００円」
「ピギィ」
そこに新田先生が教室に入ってきて、
「お前ら、朝っぱらから何をやっとるかー！」
「ひぃぃ」
「新田先生、私たちはマジメに学園祭の出し物の討議を……」
「もうＨＲ（ホームルーム）は終わっとる！　ネギ先生もネギ先生です！」
「はうう」
「全員正座ー！」
「ぎゃーーー」

時間が変わって夜。
霊夢はだれもいない校舎の屋上に空から降り立つ。
服装は麻帆良の制服でも巫女服でもない、普通の洋服。修学旅行のときに着ていた赤いＴシャツに白いズボンだ。
周囲を見る霊夢。しかし目当てのモノが見つからなかったのか、携帯を取り出して時間を確認する。
そこに、
「時間ぴったし。すごいネ、霊夢さん」
霊夢に声がかけられる。そちらを見ると、そこにいたのは、超鈴音。

彼女は制服姿だ。
「……わざわざ呼びつけて、何の用？」
霊夢は携帯をポケットにしまう。放課後に帰宅するとき、下駄箱に入っていた手紙に、この時間にこの場所に来てほしい、と超の名前が書かれた手紙が入っていたのだ。
「霊夢さんにお願いがあるネ」
「お願い、ねぇ……。内容によるわ」
お互いがギリギリ手が届かない距離で対峙する。まるで、間合いを計るような雰囲気だ。
「霊夢さん。私の仲間になってくれないカ？」

学園祭準備①

超（チャオ）の経営している超包子で朝食の肉まんを食べる霊夢。
視線の先には、チャイナ服のような給仕服を着た魔理沙。
「……」
肉まんを他の客のテーブルに置く魔理沙。
次に路面電車の店内にいる超を見る。
カウンターに座る瀬流彦先生と会話している。
超は霊夢の視線に気づくと、霊夢に笑顔を向けてくる。
「タヌキめ」
超を視界から外す。すると、ちょうどネギたちが現れて、四葉がスープのサービスをネギにあげていた。
「魔理沙。おかわり」
「あいよ」
ちょうど通りかかった魔理沙に注文だけをする。

「えーー、それではみなさん。学園祭の出し物を何にするかですが」
教室にて、ネギがクラス全員に問いかけると、
「いや、しかしそいつは難しい問題ですぜ、ネギの親分」
祐奈が立ち上がり深刻そうな表情でそんなことを言う。
「ああ。メイドカフェを超える集客力となるとねぇ……」
朝倉も立ち上がりながら言う。
先日の騒ぎでメイド喫茶を禁止されてしまったこのクラスは別の催し物考えることとなってしまった。
「はいはーい」
ハートが付きそうな可愛らしい声を上げ手を上げる桜子。
「『ドキッ☆女だらけの水着大会・カフェ』がいいと思いまーす」
「なんなのよ、それ！　意味わかんないわよ！」
クラスの半数以上が桜子の言葉に驚愕する中、アスナがいち早くつっこむ。

「えー？　普通に楽しそうじゃない？」
「そうじゃないわよ！」
「「それだ」」
　裕奈とハルナが何故か同意すると、まき絵と風香が同調してわけのわからないこと意見を言い出す。
「じゃあじゃあ、『女だらけのどろんこレスリング大会喫茶』」
「『ネコミミラゾクバーッ』」
　意味もわからずただただ負けず嫌いを発揮して言っているような発言に周りがツッコミしきれずにいると、
「もう素直に『ノーパン喫茶』でいいんじゃないかしら」
「「それだあああああ!!!」」
　千鶴がとてつもない爆弾を落とす。裕奈、朝倉、ハルナが自分は絶対にやらないと考えながらも同意を叫ぶ。
「８０年代に実在したと記録にありますが、今は違法のようです」
「何歳なんだ、あのおばはん」
　その言葉に千鶴は発言者の茶々丸と千雨に気づかれぬうちに後ろに回り込んで、、おば……？　とつぶやきながら青筋を立てた。
「は、はやい!?」
「ちょっと、真名」
　霊夢はそんな周りを気にせず龍宮のもとに行く。
「私は一体、何をさせられるの？　オンナダラケとか、ネコミミとか、言っている意味がわからないんだけど……」
　珍しく困惑の表情を見せる霊夢。その後ろには、涙目になっている史伽、ネギ、のどかもいて。
「うむ。君たちは生涯知らなくていいことだ。そして、良い子は意味がわからなくても決してお父さんお母さんにたずねては行けない。君たちとお姉さんとの約束だ」
　そのままどんどん収集がつかなくなるほどの大騒ぎ隣、ネギもそれを止めようとオロオロしだす。
　とても修学旅行中、生徒を守ろうと勇敢に戦っていた少年とは思えないほど動揺している。

「確かに」
そんな中、メガネをくいっと持ち上げながらハルナがつぶやく。
「カワイイ女の子を見世物にするというのは、いささか単純かもしれないわね」
先程まで騒いでいた人たちがハルナの言葉に耳を傾ける。そして、
「逆ならいいんじゃない？」
その言葉に騒いでいた人たちがその手があったか、とばかりに納得し、
「じゃ、ネギくんをノーパンに！」
とネギが確保され、抵抗虚しくどんどん服を脱がされていく。
そこに、
「コラーーお前ら！　朝っぱらなにを！」
新田先生が扉を思いっきり開けて叫ぶ。
新田先生の前に広がる光景は、数人の生徒が涙目のネギの服を脱がしていた光景。
「な、ななな。なにをやっとるか！　全員正座！」

「なんでいつも連帯責任なのよ」
霊夢が隣にいる龍宮に愚痴を言いながらも仕方なく従う。
「仕方あるまい。それが集団生活だ」
「納得いかないわね」

後日、前回の反省を踏まえて多数決をした結果、３—Ａはお化け屋敷となった。
「……てか、ネギ先生、相坂のこと、無意識に見えてるじゃないの」
お化け屋敷の票数の一つに地縛霊の相坂さよがか数えられていたことに気づいたのは、霊夢だけだった。

その日の夜。
「ちょっとコンビニ行ってくるわ」

「おーう」
寮の部屋で寝転がっている魔理沙に一声かけて外出の準備をする霊夢。
「霊夢、最近夜によくコンビニ行くな」
「まぁ、便利だしね」
それだけいうと霊夢は外へと出る。少し離れたところにある学校に近いコンビニに行くと、そこには地縛霊のはずの相坂さよが入り口前で佇んでいた。
「あんたね。地縛霊なら地縛霊らしく教室にいなさいよ」
「ひゃっ!?」
霊夢が声をかけると、驚いたように飛び跳ねて霊夢の方を恐る恐る見る、さよ。
「は、博麗さん?」
「夜教室行ってもいないと思ったらこんなところにいるし。数日見てたけど、声かけもしなければなにもしないのね」
「わ、私のこと、見えるんですか?」
「たまーに見えなくなるけど、今は見えてるわよ」
「すごいです! 私、存在感なくて、どんなお祓い師や霊能者にも見えなかったのに」
「確かに存在感薄いわね、あんた」
霊夢の言葉に一気に気分が落ち込むさよ。
「ま、気にする必要はないわよ。現代のお祓い師や霊能者は偽物多いし」
「そ、そうなんですか」
涙目のさよに霊夢は、ええ。と同意する。
「あの、博麗さん! 私と、友達になってくれませんか」
「……」
さよの言葉に霊夢は無言で御札を取り出す。
「ひぃ!」
「私はあんたを成仏させる側の人間なんだけど。友達って何言ってるのかしら」

御札をペラペラと見せつけるように動かす霊夢。
「わ、私友達募集中なんですー！」
「そんなの知ったことじゃないわよ」
「ご、ごめんなさいー」
涙目で謝るさよにばつが悪そうな顔をする霊夢。
「あー、もうわかったわかった。あんた悪霊になりそうにないし、何もしないから」
「ほ、本当ですか？」
「本当よ、ほら」
まだ涙目のさよに見せるように札をしまう霊夢。すると、ようやく落ち着いたのか涙が収まる。
「もー。で、あんた何してるの？」
「教室に一人でいるのは寂しいですし、怖いので、こちらに」
幽霊が何を怖がるんだか、と言いたくなる霊夢だが、よく考えれば、半人半霊の魂魄妖夢も幽霊が嫌いだと言っていたことを思い出し、何も言わないことにした。
するとそこに、
「あれ、霊夢さん？」
ネギとアスナ、このか、刹那、さらに朝倉が偶然近くを通りかかり、霊夢がいたことでネギが声をかけてきた。
「どうもネギ先生」
「どうしたんですか、こんなところで」
「コンビニが便利なのでたまにこうしてきてるんですよ」
「遅くならないように気を付けてくださいね」
「あの、こんばんは！」
ネギと霊夢が話をしていると、さよがネギの近くで頭を下げて大声を出して挨拶する。しかし、ネギは気づかない。
ネギは他の人たちと一緒にその場を離れようとしてしまう。
「おやすみなさい、先生」
「はーい、おやすみなさい」
「じゃあねー、霊夢ちゃん」

「ほななー」
手を振ってネギたちと別れようとする霊夢。その横には、声をかけても気づかれなかったさよが落ち込んで、さらに転んで泣いていた。
「……足もないのに転んじゃうなんて。私ってやっぱりダメダメのダメ幽霊～」
なにやってんのよ。
足元で泣いているさよを見ながらそう考える霊夢。しかし、
ネギが何か気づいたように後ろを振り向き、霊夢の方を見る。
「？」
しかし、気のせいだったのかと思ったのか、ネギは手を振って霊夢にさよならを伝えてくる。
霊夢も手を振って返事をする。そして、
「……やっぱりネギ先生、無意識に気づいてるっぽいわね」
「え、本当ですか」
霊夢のつぶやきにさよが反応する。
「そーゆー訳で、明日から学際準備で深夜まで教室にいるけど大目に見てね」
「ちゃんと規則の９時までに帰ってくださいよ」
アスナとネギのそんな会話が聞こえてくる。すると、
「深夜まで……。昼間はダメです、夜なら……」
ぼそぼそとさよが独り言を喋る。
そして、
「今年こそ、お友達を作ります」
「ま、頑張んなさい」
やる気満々の宣言に霊夢はそれだけ伝える。

次の日の夜、さよが教室内で出てきたが、突然の幽霊の出現に驚かせてしまい、写真を撮られ学校新聞に悪霊として載ってしまっただけだった。

悪霊相坂さよ退治

「あんた何してんのよ」
「ふえええええん」
夜の教室で霊夢がさよを呆れた目で見ている。さよは涙目になっている。
悪霊として新聞に載ったことについて、昼間に言おうとしたが昼間は姿を見えなかったためこの時間になってしまった。
「ん？」
すると何やら騒がしい声が聞こえてくると、なんと変な銃のようなものを持った3—Aのクラスメイト達が教室に入ってきた。
「なにあれ……？」
「あれ、霊夢ちゃん？　やる気満々だねー」
銃を持った5人のうちの1人のまき絵が霊夢に気づいて声をかけてくる。
「やる気満々って何のことよ」
「あれ、聞いてないの？　私たち、幽霊『相坂さよ』除霊討伐隊だよ」
聞いてないわね。
さよはまき絵の言葉を聞いてガクガクと震える。
「ひいい」
「超（ちゃお）が作ってくれたこの除霊銃でぶっ飛ばすよー」
「またあいつか……」
霊夢は呆れたようにつぶやく。そして、
「てか、帰んなさい。別に無理して除霊する必要ないわよ」
「え、なんで？」
「悪霊じゃないからよ。悪霊になる気配もないし」
「霊夢ちゃん、見えてるの？」
「ええ。今ここに———」
と、霊夢がさよを指さす。
「総員、除霊銃準備開始ー！」
直後、祐奈が声を上げ、銃を構える。他4人も霊夢が指をさしたと

ころを標準に構える。
「ちょっ、待ちなさい、あんたた――――」
「照射！」
祐奈の言葉と同時に全員が引き金を引く。するとレーザーのようなものが照射される。
「うわああ、何か出た」
「あのタヌキ、なんてもん作ってるのよ」
「ひいいいい」
どうやらレーザーを回避できたらしいさよ。しかし、恐怖のあまり力み過ぎてしまったのか、教室中の机や椅子が宙に浮きだす。
「ぽ、ポルターガイスト!?」
「キタコレ、マジの心霊現象！　激写！」
机と椅子が教室中と飛び回る怪現象を目にキャーキャー叫ぶクラスメイトたち。
「さよ！　今すぐ能力を抑えなさい！」
霊夢が涙目のさよに向かって近づきながら叫ぶが、さよ自身もどうすれば収まるのかわかっていないようでアワアワと慌てている。
霊夢が近づいたのを見て、狙いの幽霊がそこにいると断定した裕奈が銃を構える。
「そこだー！　除霊銃照射開――――」
「させるか」
霊夢は自身の武器である針を取り出すと、裕奈の銃めがけて投げる。針は見事、レーザー照射の穴に吸い込まれる。
すると、引き金を引いてもレーザーが照射されることはなくなった。
「あ、あれ？」
「精密機械って余計なものがあるだけでも動かなくなるのよね」
「うそぉ！」
「むむむ、こうなったら、予定を変更して」
その光景を見てたカモがそう呟き、
「先生！　先生！」

その声に続いて龍宮と刹那が教室内に入ってくる。
「うむ。仕事料は弾んでもらうぞ」
「いいのかなー、みんなの前で」
完全に仕事着の2人に対し、霊夢は怪訝な顔をする。
「そこだ！」
龍宮が小さな針を何発も同時に放つ。それはさよのすぐ横を通って壁に突き刺さる。
「ひぃぃ」
「逃がさん！」
龍宮が銃を構えてさよのいる方へ突っ込もうとするが、そこに、
「待ちなさい、真名」
霊夢がお祓い棒を構えて龍宮の動きを抑える。
「霊夢、邪魔をするのか？」
「そりゃするわよ。どう見ても悪霊じゃないし。なる気配もないもの」
「なるほど。しかし、君にとってその幽霊、守る必要のあるものなのか？」
「……そういわれてみればそうね」
龍宮から視線を外し、さよのほうを見ながらつぶやく霊夢。
その言葉を聞いたさよは震え上がるが、
「まぁ、でも。６０年一人だったらしい可哀想な子を、問答無用で強制成仏させてやるほど、私は鬼畜じゃないわよ」
「そうか。残念だ」
龍宮の雰囲気が変わったことを感じて霊夢はお祓い棒を強く握る。
……強いわね。
「霊夢さん、申し訳ないですが、我々も依頼された身」
刹那も刀を構える。居合の構えでいつでも抜けるようにしている。
「いいわよ、２人ともまとめてかか――――」
「あの、相坂さん。あなたが出ていた目的は何ですか？」
霊夢はのどかのそんな声が聞こえてきて言葉を止める。
そうか、のどかの読心術の本ならさよが友達がほしいって思ってる

ことがわかるはず。これで解決ね。無駄な戦いする必要なさそうね。正直、龍宮と刹那2人まとめて相手はつらそうだし。
そう考えて、お祓い棒を下ろそうとする霊夢。だが、
「あ、悪霊ですー！やっぱりこの人悪霊ですぅー！」
のどかは焦った声を出して本を思いっきり閉じる。
「宮崎⁉　なんでそうなるのよ！」
まさかの反応にさすがの霊夢も叫ぶ。
「宮崎さんの読心術は本物です。霊夢さんより宮崎さんのほうが信用できます」
あー、もう。あの子何してるのよ。
「そうなるわよね……」
呆れたようにぼやく霊夢。
「宮崎！　もう一度確認しなさ――」
ここまで言って霊夢はしゃがむ。そこに、刹那の刀による一閃が来てギリギリで回避する。
「刹那！」
「峰打ちですのでご安心を」
「どこも安心できないわよ」
しゃがんだ状態で刹那の足を蹴り飛ばして足払いをして転ばせる霊夢。
その隙に龍宮がさよに向かって走り出す。
「待ちなさい」
さよは教室外に逃げていき、龍宮がそれを追いかける。さらに霊夢もそのあとを追い、起き上がった刹那がそれをさらに追いかける。
「ふっ。ずいぶんと隠密性の高い霊体だな。だが、我が魔眼からは逃れられん」
銃をさよに向かって撃つ龍宮、それを偶然にも当たらず逃げているさよ。
「待てって言ってんでしょうが！」
龍宮のすぐ上空に零時間移動をする霊夢。そして、そのまま蹴飛ばそうとするが、龍宮はわかっていたかのように回避する。

「ふっ」
龍宮は霊夢に向かって銃を向ける。
「悪いな、霊夢」
「くそ」
銃撃を回避しきれず銃弾が肩に当たり吹き飛ばされる。
「すまない、霊夢さん。悪霊退散奥義」
撃たれて床を転がる霊夢の横を刹那が通り抜ける。
「斬魔剣」
霊的な物を斬ることができる神鳴流の奥義を刹那は使用するが、さよは再び避ける。
「みぎゃあああああ」
刹那はさらに追撃をしようと振りかぶる。そこに、
「待てって言ってんでしょうが！」
刹那の影から出てきた霊夢が手刀で日本刀を持っている右手の手のひらを叩いて刀を手放させる。
「なっ」
刀が床に落ちる音が廊下に鳴り響く。
「悪いわね、刹那」
右手を掌底に構えて、一撃で意識を飛ばそうと霊力を込める。しかし、その手首を刹那が掴み、そのまま手を引っ張ることで動きを阻害する。そして、
次に手を放して霊夢の肩を掴んで引き込むと足を絡める。そのままジャンプして空中で前方回転をする。
「神鳴流　浮雲（うきぐも）・旋一閃（つむじいっせん）」
「付き合うつもりはないわよ」
零時間移動によって霊夢の姿が消える。刹那は投げをキャンセルして着地する。
「真名！」
「ふっ、霊夢！」
壁に寄りかかり、もう逃げられないさよと銃を向ける龍宮の前に現れる霊夢。射線を体でさえぎるが、

龍宮は気にせず撃つ。
「すまないが、こちらも仕事なものでね」
霊夢は力なく、前から床に倒れこむ。
「さて、そろそろ終わりにしよう。成仏しな」
さよに銃を向ける龍宮。しかし、その銃が下から振られたお祓い棒によって弾かれて、龍宮の手から離れる。
「ほう。急所じゃないにしても確実に撃ち抜いたはずだが」
無傷の霊夢が立ち上がり、お祓い棒を逆手に持って、さよを守るように構える。
霊夢は制服の上着に手を入れると、そこから紙を一枚取り出す。
「防御用のお札よ」
「なるほど。装備に救われたか。ならば、その防御ごと撃ち抜くことにしよう」
構える龍宮。次の瞬間、両手にハンドガンが握られている。
「ま、まってくださーい」
杖にまたがったネギと朝倉がやってきて、さよの近くに着地する。
「ネギ先生……」
「お願いです、龍宮さん。この人は悪い幽霊じゃないんです」
「しかし、ネギ先生」
「さっきからそう言ってんでしょうが」
「友達が欲しかっただけなんだよね、さよちゃん」
朝倉とネギは自分たちで良ければ、と友達になってほしいと伝えると、涙目でさよの姿が消える。
「おーい、どうなったの？」
アスナとこのかもやってきて、
「無事成仏したようですね」
とネギが言ってなぜか感動のシーンにしているが、すぐそこに頭を何度も下げて謝っているさよがいて、
「いや、まだいるけど」
「成仏ってネギ先生、イギリス人じゃ？」
「……ナニコレ」

霊夢は困惑しながらも気にしないことにしてその場を離れた。

あの日の密会

「……魔理沙、おかわり」
「あいよ」
今日もまた超包子（チャオパンズ）で働く魔理沙を見ながら朝食を食べる霊夢。
「ハカセの姿がないわね……」
肉まんにかぶりつく。
「おはよ、茶々丸」
大量の蒸籠（せいろ）を持った茶々丸が通りかかったので挨拶だけする霊夢。
「おはようございます、博麗さん」
目の前の茶々丸はいつもと違い、髪を上げてショートヘアーのようになっていた。
挨拶だけして茶々丸は仕事に戻り、客席に蒸籠を置いていた。
「あ、おはようございます」
茶々丸が軽く会釈をする、その視線の先にはちょうどネギたちが来ていて、いつもの、と注文をしていた。
「あれ、茶々丸さん、髪を上げたんですね、似合っていますよ」
ネギはすぐに茶々丸の変化に気づいて誉める。
まさか気づいて誉められると思わなかったのか、呆けた表情をする茶々丸。
霊夢はそれを見て、へえ、あの子こんなに表情豊かなのね。と変なことを考えていると、そこに葉加瀬が来る。
「あーー。ダメだよ、茶々丸。髪なんて上げたら。それは放熱用なんだから」
「ハカセ……」
「なんでそんなことしたの？　オーバーヒートしちゃうよ？」
「それは……」
茶々丸が言い淀んでいると、すでに席について、食べているこのかとアスナが代わりに答えてしまう。
「なんでって、ハカセちゃん、なーー？」
「茶々丸さんだってオシャレくらいしたいよねー？」

「おしゃれ？」
　そんなプログラム入れていないっと困惑するハカセ。
「オシャレですか。カワイイと思います、茶々丸さん」
「え、そ、そうですか。そそ、それはどうもありがとうございます」
　ネギの誉め言葉に慌てながらお礼を言い、仕事に戻ろうとする。
　しかし、一歩も歩くことなく、自分の足に自分で引っ掛けてしまい、転倒してしまう。
　アスナと刹那が優れた反射神経で空中にばらまかれた蒸籠をいくつもキャッチ。すぐに茶々丸に返す。
「大丈夫ですか？　茶々丸さん」
　ネギがすぐ近くで顔を覗き込むようにして心配して声をかけると、それに驚いてまた蒸籠をばらまいてしまう。
　ハカセは茶々丸の調子を聞くが、システム異常はない、と答える。すると、少し考えて、
「茶々丸ー。久々にあなたをバラして点検整備したいから放課後研究室寄ってくれないかな？」
「ハ、了解しました」
「バラすって、もうちょい言い方ってもんが……」
　外野から話を聞いていた霊夢はそう呟くと、そこに、
「や、霊夢さん」
「なによ、チャオリンシェン」
「警戒しすぎヨ」
「ふん……」
「で、どうかな？　仲間になってくれるかナ？」
「その話は断ったでしょ。諦めなさい」
　お互いが視線をそらさない。漫画なら、お互いの間に火花が散っているような描写が書かれるほどお互い見つめあっている。
「本当に、変えたい過去はないのかナ？」
「ないわ」
「そか、残念ネ」
　超はそれだけ言うと霊夢から離れていく。

「霊夢さん。私の仲間になってくれないカ？」
その言葉に霊夢は怪訝な視線を向ける。
ある日の夜。女子寮の屋上にて、２人は対面をしている。
「何を企んでいるの？」
「んー、それは仲間になってくれないと話せないかナ？」
「それで仲間になれって無茶を言いすぎじゃない？」
「んー、じゃあ」
超はわざとらしく考えるような仕草をする。
「私の仲間になったときの利点を教えるヨ」
「利点、ねぇ」
「これ、秘密でお願いするヨ。実は私は」
ウィンクをして口元に指をやってかわいく見せる仕草に霊夢は若干イラっとするが我慢をする。
「未来から来た未来人なのネ」
「……」
「おや？　驚かないのかナ？」
わざとらしい驚きの表情。この会話も全部この天才の読み通りなのか、と霊夢は疑いを持ち始める。
断られること、ここで未来人だとカミングアウトすることも、すべて超（ちゃお）の筋書き通りなのでは。と。
「今更未来人が増えてもね」
魔法使いに吸血鬼、烏族のハーフ、機械人までいるクラスを思い浮かべて言う。
「あはは、それもそうネ」
霊夢は、どうすればこいつの筋書きから出られるかを考える。このまま筋書き通り進めば、仲間にならざるを得なくなるかもしれない。しかし、もしも幻想郷の崩壊が真の目的だとすれば、仲間になるわけにはいかない。
「未来人なら過去に行く方法がある。つまり、過去に行って望む現在

に変えてあげる、ってところ？」
「そうネ。さすが博麗の巫女。勘がいい。ふむ。仲間になる前に私の目的を話すことはできない。だが、これだけは教えられるヨ」
一呼吸置く超。そして、
「私の目的が成就されれば、幻想郷は秘境ではなくなる、かもしれ「その一言で十分だわ。私はあなたには協力しない」」
超の言葉をすべて聞く前に拒否の返事をする霊夢。その言葉を聞いて、超は驚きもしないが、
「あはははは」
笑う。おなかを抑えて笑う。その予想外の行動に霊夢は呆気とられる。
「霊夢さんの言う通りだったネ。できれば嘘をつかずに仲間にしたかったから本当のことを言ったガ。まさかここまで予想通りになるとハ」
「私の言う通り？　何を言っているの？」
唐突な語りに霊夢は何を言っているのか、と混乱する。
「そりゃそうネ。この時代の霊夢さんじゃないよ。私の時代の霊夢さんヨ」
「何を、言って……。過去に行くほどの力、どう考えても１００年以上はたっている。私は生きてないわよ」
まさかのカミングアウトに霊夢が珍しくうろたえる。
「そうか、この時代の霊夢さんはまだ人間だったネ」
「私はずっと人間よ」
「私の時代の霊夢さんは仙人として生きていたヨ」
「仙人の修行なんてしてないわ」
「詳しくは聞いてないネ。でも、望んでいなくても、今のまま行けば、霊夢さんは自然と仙人になるネ」
ありえない、と霊夢は信用しない。
「まぁ、信じられないだろうネ。でも、事実だヨ」
「信用できないけど、今の話と関係ないから置いておくわよ」
「どうしても仲間になってくれないカ？」

「ダメよ。幻想郷に影響があるなら博麗の巫女として絶対に協力できない」
「ざーんねん。でも諦めないヨ」
そう不敵に笑うとその姿が徐々に透明になっていき、消えていった。
「……。透明化、か」
未来人。そして仙人。
霊夢はその場で立ち尽くし、考える。
「……」
携帯を取り出すと、すぐさま電話をかける。
「紫？　ちょっと聞きたいんだけど」
『なにかしら？』
電話口から聞こえる紫の声に、何かすべてを察しているような気がするが、霊夢は気にせずに問う。
「仙人って道教の思想じゃなかった？」
『ええ、そうよ。でも、あくまで道教で理想とされている存在であって道教である必要はないのよ』
「……そう」
『気にすることはないわよ。あなたはあなたのしたいように動けばいい』
紫のその言葉を最後に通話が切れる。

学園祭準備②

数日後。
お昼休みに霊夢は大量の段ボールを運んでいた。
クラスの出し物がどうしても間に合わないためお昼休みも返上で準備をしているのである。霊夢は荷物を教室内に運んでいて、あまりに大量の段ボールが霊夢の身長を超えている。あまりの荷物に回りにいる人が霊夢を視線で追ってしまう。そんな状態になっていた。
重そうな荷物だが、霊夢は涼し気な顔をして持ち運んでいるためそれが余計に拍車をかけて、みんなが驚き足を止めてしまう。
そんな周りの状況も知らず、３―Ａの教室へと向かう霊夢。
そこに突如として顔から上の荷物が浮き上がる。
いつの間にか隣にいて荷物を持ち上げた人物に霊夢は声をかける。
「何ですか、高畑先生」
そこにいたのは、白スーツで無精ひげを生やしたメガネの男、タカミチ・Ｔ・高畑。
「いやー。さすがに教師としてこんなに荷物を持った生徒を放置するわけにはいかないからね」
「ご心配なく。もう学校内の地図は頭に入ってます」
「でも、歩いている人にはぶつかるかもしれないだろ。前はちゃんと見て歩かないと」
「……そうですね」
一緒に歩く霊夢とタカミチ。しかし、会話はない。
「クラスにはなじんだかい？」
その沈黙を破ったのは、タカミチだった。
「ええ。とても愉快な子たちのおかげで」
「それはよかった」
本当にうれしそうな笑顔で言うタカミチ。
「私のことご存知なんですね」
「僕はネギ君の友達だからね。そういうことだ」
自分は魔法先生だとうまく濁して伝えるタカミチ。

「友達、ね。親と子ぐらい歳が離れてるように見えるけど。いえ、祖父と孫かしら」
「ははは。確かに僕は老け顔だけどね。そこまでではないよ」
それに、と付け加えて、
「友達であることに年齢差なんて関係ないよ。そのへんは君らのほうがよくわかるんじゃないかい？」
「そうね」
人妖では生きる年数が違う。そのため人妖の友人というのは１００歳差でも差が少ないほうになる。
そんな話をしていると３―Ａの教室に到着する。
「おーう、霊夢。と、高畑先生？」
そこにちょうど魔理沙が教室から出てくる。
「ちょうどよかった、霧雨くん。これお願いしてもいいかな」
「ん、おお」
魔理沙がタカミチからダンボールを受け取る。
「ネギ君をよろしく」
そう言ってタカミチと別れる。
「何話してたんだ？」
「他愛もない雑談よ」
教室に入ると、クラス総出で準備している。すでにネコ耳等をつけている娘（こ）もいる。
「ねーねー、霊夢ちゃん、これ見た？」
ダンボールを置いた霊夢にまき絵が近づいてきてくる。その手には麻帆良スポーツという新聞紙で、
「なになに、世界樹伝説ホントに効果あり、ねぇ」
見せられた紙面を読み上げる。
「くだらないわね」
新聞紙をまき絵に返す霊夢。
「えー、でもー。成功例とかたくさんあるよー」
「ほうほう。世界樹の魔力。あらゆる障害、困難を突破。周囲からありえないと言われるほどの年齢差、外見アンバランス、セレブ度を乗

り越えたカップル成立多数報告」
　魔理沙が受け取って記事を読み上げる。
「あらゆる障害、困難ねぇ。魔理沙、霖之助さんでも誘ったら？」
「どうしてそこでこーりんが出てくるのかわからないぜ」
　面白いおもちゃを見つけたように言う霊夢に魔理沙が、なんだその顔、と思いながらも言葉を返すと、
「なになに、魔理沙ちゃん、告白する相手いるの!?」
　まき絵が多大に反応してくる。
　魔理沙がしまった、と思うがもう遅い。霊夢はその場を離れ、自身の作業をしに行ってしまい、その場に残るのは恋バナに飢えた女子中学生たち。
「いやいや、霊夢の勘違いだ。親の弟子なんだよ。その関係で昔から知り合いってだけで。しかも独立したのはあたしが生まれる前のことだし」
「つまりは年の差カップルか」
　ハルナが目を光らせる。
「話聞けお前ら！　別にあたしとこーりんはそういう関係じゃないっての」
「あだ名で呼んでる。怪しいねぇー」
「朝倉も何言ってるんだぜ。変に話を持っていこうとするな」
　キャーキャーと、黄色い声が教室内に響く。
「自分に話が来るのを恐れて親友を売るか」
「別にそういうわけじゃないわよ」
　元凶は龍宮とそんな会話をしながら出し物の小道具制作を開始する。
　そんなこんなで数日後。学園祭まであと、２日。
「眠い……」
　音が最小限になるように気をつけてトンカチを振るう霊夢。時間はすでに深夜、本来は教室にいてはいけない時間なのだが、クラス全員がそこにいた。

「トンカチ気をつけて。音たてないでよ」
「無茶言うな」
皆小声で会話をしながら文化祭の作業を進める。
「忍び込んで泊まり込みってなんかワクワクするねー」
笑顔でそんなこと言っているまき絵に霊夢が呆れた目線を向ける。
「うう。泊まり込みは前日以外禁止ですのに」
「仕方ないじゃん、間に合わないんだもの」
「わかってますわ」
そう。本来禁止されている泊まり込みでの準備をしているのだ。そのためあたり音はたてられない。
ついでにいうと、別の教室でも同じように泊まり込んでの作業をしているため、毎年の恒例行事なのかもしれない。
「僕教師なんですけど」
取り締まる側のはずのネギも準備をスケジュール遅れを取り戻そうと躍起になっている。
「ああ、すみません。ネギ先生」
「来たよ、新田」
隣の教室の生徒が一人、見回りを行っている教師の接近を知らせてくれる。そこから全員迅速に音を出さずに物陰に隠れる。
新田教諭は手に持つライトで教室内を照らすが、中には入らない。すぐに部屋を出て廊下を歩く新田教諭。
「作業開始ー」
小さな声で作業を始めるように言うが、なぜかいいんちょだけはちょっと大きな声でずるい、と言って、ばれかけた。

数時間後。朝日が昇って、麻帆良祭前日。。
入口だけは完成。しかし、教室内は全くできていないところまで完成した。
そして文化部で出し物がある部活に入っているメンバーが徹夜明けにも関わらず元気に走って教室を出て行くと、部室へと向かって

いった。
「元気良すぎ」
あくびしながらつぶやく霊夢の横には目を閉じて舟をこぐ魔理沙。
「なーなー、コレ見た？」
「また真帆スポ？」
亜子が出す新聞紙は麻帆良スポーツで、そこには、
「世界樹伝説は真実？　２２年に一度、その真の力が発言する。また怪しいネタだね」
「でもな、２２年に一度、最終日にのみ光る世界樹が、最終日以外にも光るんだって」
「じゃ、私少し仮眠とらせてもらうわよ」
そんな話をしている亜子と祐奈に一言入れて霊夢が教室を出て行こうとするが、
「いや、少し待ってくれ、霊夢。ちょっといい話があるんだが」
それを龍宮が止める。霊夢はちょっと不機嫌そうな顔をして、
「それは私の眠気が飛ぶ話かしら」
「ああ。ちょっとした儲け話だ」
「詳しく教えなさい」
眠そうな表情が一転、目を輝かせて龍宮に問い詰める霊夢。
「ここじゃなんだ、少し出るぞ」
龍宮が教室を出るので、それについていく。
中学校舎の図書室に行く2人。そこは運よく誰もいない。
「学園長から学祭中の依頼が来ている」
「学園長から？　どんなの？」
「うむ。まず、さっき和泉たちが話していたが、世界樹伝説については知っているか？」
「告白すれば確実に恋人になれるっていうあのくだらないうわさ話？」
「ああ。その噂なんだが、実は真実でな。あの世界樹は強力な魔力がある魔法の樹で、その魔力が人の心に作用する。結果、告白については、成就率１２０％となるらしい」

「魔法の樹か。なるほど、あの巨大さはそこが原因か」
「ああ。魔法がばれないように気を付けてほしい、とのことだが。告白さえ止めれば手段は任されている」
「なるほどね。真名もやるの？」
「ああ。くだらない仕事の割に報酬がいいのでな。誘われたときにお前も誘っていいか聞いて許可をもらった。一緒にやらんか？」
「いいわね」
そこからいつその任務につくのかなど、時間等を細かい話をして、2人は教室に戻った。

学園祭初日　仕事

そして1日後。麻帆良祭当日。
３日間で延べ４０万人の来場者が来るという特大イベント。
すでにたくさんの来場者で道は混雑しており、様々な催し物が開催され、来場者を楽しませている。
そして、３―Ａの教室では、『ドキッ♡女だらけのお化け屋敷』が完成していて、すでにものすごい行列ができていた。
「……。なにこれ」
「今更だぜ」
霊夢の仕事の番。霊夢は麻帆良とは違う制服を着て、学校の怖い話の扉の前に立つ。他の２つの扉にはまき絵と委員長が立っていた。
男性のお客さんが１人、入ってくる。
そして、そのお客さんは霊夢の扉を選んだため、霊夢が付き添いで扉の先に入る。
「おお。これは怖い」
男性はそう言って、霊夢の肩を抱き寄せようとするので、隠し持っていたお祓い棒でその腕を止める。
「１回目は見逃す」
「は、はい」
霊夢にすごまれて男性は引き気味になり、そういうことをしなくなるが、お化け屋敷自体はレベルが高く、男性もかなり怖がっていた。
霊夢は普段やらない芝居をやる羽目になってすごく疲れていた。
「大変です。どうやら私たちは学園に潜む悪霊を怒らせてしまったらしい。急いで逃げないと呪い殺されるかもしれないわ」
そんな感じで午前中はそんなクラスの仕事をこなし、そして、午後。
クラスの仕事を終え、屋台で焼きそばを買って行儀悪く食べながら歩く霊夢。
「待たせたわね」
食べ終わると同時に、ライフルを構える龍宮に声をかける。
「気にするな。むしろ急がせてすまない」

ライフルのスコープを覗きながら言う龍宮に、霊夢は気にせず持っていた焼きそばの入っていた入れ物を近くのゴミ箱に放り投げる。
直後、龍宮がライフルを撃つ。すぐに空薬莢を射出すると、ようやく顔を上げる。
「終わったの？」
「あぁ。……霊夢」
「なに？」
「急がせてしまったのはすまないが、仮にも女としてソースが口元についたままなのはどうかと思うぞ」
そう言ってポケットティッシュを差し出す龍宮。
「……」
受け取って口元を拭くと、そのティッシュを見る。確かにティッシュにはソースの染みがついた。
「悪いわね」
「よし、仕事をしよう」
そう言って龍宮はポケットから何かを取り出す。それは携帯のようなものだが、上に丸いものがついている。
「なにこれ」
「これは簡単に言うとこれから告白しそうなやつを感知する機械だ。数値が高ければ高いほど告白する可能性が高くなる」
これは霊夢の分だ。と渡してくる龍宮。
ありがと、と礼を言い受け取ると、それをジッと見つめる。
「どのくらいいた？」
「さっきので5人目だ」
「やれやれ、初日だってのに」
霊夢が文句を言ってると、ピピピ、となる。
「次が現れたようだ」
「どこ」
「こっちか」
先程龍宮がライフルを覗いていたのと逆の方角らしく、龍宮がそちらを見る。

霊夢も見ると、明らかに告白寸前の男がいる男女のカップルがいる。距離はかなりあり、普通の人間ならば言われてようやく気づくことができる距離だろう。
「ちっ」
すぐにライフルを構えようとする龍宮。だが、
「私のほうが早い。私がやる」
霊夢が右手で龍宮を制する。
「天石門別命（あまのいわとわけのみこと）」
神様をその身に降ろすと、左手を伸ばす。すると、カップルの足元に暗い穴が突如として現れ、２人が（おそらく悲鳴を上げながら）落ちる。
次に穴の中に影の転移門（ゲート）を生み出し２人を告白禁止エリア範囲外へと飛ばす。
「これでよし」
「神降ろしか。始めて見たよ」
「よくわかったわね、神降ろしって」
「明らかに気配が変わったのでな。それに私とは違い、霊夢は本物の巫女だ。そのくらいできるだろう」
「あら、そこまで評価をしてくれるのね」
龍宮はライフルをケースに片付け始める。
「世界樹広場のほうに行くか」
「ええ」
高々とジャンプして屋根の上を飛びながら世界樹広場へと向かう。
「ねぇ、真名。さすがに殺してはいないわよね」
「心配するな。これは麻酔弾だ。１０分程度で目が覚める」
「１０分後目覚めてまた告白するんじゃない？」
「それも問題ない。学祭中二度と告白できないように期間中、全身を麻痺させる神経毒入りだ」
「あら、それなら大丈夫そうね」
せっかくの学祭が寝たきりなのは青春が無駄になるのではないのかという発想は２人にはない。ただ、仕事をこなせばいい、という考

えしかない。
　広場が良く見える場所に到着するが、今のところ告白探知機は動かない。
「少し待機だな」
「そうね」
　霊夢はペットボトルのお茶を取り出し、床に座って飲み始める。
「神様は降ろしたままなのか？」
「あまりたくさん降ろすとうるさいのがいて」
「どういうことだ？」
「んー、同じように神様降ろせるやつがいるんだけど。私が修行で降ろしてたら、神様降ろして何か悪だくみしてるんじゃないか、と自分が疑われた。紛らわしいことをするな、って怒られたのよ」
「なるほどな」
「ただ、頭の中で神様がうるさいけど」
「ははは。それはご愁傷様だな」
　数分のんびりと会話をしながら過ごしていると、再びピピピと少し小さめの音がなる。
「むっ」
　すぐにライフルを取り出す龍宮。
「あれ、だな」
　高校生ぐらいの男女が階段を歩いているのが見える。
「私がやる？」
「いや、まだ時間がある。私がやろう」
　スコープを覗いて告白のタイミングを待つ。そして、告白しようとした瞬間で、撃つ。見事、頭を狙撃し、告白しようとした男は衝撃で吹き飛ばされる。
「これで７人」
「てかさ、これ噂になり初めてない？」
　こんなことをし続ければ、告白しようとすれば災いが降り注ぐ、と噂になるのでは、と危惧する霊夢。
「むしろ噂になったほうがやる人間がいなくなって……むっ」

「あ」
少し離れた人気(ひとけ)のない高台の上で、ネギ、アスナ、刹那、このかの4人が突如として現れる。
「あれは」
「ネギ先生ね。行く？」
「あぁ」
龍宮がライフルが銃を片付けると、ネギの元に行く。
到着までの間に、アスナと刹那、このかはネギと別れてしまった。
「フフ。女のことで悩んでるって顔だな」
「え!?」
後ろから声をかける龍宮。驚いたネギが急いで後ろを向く。
「た、龍宮さん、霊夢さん」
「やあ、先生も世界樹のパトロールかな？」
「あ、はい」
「先生も大変ねぇ」
「今、突然現れたけど何かの術かな？　スゴイじゃないか」
「あ、いえ。そんな高度な魔法はまだ」
じゃあどうやって出たのかしら？　魔道具、的なのかしらね。
「そういや姉御や巫女の姉さんにゃ、キチンと礼を言ってなかったな。修学旅行といい、幽霊の件といいどうも」
ネギの帽子の上に乗っていたカモの言葉に龍宮がいつもの様子で返す。
「なに、礼には及ばないよ、オコジョ君。私は仕事をしただけだ。報酬さえもらえれば私はなんでもするし、誰にでもつくさ」
「私はそこまでじゃないから勘違いしないでね、先生」
自分までそんな人に見られないように、と予防線をはる霊夢。
「てことは、姉御も雇われでパトロールかい？」
「ああ。学園長が奮発してくれたよ。くだらない仕事の割に報酬がいい」
先生も大変だな、頑張れよ。と労いの言葉を言う龍宮に、ネギは龍宮のことを今まであまり交流がなかったためどういう人物なのかと

悩む。
「むっ」
　ピピピ、と装置の音が鳴る。直後、霊夢がいち早く動き、その姿を消す。
「次の告白生徒が出たようだ」
「ほ、本当ですか」
　龍宮が高く飛び、すでに霊夢が移動した先、協会のような建物の上、鐘がある場所に行く。
「４人ね」
　先に行っていた霊夢が告白者の数を報告する。
「めんどうだな」
「龍宮さん！　霊夢さん！」
　ネギも追いついてくる。
「そこと、そこと、そこ。あとは、そこ。だけど、見ての通り、最後の１人は建物の陰に半分隠れてる」
「マズイぞ。どれも告白寸前だ」
「ええ！　じゃあすぐに僕が行って」
「私は最後の一つを。真名、他は頼むわ」
　霊夢が再び消える。
「ああ」
　龍宮は素早くライフルを構え、打つ。それを3連。打つとすぐにから薬莢を射出。それを繰り返し、見事に告白をしようとした男３人を撃ち抜く。
「ふう、間に合ったな」
「何やってるんですか！　龍宮さん！」
「何って告白の阻止だよ」
「ただいまー」
　狙撃したことに驚いたネギが大慌てで龍宮に問いかける。
　そこに転移して霊夢が帰ってくる。
「だ、だって撃ち殺して――」
「ああ。これはただの麻酔弾さ。１０分で目を覚ます」

「なーんだ。そうなんですか」
一転して安心しきった表情をするネギだが、
「ただし、学際中二度と告白ができないように期間中、全身を麻痺させる神経毒入りだが」
「ダメですよー！」
付け加えられた一言で再びネギは大慌て。
「私の仕事は学際中、あのエリアで告白が起きることの阻止することだ。他のことは知らないね」
龍宮の堂々とした言い分にネギがたじろぐ。
「それにほら、相手が脈ありなら逆に運ばれた保健室でいい感じになるんじゃないか？」
「な、なるほど。ってそれでもダメですよ」
一瞬納得しかけたネギだが、それでもダメだと慌てる。
「とにかく、こんなやり方はダメですよ。ついてきてください、龍宮さん、霊夢さん」
「え？　お、おい」
「私も？」
龍宮が霊夢に腕を引っ張られて外へと出る。
3人は世界樹広場で、新たな告白候補者を見つける。それは小学生の男女。
「ませてるわねぇ」
「あの2人だ。大丈夫か？」
「はい。ラス・テル・マ・スキル・マギステル」
呪文を小さく唱えると、武装解除魔法、風花（フランス）・武装解除（エクサルマティオー）を弱く発動。すると、ただの風が起きて、少女の帽子を吹き飛ばす。
「ああ、帽子が」
小学生の男女は帽子を追いかけていく。
「何をしているんだ？」
「2人をエリア外に誘導するんです」
ネギが右手を動かすと浮いてる帽子も同じように動いてどんどん遠くへと飛んでいく。

そして、エリア外の芝生の公園で高度を落として男の子にキャッチさせる。
そして2人の雰囲気からすぐに女の子が顔を真っ赤にしながら告白したようで男の子のほうも顔を真っ赤にする。
「よし、うまくいきました」
「ほほう」
「うまいものねぇ」
「むっ。兄貴、向こうにも表れたぜ」
その後もネギは様々な魔法を使って告白の範囲外を出させる。
「ふーむ。10歳とは思えない手際の良さだな」
「い、いえ」
「しかし、エリア外の告白までケアする義理はないんじゃないか？」
「ほおっておけば勝手にするでしょ」
「は、はい。でも告白しようとしている人もすごく勇気を出して頑張ってると思うので、その勇気を無駄にしたくないので」
龍宮に撃たれた人たちの治療もしたいというネギに、龍宮は微笑み、
「さすがは『偉大なる魔法使い（マギステル・マギ）』を目指すだけのことはあるな、ネギ先生。楓や刹那が肩入れするのもわかる気がするよ」
3人は世界樹広場を見渡せる建物の屋根の上に座る。
「龍宮さんは、どうして魔法使いでもないのに、裏の世界、じゃなくて魔法使いの仕事をしているんですか？」
「ん？　なんだ？　私の話か？」
「狙撃だけじゃなく、拳銃の腕もスゴイし、偉大なる魔法使い（マギステル・マギ）のことも知ってるし、龍宮さんってナゾだらけですよねー」
「そういえばそうね。気にしたことなかったわ」
「部活も大学のバイアスロン部だし、どうして大学の部に？」
「あら、そうなの？」
あまり交流がないにも関わらず所属している部活まで把握しているネギに若干驚く霊夢。
「むっ。まいったな。自分の話は苦手なんだが」

後頭部を掻きながら本当に困ったように言う龍宮。
「実は私は、マギステル・マギのパートナーだったことがあるんだよ」
「えええええ！」
ネギが絶叫で驚きをあらわにし、霊夢も声は出さなかったが明らかに驚いた顔をする。
「驚いたかい？」
龍宮の問いに、ものすごく頷くネギに、小さく頷く霊夢。
その後語られた話はとんでもない話だった。
まず龍宮とマギステル・マギだったという彼はＮＧＯ団体『四音階（カンパヌラエ・テトラコンドネス）の組み鈴』に所属し、紛争地域を中心に世界中を旅したという。
「そ、それでそのパートナーの魔法使いの人は今どうしているんですか？」
ネギの問いかけに龍宮は首から下げていたペンダントを取り、それをネギに渡す。
ネギがペンダントを開ける。霊夢も後ろから覗いてみると、中には若い青年の写真。
「死んだよ、２年前に」
「う、うひぃいい」
予想外の返答にネギが慌てる。
「あ、それはすみませんでした。僕、その知らなくて」
大慌てのネギを見て笑う龍宮。
「アハハハハ。冗談だよ。この写真はバイアスロン部の部長さ」
「えー、なーんだ」
安心しきったネギ。しかし、
「冗談、ねぇ」
霊夢だけはそれに違和感を覚えた。
しかし、指摘するのは野暮と考え、特に何も言わずにいた。
ネギはバイアスロン部の部長のことが龍宮は好きなんだ、と予想して、龍宮は鋭いじゃないか、と答える。
そしてネギの頭を掴む。

「ネギ先生がどんな女のことで悩んでいるかは知らないが、マギステル・マギを目指すのならそんな色恋沙汰で悩んでいる暇はないぞ」
ガシガシ、と頭をゆする。
「フフ。戦いの場に女は不要だぞ？」
「そんなこと言って龍宮さんも片思いじゃないですかー」
「ははは。そうだったな」
直後、装置が作動して告白者の出現を知らせる。
「新たな告白者だ。今度は多いぞ」
「何!? ちっ。次から次へ」
カモの言葉に龍宮はすぐに屋根から飛び降りると、世界樹前の広場、中心に行く。
3人ともそこで周囲を見る。
「どこだ！」
「おかしい。どんどん人数が増えて、囲まれてる！」
7人、8人とドンドン反応が増えていき、それが周囲にいることを霊夢が答える。
『ねるとんパーティー、告白タイムに入りまーす』
マイクで拡張された声が辺りに響く。
「うおおおーい！」
まさかのパーティの余興でこのような事態になったことに、カモが大声で叫ぶ。
「くっ、僕が！」
「めんどくさいわね」
すぐに動こうとするネギと霊夢。霊夢はお札を取り出すが、
「待て、君たちのやり方では間に合わない」
龍宮がそう言って両足に着けてある拳銃のホルダーからハンドガンを取り出し、2丁拳銃で周囲を連続で撃ちまくる。
その結果、大量の男どもが撃ち飛ばされて、男どもの屍が転がる。
「映画の撮影よ。気にしないで」
いつの間にかカメラを取り出して龍宮に向けていた霊夢が周囲に向かって言う。

それを信じたであろう周囲の人たちが、おぉー、と感心の声を上げる。
「仕事の上では特に冷酷になることも必要だ、ネギ先生」
容赦のない一撃にネギが怖いと感じていると、カモがもう一人いる、と告げる。
「あれ、龍宮君？」
龍宮の後ろから男性の声がかかり、そこにいたのは、さわやかなイケメンの男性。
「せ、芹沢部長？」
「姉御！　その男だ、間違いねえ」
「あれ？　カモ君、あの人ってペンダントの人だよ」
確かに似ているけど、顔の傷がない……。似た人ね。
霊夢は冷静に観察するが、いつでも龍宮ごと落とし穴に落として強制転移させる用意をする。
「ちょうどよかった、龍宮君。今日この場所で君に話したいことがあったんだ」
ネギが大慌てでどうするのかー、と言うが、
「実は俺、君のこと」
目を閉じてそれをいう芹沢部長。だが、
「ありがとう先輩、気持ちだけ受け取っておきます」
龍宮の容赦のない一撃が、まさかの意中の人物すらも撃ち抜いた。
いらない心配だった、と霊夢は手を降ろす。
「ネギ先生。私の戦場に男は無用だ」

一度その場を離れる３人。
「ネギ先生？」
「ハイ！　龍宮さん」
敬礼をするネギに困惑する龍宮。
「嘘つき」
霊夢がネギにだけ聞こえないように問いかける。

「あの部長は他人の空似だな。名前も違うし、写真にあった傷がなかった。もしや別人と知りつつ亡き思い人の面影を重ねてだったら――」

龍宮の肩に乗るカモが言葉を止める。首筋にナイフを突きつけられたからだ

「人の心にはあまり踏み込まないほうがいいぞ、オコジョ君」

「は、はひ」

龍宮は何かカードを取り出す。そこには、龍宮の幼い姿が映っており、2丁の拳銃を構えている絵だ。アスナ達が持つパクティオーカードに絵柄が似ているが、細部が若干異なる。

「ネギ先生には内緒にしてくれ。あの子に大人の話はまだ早い」

「はいはい」

霊夢の返事を聞いて、カードをしまう龍宮。

「ネギ先生!」

「サー、イエッサー、龍宮隊長」

再び敬礼をするネギ。

「コタロー君とやらに合流して仕事を続けるぞ! 準備はいいかな?」

「ハイ! 準備万端であります!」

「……真名。さすがに隊長はないわよ」

「ネギ先生が勝手に言っているだけなのだが……」

千の呪文の男と動かない大図書館

「すごっ。これ１０代の子たちが作ったの」
「麻帆良祭だもの。ほら、行くわよ」
「ちょっ。待ちなさいよ、パチュリー」
麻帆良学園の入り口、学園門の前で、２人の少女が立っていた。
一人は長い紫髪の先をリボンでまとめ、紫と薄紫の縦じまが入った、ゆったりとした服装の上から薄紫の服を着て、ドアキャップに似た帽子をかぶっている。また服の各所には青と赤と黄のリボンがあり、帽子には三日月の飾りがついた一見変わった服装をした少女だ。少女はもう一人の少女からパチュリーと呼ばれていた。
そして、もう一人は金髪の青い瞳の人形のような少女。ヘルマン伯爵との闘いのとき、ネギと共闘をしたアリスという少女だ。前と同じようにリボンで十字に結ばれ、封印されている厚い本を持っている。
少女２人は並んで門を通り抜け、しばらく歩くと世界樹の広場にたどり着く。
「魔力が若干濃いわね」
「あれのせいよ」
パチュリーは世界樹を指さす。アリスは注意深く見ると、確かに魔力が放出されていて、明るくなっていっている。
「でかい木ね」
「通称、世界樹。正式名称は、神木・蟠桃。見ての通り、魔法の木よ」
「確かに魔力を帯びているわ」
「あれがただ魔力を帯びているだけならまだよかったのだけどね」
「どういうことよ」
「あら、ちょうどいいわね。見てみなさい」
そう言って指をさすパチュリー。アリスが指の先に視線を向けると、何やらバラを背中に隠し持った男性と向き合う女性の姿。
「あら。告白かしら。いいわね」
そして、男性が告白しようとしたのか、バラを前に出そうとした瞬間、何か狙撃されたかのように吹き飛ばされた。

「え？」
　そして、男性のほうは倒れたまま動かない。
「な、なによこれ」
　周りからまたか、と言った声が聞こえてきて、アリスはこういうことがたびたび起きていることを理解する。
「いい腕ね」
「パチュリー、これは一体」
「……。これが世界樹の問題点よ。２２年周期で魔力が最大に高まるの。そしてその多すぎる魔力は心に影響を及ぼす。わかりやすく言うと、告白すると、１２０％成功する」
「高すぎる魔力が周囲に惚れ薬のような影響を及ぼしているのね。ちょっとこれは危険すぎない？」
「ええ。だから、ああやって告白を阻止している子たちがいるのよ」
「無理やりでもとにかく告白は阻止、が方針なのね」
「そりゃそうよ。解除できない、もう呪いクラスの力なんだから」
　２人がそんな話をしていると、
「あら、アリスにパチュリー？　パチュリーがいるのは珍しいわね」
　霊夢が近くに来て声をかけてくる。すぐ横には龍宮とネギ、そして小太郎までいる。
「なによ、人を引きこもりみたいに」
「引きこもりじゃないのよ」
　心外だ。とばかりにパチュリーは霊夢に返すが、アリスが何を言っているのやら、とばかりに言う。
「あれ、姉ちゃん、確かあの時の」
　小太郎がアリスを見てつぶやく。
「あら、あの時の狗族の子ね。怪我は大丈夫？」
「あ、あぁ。あんなんかすり傷や」
　アリスと小太郎がそんな話をしていると、パチュリーがネギに近づく。
「予想以上に早く出会えたわ。ここは、初めまして、と言おうかしら、ネギ君」

「あ、あの、確かあなたは」
ネギも思い出す。京都でもらった父親の写真にこの少女が映っていたことを。
「私の名前はパチュリー・ノーレッジ。あなたの父。ナギ・スプリングフィールドの古き友が一人」
よろしく。と表情を変えずに言うパチュリー。

龍宮と小太郎に仕事を任せ、霊夢とネギ、パチュリーとアリスの４人は近くでテーブルを囲う。
「驚いたわよ、パチュリー。あなたがまさかネギ先生の父親と知り合いなんて」
「そりゃ話していないもの」
霊夢の言葉に何を当然なことを、と言いたげに言うパチュリー。
「この前はちゃんと挨拶してないから、ちゃんと挨拶するわね。私はアリス・マーガトロイド。そうね、魔理沙のご近所さんよ」
「ネギ・スプリングフィールドです。この前はありがとうございました」
「気にしないで。むしろ身内もかかわってたから謝るのはこっちよ」
なぜか対面で座っている霊夢とパチュリー、ネギとアリスが話をしている。そして、
「あの、父さんの友人って言ってましたけど」
そしてついにネギがパチュリーに声をかける。
「そのままよ。あなたの会ったことのあるのというと、詠春もそうね。フフフ、懐かしいわね」
紅茶を一口飲むパチュリー。
「話がつかめないのだけど。パチュリーがネギ君のお父様の友人？」
「ええ、そうよ。アリスも聞いたことはない？　２０年前にあった魔法世界での大戦」
そういってパチュリーは懐から写真を一枚取り出す。それは京都

でネギがもらったナギたちが写った写真。
「聞いたことはあるわね」
「その大戦を結果的に止めたのが私たちってわけ」
「へぇ」
アリスは意外だと言いたげな顔をする。いつも図書室に閉じこもっているのに、戦争に参加していたとは。
「あの、父さんの話を聞かせてもらえませんか」
ネギが控えめにそう聞いてくる。
その言葉にパチュリーは悩む。この子は何も知らない。知らないからこそ、父親の話を聞きたいのだろう、と。
「そうねー」
話しても影響のない話。となると、一つしか思い浮かばなかった。
「じゃあ、ナギ(あのバカ)との出会いでも語りましょうか。オチも盛り上がりもないつまらない話だけど」
時は２０数年前へと遡る。
「これは私がとある街の図書館にいたときの話よ」

メガロメセンブリア。
その日、パチュリーはこの図書館のすべての本を読み終えようと次々読んでいた。
図書館の中には自分しか存在しない。とても静かでとても読書がはかどっていた。
「ったく、なんで俺がこんなこと」
「そう言うな。必要なことだ」
そんな静寂を破る４人の男が入ってきた。一人は東洋人の少年に、赤髪の少年、ローブを頭からかぶった怪しげな青年に、白髪の少年。
「アルがやってくれよ」
「流石に私一人ではこの蔵書量を探すのは辛いですよ」
赤髪の少年、ナギは言動からめんどくさそうな雰囲気を滲み出している。

「あなたたち、図書室では静かにするのがマナーよ」
　そこでパチュリーがついに声を上げる。注意されたことで東洋人の少年、詠春とローブの青年、アルビレオはすぐに謝罪をする。
「失礼しました」
「申し訳ありません、お嬢さん」
「へっ」
　しかし、赤髪の少年、ナギだけはふてくされたような反発する反応をする。パチュリーはそれを一瞬気にするが、ガキのことだから、とすぐに気にしないことにした。
「あなたはこちらの司書でしょうか」
「残念ながら違うわね。でも、あとそこの本棚を読み終えるだけでここの本はすべて読み終わるから、ここの蔵書に一番詳しいのは私になるでしょうね」
　本棚を一つ指さして答えると、アルビレオは、
「ほう。では、こちらについての記述がある本を探しているのですが、心当たりはございませんか」
　紙を一枚パチュリーに渡す。そこに書かれている記述について、パチュリーはすぐにどこの本棚にあるか答える。
「ありがとうございます。永春、ナギ。お願いします」
「ああ」
「しゃーねーな」
　２人が言った番号の本棚に向かおうとしたところ、突如、爆発音とともに図書館の壁の一角が崩れる。
　そして、そこから数人の真っ黒の装束の怪しげな人間が入ってくる。
「なに？　あなたたち」
　突如、巨大な竜巻が発生。怪しげな人間どもを数人巻き上げる。
「私の読書を邪魔するなんていい度胸じゃない」
「申し訳ありません。どうやら我々を狙った帝国の刺客のようですね」
「迷惑このうえないわね」

アルの謝罪をパチュリーはそう言い放つ。
竜巻が収まると、そこを狙ったかのように無事だった刺客が図書館に入ってくる。
「セブンス・マイ・マジック・スキル・マギステル」
冷めた目で呪文を唱えだし、
「『シルバー・ドラゴン』」
男どもの上空に、白銀の身体を持った巨大なドラゴンが唐突に現れ、無事だった図書館の壁を壊しながら落ちてくる。そして、男どもを何体も踏みつぶす。
竜巻、ドラゴンも避けた刺客は残り2人。逃げようとしているようだが、そこにナギが襲い掛かる。
「おっせえ！　判断が遅いぜ！」
2人を相手に平然と戦うナギ。
「お前ら！　図書館では静かにしろって教わらなかったか？　ちなみに俺は、教わってねぇ！」
その言葉とともに、最後の一殴りで2人の男をノックダウンする。
「はっ。よえーな。こんな本ずっと読んでそうな陰気そうなやつに負けるぐらいだものな。帝国の送ってくる刺客ってのはどうしてこう張り合いのねーやつばかりなんだ」
ナギの言葉に、パチュリーはイラついたのか、右手を伸ばしてナギを指さす。
「プリンセス・ウンディネ」
指の先から水のレーザーが撃たれ、ナギに向かって真っすぐ飛ぶ。
ナギはそれを見ずによけると、振り向きながら怒鳴る。
「何すんだてめぇ」
「誰が陰気ですって？」
「陰気だろうがよ」
ナギがパチュリーに向かって飛ぶ。
「ここの本全部読んだとか、陰気でしかないだろうが！」
ナギが魔法の射手（サギタ・マギカ）を放ちながら接近。パチュリーは接近を嫌って風に乗って後ろへと下がりながら魔法の射手（サギタ・マギカ）を放って魔法の射手（サギタ・マギカ）同

士をぶつける。
「あなたは本を全く読まなそうね。しかも近接戦とか。魔法使いなら魔法で勝負しなさい」
風に乗って上へと向かう。そこに、
「ならお望み通りにしてやるぜ。雷の斧（ディオス・デュオス）」
魔法でできた雷の斧。それをパチュリーは自身の周りに張られた魔法障壁で受け止める。
「かてぇ障壁だな」
「すごい魔力。でも、まっすぐでわかりやすいわね。ゆえに防ぎやすい」
もちろん、常に張っている魔法障壁では完全にダメージを０にすることはできない。だが、パチュリーは動きを先読みして魔法障壁を一部に集中することで完全に防いだのだ。
「なら、これでどうだ」
メモ帳を取り出し、中身を見ながら呪文を唱えるナギ。
「百重千重と重なりて（ヘカトンタキス・カイキーリアキス）」
「魔法使いならそんなもの見ないで唱えなさい」
パチュリーの手のひらに炎の玉ができる。
『ロイヤルフレア』
ナギはあれはまずいと判断。詠唱をやめて回避に専念することで、放たれた炎の玉を避ける。
「セブンス・マイ・ま、ゴホッ、ゴホッ」
パチュリーは呪文の途中で咳をしてしまい詠唱がキャンセルしてしまうが、収まるとすぐに次の魔法を唱える。
『ロイヤルフレア』
再び炎の玉を放つ。それをナギは舌打ちをしながら避け続ける。
『サイレントセレナ』
よけられているのを見ると、パチュリーは早い攻撃であるレーザーの魔法を使用する。
「てめ。ふざけんな」
それすらも難なく回避するナギ。

「ちっ。素直に、ゴホッ、当たりなさい」
パチュリーは一度攻撃を止めて、深呼吸をする。
ナギはその隙に近づこうとするが、
「ゴホッ、ゴホッ。私の最強の魔法で終わらせてあげる」
その宣言とともに、風で体を浮かせてナギから一気に離れる。
「セブンス・マイ・マジックスキル・マギステル
始まりの五元素よ。
In principio quinque elementa
我が元に集まれ
Quoniam iniquitatem meam originale
世界の始まり、火の力よ
Hoc erat in principio mundi virtute ignis
ゴホッ、ゲホッ」
呪文の途中、パチュリーは咳をすると、血を吐き出した。
パチュリーは熱くなりすぎた、と自身の失態に気づく。
咳と喀血によって詠唱はキャンセルされてしまった。
この体調では、もう長文詠唱はできない。そう考えたパチュリーはナギに有効な短文呪文がないか記憶を掘り起こす。
「たくっ」
気が付けば、パチュリーの目と鼻の先にナギがいた。
「くっ」
『治癒(クーラ)』
だが、ナギは攻撃をせずに首元に手を当てると、回復魔法を使う。
まさかの行動に、パチュリーも動きが止まる。
「あのなぁ、さすがにそこまでされたら引くわ。自分の限界を把握しろよ、お嬢ちゃん」
自分の限界の把握。基本的なことを頭に血が上り忘れてしまったパチュリーはまさにその通りだと考える、が。
お嬢ちゃんと年下扱いされたことにイラッとして、無詠唱の魔法(サギタ・マギカ)の射手をぶつける。
「いてっ」
「私はお前より年上だ、若造(ガキ)」
「そんなちっせぇ体でよく言うぜ」
「私、１００は超えてるわよ。具体的な年齢は忘れたけど」

「ババアじゃねーか」
無詠唱でもう一度魔法の射手（サギタ・マギカ）を放つパチュリー。ナギはそれを避ける。
が、別のタイミングで飛んできた本2冊がナギの頭に直撃する。
「いてっ」
「探していた本はたぶんそれよ」
そう言って風で体を浮かせる。
壊れた図書館の壁に降り立つパチュリー。
「そういえば、まだ名乗ってなかったわね。私はパチュリー・ノーレッジ。もう会わないことを祈ってるわ」
パチュリーは再び体を浮かしてどこかへと去っていった。

「と、まあ、ちょっと脱色したけど。こんな感じの出会いだったわ。なつかしいわね」
お茶を一口飲むパチュリー。
「ネギ先生。あなたのお父さん、なんなの。先生と全く似てないけど」
「ハハハ。まぁ、エヴァンジェリンさんの夢を見た時もそんな感じだったような」
ナギの話を初めて聞いた霊夢はネギに一応確認をするが、ネギも苦笑いをしながら同意する。
話には聞いていたけど。外見はナギそっくりだけど、中身は母親似ね。
内心笑いながらパチュリーはそう思うと、名案を思い付いたとばかりに提案をする。
「そうね、このままお別れっていうのもつまらないし。ねぇ、ネギ君。夏休みになったら幻想郷に来なさいな」
「え？」
「父親の話、もう少しできるわよ。あと、そうね。ちょっと稽古もつけてあげるわ」

「パチュリーがそんなこと言うなんて珍しいわね」
「あら、親友の息子にできることをしてあげてるだけよ」
ネギがお礼を言って、ネギと霊夢は告白阻止の仕事に戻った。

「さて、次に行くわよ」
そう言ってパチュリーは歩き出す。
「次ってどこよ」
「古い友人の1人に会いに行くの。多分学園のどこかにいるわよ」
「広すぎるわよ」
アリスのツッコミをパチュリーはスルーする。
「ま、適当にめぐりましょ」

激闘　予選会

「よしっ。パトロール終了やっ」
　ＰＭ４時。一度ネギと小太郎の仕事が終了する。
「ああ。君たちは１９時まで休んでいてくれ」
「おつかれさまー」
「龍みー姉ちゃんは？」
「私と霊夢はまだ仕事だよ」
「あまり告白する人を撃たないでくださいねー」
「善処するわ」
　龍宮と霊夢は一緒にその場を離れようとする。
「ああ、そうだ。ネギ先生」
　途中止まってネギに言葉をかける龍宮。
「女のことであまり悩まないことだ。腕は鈍るし仕事にも障る。私からの忠告だ」
「べ、別に悩んでません」
　龍宮の言葉を否定するネギだが、龍宮は笑いながらその場を離れる。
「そんなことないと思うけど？」
　龍宮についていく霊夢がネギたちには聞こえないようにそう呟く。
「そうか？」
「守る者の重要性っていうのを真名は知るべきじゃないかしら」
「ほう。守る者、か。なるほど」
　ま、女の私が言ったところで説得力ないけど。と霊夢はつぶやく。
「むっ。また出たな。行くぞ、霊夢」
「ええ」

「……。あぁ、わかった。だが、本当にやるのか？　まぁ、そういうならやるけどよ。あぁ、わかったぜ」
　魔理沙は電話を切る。そしてすぐ違う人物へと電話をかける。
「よう。今大丈夫か？　面白い話があるんだが」

初日夜。龍宮神社。
超（ちゃお）がまさかの大会を買収。賞金を1千万にはね上げて、さらにルール説明として呪文詠唱の禁止と公言をしてしまう。
「１０００万！　私は出るわよ、真名」
「そうだな。１０００万なら私も出てみるか。なぁ？　楓」
「そうでござるなぁ。ばれない程度の力ならば……」
龍宮神社に訪れていた霊夢が賞金額に目がくらむ。しかも飛び入り参加ＯＫ。珍しくテンションが上がっている。そして近くにいる真名も楓、古（くー）も参加すると言い出した。
「ええ!?　参加するんですか!?」
ネギがまさかの４人の参加表明に驚く。
「あのー？」
「あいあい」
「遊びの大会1千万ならボロイ儲けだ」
「こんな大会は滅多にないアルよ」
「適当にやって1千万とか。楽勝すぎるわ」
完全に優勝した気の龍宮と霊夢。
「こ、コタロー君。これはや、やばくない!?」
「フン。相手にとって不足ないわ。俺は負けん」
鳴滝姉妹に耳を引っ張られて遊ばれている小太郎はやる気を示しているが、
「負けんって。少し冷静になろーよ」
ネギだけは不安な表情。
「古老師（くーろうし）は僕の拳法の師匠だし、コタロー君だって楓さんに負けたんでしょ？　コテンパンにされちゃうよ」
「アホ！　俺かてあれから毎日修行は怠ってへんわ」
さらに、龍宮と勝負したら殺されるのでは、とネギは恐怖する。
「アホ！　お前こそ冷静になれ！　たつみー姉ちゃんは拳銃使いやろ。素手なら勝負はわからんわ！」

「で、でも勝てる気がしないっていうか。どう頑張っても僕とコタロー君、４位５位だよ」
「勝手に負けたことにするな！」
「私が眼中にないのがすごく気に食わないんだけど」
ネギと小太郎が自分のことを全く警戒していないことに不満を述べる霊夢。
さらに、
「ほほう。４位と５位か。なかなかの自信だな。私のことを忘れているんじゃないか？　ん？　ぼーや」
お人形のようなロリータファッションのエヴァンジェリンが現れてそう告げる。
「ま、マスター!?」
涙目で叫ぶネギ。
「約束は覚えているだろうな？」
大会で自分に負ける。もしくは自分と当たる前に負けたら学園祭３日目は大人姿のネギとのデート。
「ハイ！　もちろん覚えております！」
敬礼しながら答えるネギ。明らかにまだ龍宮の影響が若干残っている。
そして、小太郎に無理だと小さな声で言うが、小太郎は魔力封じられていて１０歳の少女と同じ身体能力だからいける、とネギに語る。
「聞こえているぞ？　そこの犬」
１０歳の少女と同じだとなめられた言動にエヴァが語る。
「見てくれだけで判断すると痛い目を見るぞ？　なんならこの場でひき肉にしてやろうか？」
あまりの雰囲気に２人が怖がっていると、
「やあ、楽しそうだね。ネギ君が出るなら僕も出てみようかな」
白スーツ姿のタカミチが来てそんなことを言い出す。
「なんで貴様がこんなものに出るんだ」
しっしっ。っと追い払うような動作をしながらさっさと帰れとばかりにエヴァがタカミチに言う。

「いやー、ちょっと覗きに来ただけなんだけどね。ネギ君が小さいころにある程度力がついたら腕試ししようって約束したから」
さすがにタカミチと戦うのは嫌なネギは大慌てで修業途中だからまだ先でいい、となんとか回避しようとする。
「あれ？　そうかい？」
すると、タカミチがいることに驚いていたアスナが、
「あ、あの高畑先生が出るなら私も出ます！」
なぜか参加するとか言い出す。
現在の参加表明は、龍宮、楓、古、霊夢、エヴァ、タカミチ、アスナ、そしてネギと小太郎。
まさかの人たちの参加にネギが出場を取りやめようかと言い出す。
その表明に小太郎がネギになんで強いやつと戦うのに燃えないんだー、と説教まがいをしだす。
「ああ、ひとつ言い忘れていたコトがあったネ」
そこに、超（ちゃお）の声が響き渡る。
「この大会が形骸化する前、２５年前の最後の大会の優勝者は、学園にフラリと現れた異国の少年。ナギスプリングフィールドと名乗る、当時１０歳の少年だった」
それだけ言い残し、超（ちゃお）は建物の中へと消える。
「そ、そうだったんですか？」
ネギは父親を振るから知るエヴァとタカミチに向かって問うと、タカミチが答えてくれる
「そういえば、そんな話を聞いたような……」
父親の背中を追いかけたいネギは、その言葉で目の色が変わる。
「小太郎君。僕出るよ！」
そう宣言して小太郎が喜ぶ。

まほら武道予選ルール。
２０人1組でバトルロワイヤル形式。勝ち残った2人が明日の決勝トーナメントに参加できる。
グループはＡからＨの８グループ。計１６人が決勝トーナメント

２０人が揃ったところから勝負が始まる。
霊夢はＡ組をくじ引きで引いた。
「さっさと終わらせましょ」
Ａ組の戦闘スペースに入ると、霊夢がちょうど２０人目だったのかすぐに戦闘開始が合図される。
「へへへ。悪いな、お嬢ちゃん。お兄さんが優しく失格にしてやるからな」
直後、霊夢に一番近くにいた金髪のツンツン頭の見た目不良の男が手を伸ばしてくる。
霊夢は冷めた目でその手を避ける。そしてすれ違いざまに右手を男の手を伸ばしている肩を触れる。
男の耳にゴキッ、という音が聞こえ、男の顔が歪む。そして、断末魔のような痛々しい悲鳴を上げる。
「あ、あぁ、てめえ！」
だらりと垂れた腕と逆の手で拳を握って殴ろうとするが、霊夢は軽々と寸前で躱すと、掌底をがら空きの胴体に叩きつける。
それだけで男の体はトラックに跳ねられたかのように吹き飛ばされる。
「……次」
今の光景を見て、二人同時ならば、と襲いかかる2人の男。一人の拳を受け止めながら反対側から来た男を見ずに後ろを蹴って一撃で倒す。同じようにトラックに跳ねられたかのようにステージ外へと吹き飛んでいった。
そして、間髪入れずにもう一人の腕を掴むとまるでハンマー投げのように横に回転。一回転すると手を離す。遠心力によって、男は宙を浮き、なすすべなく重力によって落下した。
「次」
一番近くにいた体格が霊夢の2倍はあるであろう、不運な大男は、瞬きした一瞬で霊夢の姿を見失うと、次の瞬間、掌底のアッパーが男の顎を打ち上げ、意識を刈り取られる。
「次」

ただただ淡々と、足元の小石を蹴飛ばす程度にしか考えず、作業のように男たちを伸(の)していく。
無表情で自身の体格以上の男を軽々と舞い上がらせるその姿に恐怖した男どもが10人前後、自らステージを降りて逃げる。
逃げなかった男どもも霊夢に襲いかかると1秒もかからず地面に倒される。
つまらなそうに、ただただ石ころを蹴飛ばす作業をのように男たちを伸していく霊夢。残りは霊夢を入れて3人に。
「次」
「烈空掌！」
道着姿の男が離れたところで掌底を掬い上げるように振り上げる。すると、気弾が放たれ、霊夢に向かって一直線に飛んでくる。
霊夢はそれをつまらなそうに横に一歩ずれるだけで避ける。
「やるじゃねーか！　だが、これで終わりだぜ」
道着の男の両手が薄く輝く。気を両手にためていることがよくわかる。
「烈空双(ダブルれっくうし)――」
だが、その気を放つことを霊夢は許さない。
気がつけば5メートルは離れていたであろう距離を詰めていて、霊夢のドロップキックが道着の男の顔面に叩きつけられる。
そのままステージ外へと飛ばされる道着の男。死んでいるのではないか、と不安になるが、痙攣していることからどうやら生きてはいるようである。ちなみに、霊夢が手加減してくれたのか、骨等は折れておらず、気絶から復帰した途端、すぐに動けるようになる。しかし、霊夢への恐怖心は植え付けられてしまった。
これでA組は残り2人となったため予選終了。霊夢と、次の標的となるはずだった運の良い男は本戦への出場を獲得した。
「一千万は、私の物よ」

すべての予選が終了、明日の本戦。霊夢の相手は、第三試合、長瀬

楓となった。
「楓か……。ちょっと苦労しそうね」
「霊夢殿でござるか、大変でござるな」

学園祭初日終了

トーナメント表が発表され、対戦相手が格上と決まった面々は勝てそうにないなー、という意味を込めて相手の名前をつぶやいたりしていた。

「よろしく」

「お手柔らかにお願いするでござるよ」

霊夢と楓はそれだけ話すとお互いに離れた。

そして、初日の打ち上げということでコーヒーショップ前に移動。すでに委員長や運動部４人、チアガール３人もいて、それぞれがネギの手助けのおかげで大盛況だったー。とテンション高めに言う。

更に他のクラスメイトも部活の出し物に来てくれてありがとう、とそれぞれが礼を言う。そして、なぜか千雨だけが今日のことは誰にも言うな、と念を押すように小言でネギに迫る。

ただ、ネギには何を言っているのか全くわからない。しかし、状況から何が起きたのかは察しがつく。

「なんの話だろうね、カモくん」

「さあな。だが、これは間違いなく……」

カモとネギが小声でそんな話をしていると、タカミチが声をかけてくる。

「いやー、ネギ君。格闘大会だけじゃなく、生徒たちを回るのも忘れないなんて、さすがだねー、ネギ君。教師の鏡だよ」

ネギは全く身に覚えのないことのため、間違いなく、超（ちゃお）からもらったタイムマシンでこれから行くのだろう、と推測。そして、小太郎とともに残りの予定をこなすために、打ち上げはお預けで、過去に帰ることにした。

そして、時は遡り、ネギは小太郎とともにクラスのお化け屋敷の手伝いから各クラスメイトたちの出し物等を見て回る。

霊夢が龍宮やネギ、小太郎と仕事をしているころ。

「うまいうまい」

魔理沙はたこ焼きを食べている。

一人で学園祭を楽しんでいた。
「んー、魔力が若干濃いな……。なんでだ？」
魔理沙はいつもよりも空気中に存在する魔力量が多いことに首をかしげながらも屋台を食べ歩く。
「あら、魔理沙じゃない」
「え？」
後ろから知った声が聞こえたので振り向くと、そこにいるのは眠たそうな眼をしたパチュリーと疲れた表情をしているアリスがいた。
「パチュリーにアリス!?　なんでここに」
「旧友に会いに来たの」
「その付き添いよ」
「そうだ。パチュリー、どうなってるんだ」
「なにがよ」
魔理沙がパチュリーに詰め寄る。
「ネギの父親の仲間だったって話だ」
「またその話？　さっき霊夢にも聞かれたんだけど」
「そりゃ聞かれるでしょ。私だって寝耳に水だったんだもの」
すごいめんどくさそうな顔をするパチュリー。
「まぁ、話してあげるから、人探すの手伝いなさいよ」
「旧友に会いにって言ってたな。誰だぜ？」
「タカミチ」

「そんなわけで大戦中、ナギ、ネギ君の父親と一緒に行動して戦ってたのよ」
3人は空を飛び、上空から探すことにした。そこでパチュリーはナギたちと共に戦争に参加していたことを話す。
「なんだ。つまり、成り行きだったのか」
「そうね。ちょくちょく偶然会うようになって共闘してたりしてたら気が付いたら一緒に行動してたわ」
「ほんと、何度聞いてもびっくりするわね」

「全くだな。図書室に引きこもっている今の姿からは想像できないぜ」
「うるさいわねぇ。昔の話よ」
学園を見下ろしながらそんな話を続ける魔女3人。
「見つからないわねー」
汗をぬぐいながらパチュリーがそんなこと言う。
「そもそもこんな広いところで1人の人間探すっていうのが無謀なのよ」
「全くだぜ」
魔理沙が携帯を取り出すとどこかに電話をしだす。
「ちょっと聞きたいんだが。高畑先生ってどこにいるかわかるか？」
『私は便利屋じゃないヨ、魔理沙サン』
電話の相手は超（ちゃお）。超（ちゃお）なら何かしらの手段で知っているのではないか、と試しに聞いてみたのである。
『ふーむ。ちょっと待つネ。学園内の監視カメラにアクセスして探してみるヨ。ちなみに、どうして高畑先生を？』
「ああ。ちょっと知り合いが探していてな。さすがに探すのが無謀でな」
『ふむふむ。ハカセ、どうネ。もう見つけた？　さすがネ』
超（ちゃお）はその場所を魔理沙に伝える。
『では、またネ』
「ああ」

「ふぅー」
休憩中なのか、紫煙を吐くタカミチ・T・高畑。
「やれやれ。あの可愛らしい少年だったタカミチ少年が今ではタバコを吸うおじさんか。時の流れとは悲しいものね」
そこに、上空から3人の魔女が下りてくる。
「これはこれは。お久しぶりです。パチュリー」
「ええ。本当に、久しぶりね。タカミチ」
対面する紫の魔法使いと白スーツのおじさん。

「彼が？」
「ああ」
　アリスが魔理沙に小声で聞くと、魔理沙がうなづく。
「おや？　そちらの方は初めましてかな。初めまして、タカミチ・T・高畑です」
「アリス・マーガトロイドよ」
　タカミチがアリスに気づき、挨拶をすると、アリスも笑顔で返す。
「悪いけど、２人で話させてくれない？」
　パチュリーの言葉に魔理沙とアリスは仕方がない、と世界樹前の広場に集合として、魔理沙の案内でアリスは学園祭を回ることをした。
「本当にお久しぶりです、パチュリー」
「ええ」
　２人は近くのベンチに座る。お互いの顔は見ずに、正面を見ている。
「修学旅行の写真を見たわ。姫子ちゃん、ずいぶんといい笑顔をするようになったわね」
「ええ、まぁ」
「これも、あなたとガトウのおかげなのよね。頑張ったわね」
「いえいえ。僕だけの力ではありませんよ。友達の存在が大きかったでしょう」
　タバコを吸うタカミチ。
「……。あの子、タバコ嫌いだったでしょ。それなのに吸うなんてね」
「あの子に吸って、と言われたんです。僕も最初は断っていたんですがね。一度吸ったらやめられず」
「ただのニコチン中毒じゃないのよ」
「……師匠に言われた通り、師匠の記憶を念入りに消したんですが、落ち着くから吸ってくれ、と。タバコから師匠のことを感じ取っていたんでしょうね」
「私の方でももう一度やっておく？」
「いえいえ、大丈夫ですよ。無理やり思い出させようとしたり、オスティアに行くようなことがなければ大丈夫でしょう」

「オスティアに行くようなことがあれば思い出したほうがよさそうね」
「そんなことないほうが良いのですが」
パチュリーは分厚い本を取り出し開き始める。
「彼の生死、いや、行方は？」
「……知るわけがないでしょう」
本から顔を上げずにパチュリーはそんなことを言う。
「……あなたのパクティオーカードを見ればわかるのでは？」
「ちっ。忘れてなかったか」
パチュリーは自身の絵柄が書かれたパクティオーカードを取り出す。それはナギとの契約の証。
「私のカードは生きているからおそらく生きてはいるわよ。どこにいるかまではわからないけど」
「そうですか。ネギ君は正しかったわけだ」
「どういうこと？」
パチュリーの問いに、タカミチはネギの村で合った事件とナギが助けに来た、というネギの話をする。
「ふーん、なるほどね」
パチュリーはそれですべてを理解。裏側にいるであろう存在も。
「まぁ、ネギ君からすればうれしいのかしら。父親が生きていたのだから」
「そうですね」
そこで携帯の音が鳴り響いた。
「はい。はい、わかりました」
タカミチが電話に出ると、そういって通話を切る。
「すみません、仕事ができまして」
「いいわよ。仕事頑張りなさい」
そう言ってタカミチを送るパチュリー。
姿が見えなくなると、パチュリーも立ち上がる。
「ごめんなさいね、タカミチ。さすがに彼の場所までは教える訳にはいかないのよ」

パチュリーはそれだけつぶやくと、その場を離れる。

魔帆良武闘大会　1回戦

午前6時。誰もいない魔帆良武闘大会の会場に足を踏み入れる魔理沙。
「……。ま、私が参加してもな。魔法みたいな攻撃手段しかないしな」
そうつぶやきながらステージの中心に立つ。
「やあやあ。待たせてしまて、すまないネ、マリサさん」
そこに突如として現れる超(ちゃお)。
「昨日は助かたヨ。霊夢さんに大会のこと知らせてくれて」
「そんなことしか頼ませてなかったが、他にやることはないのか？」
「充分ヨ。マリサさんの仕事は、最終日。そこが一番忙しいネ」
「そうか。わかったぜ」
お互いに笑顔。まるで信頼しきったパートナーのようにも感じる。
「なぁ、私が参加したほうが良かったんじゃねーか？」
「マリサさんのは派手すぎるうえに観客を巻き込みかねないからネ。その点、霊夢さんの夢想封印は巻き込みの心配はいらないうえに、派手ネ」
「そう言われるとなにも言えないぜ」
「その代わりちょっと仕事をしてくれないカ？」
その言葉にうんざりするような表情をする魔理沙。
「また雑用か？」
「本命の前の任務というのは雑用なものヨ」
「はいはい。なにすりゃいい？」
超(ちゃお)は魔理沙に仕事内容を告げる
「あいよ、やってくる。あ、そうだ。約束、忘れるなよ」
「もちろん。私がマリサさんに嘘ついたことないヨ」

午前8時。
龍宮神社に集まる出場者に、観客達。
「一千万一千万♪」
珍しく陽気な霊夢。もう優勝賞金は自分のものだ、と言わんばかり

だ。
　出場選手の集まる部屋に行くと、すでに他の参加者は集まっている。
「遅かったな」
「ちょっと多めに用意してたら遅くなったわ」
　龍宮のところに行き、そう軽く挨拶をしていると、超（ちゃお）と朝倉が出てくる。
「ようこそお集まりいただきました。３０分後より第一試合を始めさせていただきます」
　昨日と違うルールは、ステージが１０メートル四方で、そこから出たり倒れたりしたら１０カウントだということ。１５分の時間制限で、１５分たったら観客によるメール投票だという点。その違いだけ聞くとあとの説明を聞き流す霊夢。
　試合が始まると、１戦目は小太郎ＶＳ魔法使いの少女。
　小太郎が掌底で風を起こして少女を吹き飛ばすことで勝利。
　第二試合。
　ローブ姿の男？　クウネルがカウンターの一撃を与えて軽々と勝利。
　そして、第三試合。
　選手引き換え室で呼び出されるのを待つ霊夢。
「えーと、博麗選手。会場へどうぞ」
　朝倉が部屋の外から顔だけ部屋に入れて、霊夢に声をかける。
「ええ」
　椅子に座って目を閉じていた霊夢は目を開けて立ち上がると、部屋を出る。
　池の真ん中に設置されたステージへと向かう途中、楓も現れて横に並んで歩く。
「霊夢殿」
「なに？」
　２人はお互いを見ずに正面を見て話す。
「手加減抜きお願いするでござるよ」

「ま、できたら、ね」
１０メートル四方のステージで対峙する２人。
「それでは、第三試合。博麗選手ＶＳ長瀬選手。試合開始！」
ＭＣの朝倉の宣言と同時に霊夢は楓の後ろに零時間移動で飛ぶ。
霊夢が零時間移動をできると知らない楓だが、目の前から消えたことで一瞬で後ろに回り込んだと判断。後ろに振り向きながらも腕であたりをつけて守ろうとする。
しかし、霊夢はその腕を避けながら楓の体に掌底を叩き込み、トラックに跳ねられたかのように楓の体が吹き飛んで、ステージと観客席の間の湖に沈む。
「……え？」
何が起こったのかわからず、朝倉は呆けた声を上げる。朝倉からすれば開始の合図をした瞬間、楓の体が吹き飛び、霊夢が楓のいたところに立っているのだから。
「な、何が起きたのかわかりませんが、長瀬選手がステージ外へと出たため、カウントを取ります。１、２」
霊夢は油断せず楓が沈んだ箇所の水面を見つめる。修学旅行にともにネギを助けに行ったが、実際に戦っているところを見たわけではない。だが、無事だったこと、相手の句族の子が負けたと言っていることから、少なくとも句族の子以上の実力はあると推定できる。今の一撃で決まるとは思っていない。
「３、４、５」
着々とカウントが進むが水泡すら見えない。
そこで違和感を覚えた。水泡がないということは、その下には誰もいないのではないか。霊夢がその結論に達した直後。
「まさか零時間移動とは、恐れ入ったでござる」
霊夢の後ろから声色が全く変わらない楓の称賛する声が聞こえた。
首を若干後ろに向けて楓が４人に分身して自分の後ろに並んでいるのを見て霊夢は驚愕。
４人の楓は霊夢を取り囲むように四方に移動。掌底を構える。
回避は無理と考えた霊夢は御札を取り出し周囲に結界を張る。

だが、
「忍」
楓が手を開いて結界に触れると、破壊音とともに結界が砕ける。
「はぁ!?」
全く予想できていなかった霊夢は驚きの声を上げる。そこに、４人の楓は疾走からの掌底を叩きつけ、四方へと散る。
疾走による加速された４方向からの同時攻撃、さらにすばやく離れるヒットアンドアウェイ。
直撃だった霊夢はその場で片膝をつく。
「……見誤ったわね」
句族の子供なんてものさしにもならない。
「悪かったわ」
立ち上がってそう告げる霊夢。
「外の世界の人前で使うものじゃないから使わなかったけど、使わせてもらう」
袖から取り出すのは紙の紐で束ねられた大入と書かれた札の束。
紙の紐を手で切り裂くと、御札の束を上へ投げる。御札はヒラヒラと空を舞い、楓はそれを警戒する。
霊夢は左手を開くと、空を舞う札の半分が霊夢の左手に集まり、刀の形へと巻き付いていく。
そして、右手を上に掲げると、ヒラヒラと舞う御札を乱雑に３枚掴む。
「ふむ。真名が言っていたものでござるな」
「余計な情報提供やめてくれない？　商売あがったりだわ」
「相手の情報を集めるのは戦いにおいて基本でござろう？」
「……それもそうね」
霊夢はその場で１回転しつつ、３人の楓に右手に持った御札を投げる。そして、本体の楓の後ろに零時間移動で回り込むと、御札の刀を振るう。
しかし、さきほども後ろに回り込まれたため、楓は見ずに回避。そして後ろに飛んで距離を取ろうとする。

「いやはや。なぜ拙者を本体だと」
「勘よ」
「理不尽すぎるでござるよ」
分身の楓3人が巨大な炎の玉のようなものを携えて霊夢に迫る。
「封魔陣」
赤と青、それぞれ結界が広がり、分身の楓を無理矢理弾かせて離れさせる。
そして、御札の刀を本体めがけて振るうが、楓も腕で防ぐ。
(木刀で殴られるような感覚。さすがに殴られ続けるのは勘弁でござるな)
結界で弾かれた分身がステージを蹴って霊夢に近づく。だが、空中を舞っていた大量の御札がすばやく飛びだして、その身に突き刺さり、分身の楓の姿が消失する。
「札を自在に操る術でござるか」
「そんな大層なもんじゃないわ」
ステージ端へと追い込まれる楓。すると、次は上へと行き、距離を取りに行く。
しかし、霊夢は好都合とばかりに自身の能力で空を飛ぶ。そして、空中では回避できまい、とばかりに大振りの渾身の一撃を与えようとする。
それを楓は、虚空を蹴って回避する。
「っ……。空中ジャンプ!?」
楓はさらに虚空を蹴って一気に霊夢に近づくと、すれ違いざまに一撃を入れてくる。
「……っつ。この」
御札の刀を振るうが間に合わず空振る。
霊夢は空を飛び、一度離れた楓に向かって飛ぶ。楓も虚空を蹴って霊夢に再び接近。
霊夢は楓の左の掌底を札の刀の持っていない右腕で受け止め、楓も霊夢の御札の刀の一振りを右腕で防ぐ。楓はそのまますれ違って再び距離を取ろうとするが、霊夢はそうはいかないとばかりに右手で楓

の左腕を掴む。
「逃さないわよ」
霊夢は楓の基本戦法が分身と速度を用いたヒットアンドアウェイ戦法だと推測。速度でダメージを通常より増やし、反撃を許さぬよう一度離れる。
楓は虚空を蹴ってその速さで霊夢の腕を振り払おうとするが、虚空に足を乗せた瞬間。霊夢が足払いの蹴りでそれを外す。
そしてそのまま掴んでいる腕を引っ張って、ステージへと投げ落とす。
「くっ」
楓は投げ飛ばされながらもなんとか着地。しかし、上空の霊夢を見上げたとき、雨のように降り注ぐ大量の御札が目に映る。
文字通りの大量の御札がステージの足場を砕く威力で降り落ちてくる。紙にしては非常識な威力に観客も表情を青くする。
札が降り注ぐ起点には、霊夢が浮いていて、次から次へと御札を取り出して投げている。そこに、後ろに突如として現れる楓。霊夢の左腕を掴み後ろへと回す。
「避けてるとは思ったけど。全く気づけないわね」
完全に後ろで拘束されるが、霊夢は慌てずそう告げる。
「霊夢殿のほうが理不尽極まりないでござるが」
「私は普通よ。空が飛べる素敵な巫女さんよ」
「自分で言うでござるか」
足元のステージは御札があたったところが粉々となり、木っ端微塵となったステージに使われていた木材が水に浮いている。
「封魔陣」
赤と青の結界が霊夢を起点に互い違いに広がり、楓を弾き飛ばすことで拘束を解除。
「夢想封印！」
7色に輝く光球がいくつも霊夢より放たれ、楓に向かって飛ぶ。それは楓に当たると爆発したような衝撃を楓に与える。
「ぐっ」

あまりの威力に苦しみの声を上げる楓。避けきれずに何発かあたってしまい、まだ原型が残っているステージの端に降り立つ。
「うーむ。まいった。降参でござるよ」
「え？」
たしかにかなりのダメージが入ったが、楓の実力を考えればまだまだできるはずだと考えていた霊夢は驚きの声を上げる。
「ちょっと」
「これ以上続けても不毛は闘いになるだけでござるよ。大怪我しないうちにやめておいたほうが良かろう」
「あんたがそれでいいならいいけどさ。せっかくの一千万なのに」
「ふふ。拙者は別に金などいらぬでござるし。良い経験となった。礼を言うでござるよ」
楓はそう言うとステージから歩いて出ていってしまう。
「えーと、博麗選手の勝利です！」
朝倉がそう宣言すると、霊夢もステージから出ていく。
「ステージ修復のため、少々お待ちください」
木材等を持った屈強な男どもがステージへと走っていく横を歩く霊夢。
ステージへの橋を通り終えて、選手控えの席も通り過ぎようとするが、
「霊夢さん」
そこにネギが声をかけてくる。
「すごいです、長瀬さんに勝つなんて」
「すごくないわよ。楓のやつまだまだできたのに降参したんだから。こっちは不完全燃焼よ」
「でもすごいですね。自在に空飛んでましたし、あれどうやってたんですか？」
「あれは私の能力だから教えられないわよ」
「能力、ですか？」
「ええ。固有のものだから教えたくても教えられない。ネギ先生なら、まず楓がやってた空中飛びのほうを覚えたほうがいいと思うわ

よ」
「いやいや、ネギはまず瞬動術覚えなあかんやろ。楓ねーちゃんが使ってたんはその発展系や」
「瞬動術って楓の使ってた高速移動？」
　小太郎の言葉に気になったのか聞く霊夢。すると、刹那が説明をしてくれた。
「ええ。所謂縮地というものです。これは霊夢さんもご存知ですよね」
「仙人が使う移動術って認識ね」
「間違っていませんね。習熟すれば入りも抜きも気配のない、仙人のような縮地を使うことができます」
「魔力や気で擬似的な再現をしている感じかしらね……」
「ちなみに楓が空中でジャンプして霊夢さんと空中戦繰り広げましたが、あれは虚空瞬動と呼ばれる技に当たります。ちょっと上級者向けとなりますが、空の飛べる霊夢さんには必要ないかもしれませんね」
「そういうのがあるのね……」
　霊夢はたしかに自分には必要がなさそうだと考えるとネギたちに別れを言って一度離れる。
「霊夢」
「あら、真名。次の試合は真名と古だったかしら。楓で疲れてるのに次はあなたか古かなんて、ほんと困るわ」
「ふふふ。悪いが私も一千万はほしい。手加減なんてしないぞ」
「銃使いのあなたが禁止されてるこの試合でどう勝つつもりなのか高みの見物でもしてるわね」
　霊夢はそう言うと能力で体を浮かせる。
　それを見て笑みを浮かべる龍宮。
「あぁ、上から眺めているといい」
　普通に意図しない返しをされ、むっ、とする霊夢。
「ま、頑張んなさい」
「あぁ。ゆっくり休んでくれ。疲れ切ったお前とやるのはつまらないからな」

霊夢はそれには答えず空を飛ぶ。
一度物陰で視線を切ると、塔らしき建物の屋根に降り立つ。
「文字通り高みの見物でもしましょうか」
そう言って、もうほとんど修繕が終わっているステージを見下ろす。

霊夢ＶＳクウネル

４試合目。古ＶＳ龍宮。
５００円玉を指で撃ち、終始古（くー）を圧倒する龍宮。しかし、最後の最後に、古（くー）が強力な一撃を与えて龍宮に勝利。しかし、骨折でリタイアとなる。
「古か……。近接を避けるようにすれば……」
骨折していることを知らない霊夢は古菲とどう戦うか考える。
そして、一人の服が脱げて素っ裸が公開されたりしたが、問題なく一回戦、二回戦も終わる。
「準決勝第一三試合！　博麗選手ＶＳクウネル選手」
霊夢とフードをかぶった男、クウネルがステージ上で対峙する。
「今年は豊作ですね。あなたもなかなかにできますが、一回戦であなたと戦った長瀬さんも素晴らしい才能の持ち主でした」
「……」
フードからわずかに見えるその顔に霊夢は胡散臭さを感じていた。
「ねぇ、降参しない？」
「フフフ。申し訳ありませんが、決勝でするべきことがありまして」
「なるほど。目的はネギ先生ね」
決勝に用があるとすれば、ネギが目的ではないか、とあたりをつける霊夢。言い当てられたことに驚いたのか、意外そうな顔をするクウネル。
「おや。あなたは選手席にはおらず、エヴァンジェリンに私のことは聞いていないはず」
「ふぅん。エヴァンジェリン、ねぇ。ということは、ネギ先生の父親関連かしら」
隠しもしない驚きの表情。
「さすがは博麗の巫女。この少ない会話でよくそこまで」
「私の素性まで知ってるのが気になるわね」
「私の趣味は他者の人生の収集でして。それぐらいならば」
「嫌な趣味ね」

嫌悪感をあらわにする霊夢に微笑んでるように見えるクウネル。
「Ｆｉｇｈｔ！」
朝倉の開始の言葉と同時に両者が行動を即座に開始する。
「申し訳ありませんが、全力でいかせてもらいましょう」
直後、霊夢を中心にステージ上に不可視の押さえつけるかのような力が発生して、ステージにクレーターを作り出す。
「む、意外と脆い」
ステージが破壊されたことによる砂埃があたりを漂う。一瞬にしてクレーターを作り出す不可視の攻撃。選手席にいたネギと古が霊夢の心配をするが、クレーターの中心には、霊夢は無傷で佇んでいた。
「小太郎にとどめの一撃を与えたやつね。予想通り、引力と斥力、ってところかしら」
「ほう。これはうまいですね」
クウネルは本心から称賛する。
「三角錐型の結界で上からの力を受け流すようにするとは。なるほど、これは厄介」
「次は私の番よ。夢想封印！」
霊夢から放たれる様々な色の光弾。クウネルは後ろに下がり回避をしようとするが、そこに霊夢が零時間移動で後ろに回り込む。
夢想封印を目くらましに近づいた霊夢はまず左拳を後ろに移動してきたことに気づいて振り返っている最中のクウネルの脇腹に叩きつける。
さらにクウネルの腕を掴むと、足払いをして体を浮かせる。そして、そのまま迫りくる光弾へと背負投の要領で投げ飛ばす。
投げ飛ばされては回避はできない。夢想封印がクウネルの体にあたり、閃光と炸裂を撒き散らす。
すべての光弾が当たる。だが、クウネルは平然と立ち上がり、その体にダメージのようなものは一切見当たらない、完全なる無傷だった。
それを見た霊夢は半目でクウネルを睨むような顔をする。
「素晴らしい。まさかの零時間移動。さらに移動のために私の注意を

そちらに向ける目くらましかと思いきや本命ですか」
「ねえ、幻影だか分身だか、原理はわからないけど、それはズルくない？」
突然の霊夢の言葉にローブで顔を隠していても動揺しているのがわかるほど大袈裟に驚きをするクウネル。
「むむ。バレましたか」
「いくらなんでも損傷がなさすぎるもの」
楓でも気づいただろうなー。と内心思う霊夢。
「で、本体はどこよ。この手の術式はそこまで遠くにはいけないはずよ」
「意外と遠いですよ。3～4キロほどですが、場所は秘密です♪」
「……さすがにその距離だとカウント10以内には戻ってこれなさそうね。ほんと狡賢い」
「申し訳ありませんね。どうしても決勝に用があるもので」
「……やれやれ。私も一千万ほしいからここで倒せないから降参。なんてできないのよ」
だから、と付け加えて御札を取り出す。
「あらゆるものを遮断する結界でここを取り囲ませてもらうわ。本体と遮断されればその姿維持できないでしょ」
「さすがにそれをさせるわけにはいきません。しょうがない。あなたに負けては意味がありませんので、いささか卑怯ではありますが、これを使いましょう」
ローブの袖から取り出されるは、1枚のカード。
「それ、は」
来たれ！（アデアット）
その言葉とともに光り輝くカードが消えて、大量の本がクウネルを取り囲む。
「っ……」
本型、ならば宮崎のようなサポート系のはず、なにかやらかす前に結界を張る。
と霊夢はまずアーティファクトが重力攻撃のブラフの可能性を考

えて、三角錐型の結界を周囲にはり、次にあらゆるものを遮断する結界を張ろうとする。しかし、あらゆるもの、といえど、空気等の生命に必要なものは通さなくてはならない。その結界の設定にかかる数瞬が、クウネルに本を使わせてしまう余裕を与えてしまった。

左手で宙に浮く本郡から一冊を手に取ると、真ん中あたりを開いて、しおりを挟んで閉じる。そして、その栞を抜き取る。

栞は燃えるように端から消えていくが、次の瞬間、まばゆい光がクウネルを消し去る。直後、霊夢は殴られた感覚とともに自身の身体が宙に浮いている感覚を覚えた。

遅れて結界が砕かれたガラスを割ったような音が鳴り響く。

霊夢自身も何が起きたのかわからない。が、鋭い痛みと先程の音から、殴り飛ばされたのだろう、と考える。

そして、背中を地面を向けた状態で宙に浮く自身の目の前に明らかに追撃狙いのクウネルが現れる。しかし、そのローブの端はズタズタになっていたり、先程とはまるで違う雰囲気を醸し出しているが、霊夢は追撃を防ぐ手を考えていて気づかない。

「神降ろし。愛宕様」

その身に神を宿す。

「炎よ!」

その言葉と同時に霊夢の体が炎に包まれる。

これで追撃は不可能。そのはずだが、今のクウネルにその常識は通用しない。

追撃の拳によって、霊夢の体は湖へと勢いよく落ちる。

「ゴボッ」

あまりの威力に体が湖に入ってから、思い出したかのように、肺の中の空気が水中で吐き出されてしまう。

(神威の炎よ!? それを無視して平然と殴る!?)

拳が止まるものだと思っていた霊夢は驚きを隠せずにいる。だが、ステージ外でカウントを取られることを考えるとすぐに出なければならない。

(愛宕様がだめなら)

別の神を思い出している暇はない。ならば、身近な神でこの状況を利用できそうなもの。
（気は進まないけど。神降ろし。洩矢諏訪子！）
（んー？　なんだいなんだい。早苗と遊んでたのに。わざわざ私を降ろすなんてどうした？）
（力を貸しなさい）
（どうやら強敵と戦ってるようだね。あの霊夢を追い詰めるやつは気になるね。何をしてほしい？）
（この水操作できる？）
（容易いことさ）
霊夢は湖から飛び出すと同時に諏訪子に言って、水の龍を何体も作り、ステージ上に立っているクウネルめがけて水の龍を解き放つ。
（なんだい、格闘大会みたいなもんかい？）
（そうね。場外、ダウン１０カウントで負け。あと呪文詠唱の禁止と銃、刃物の禁止が決まりよ）
（ふむ。見たところ観客は一般人のようだが。呪文詠唱の禁止、と名言するか。なかなかに度胸のある主催者だな）
水の龍がクウネルに襲いかかる。だが、
クウネルが光り輝くと水の龍が何かに撃ち抜かれて、水煙となるほど砕け散る。
「今のは、高畑先生の!?」
水煙でステージ上は観客からは全く見えない。が、まだステージには戻っておらず、湖の上で滞空していた霊夢からはクウネルの姿が見えた。
ローブ姿ではなく、白スーツ姿でポッケに手を入れている渋いおじさんの姿が。
（ほほう。なかなか渋いいい男だねー。でも、私の好みでは、ん？　霊夢？）
「違う。あれは誰」
ローブのフードから若干見えた胡散臭い顔とは全く違う顔。だが、ステージ上にはこの白スーツのおじさんしかいない。

そのおじさんは、左手をポッケから出すと、指で2枚の栞のようなものを挟んでおり、再び輝く。次に現れたのは白と赤の和風の服を着た長い黒髪の女性。服は、肩のところで切り離されて脇の部分が見えてしまっている、霊夢の今着ている巫女服とほぼ同じ形をしていた。
霊夢は見たことはない。だが、感覚でわかった。霖之助から話は聞かされていたから。
「先代、巫女！」
女性は、右手を勢いよく伸ばすと、七色の光球が放たれる。
「夢想封印！」
負けじと霊夢も同じ術を放つことで対抗して、なんとか相殺することに成功する。
「今のは間違いなく本物の……」
女性も先程のおじさんと同じくしおりのようなものを持っていて、再び輝くと、ローブを着て頭からフードをかぶった姿へと変わる。
フードの隙間から見える髪の色は赤色とまたクウネルとは違う人物だと霊夢はわかった。
「まさか、あなたのアーティファクトは」
（霊夢！）
霊夢の体はローブの男の放った右拳から放出された帯電したレーザーのような魔法攻撃によりその身が観客席を超えて遠くへと吹き飛ばされ、再び湖へと落ちる。
（む、無詠唱でこの威力って頭おかしい！）
諏訪子の警告でどうにか結界を張れたが、若干威力を削いだだけでほぼ直撃をくらった霊夢。
（いやー、強いねぇ。変身系の能力かな？）
（……おそらく。過去の人物の再現とか、イタコの口寄せとか、そういう感じだと思う……）
（やっかいだね。どうする？）
（……。まずは会場に戻るわ）
かなり体が痛いがステージへと飛んで戻る霊夢。
ステージ上ではフードを深くかぶったクウネル本人とカウントを

数える朝倉の姿。
「は、博麗選手カウントギリギリで戻ってきました」
「大丈夫ですか？」
「まったく。何よあの威力。無詠唱で使っていいものじゃないでしょ」
「正直心配しましたよ。直撃でしたし」
「ダメージは、減らしたわよ……」
　霊夢はぼやくように言う。
　肩で息をしており、かなり消耗していることが見て取れた。
「あなたの、アーティファクト。人物の再現、ってところ、かしら？」
「その通りです。私のアーティファクト、イノチノシヘンは、特定の人物の身体能力と、外見的特徴の再生です」
（ほほう。面白い魔道具だね）
「しかし、この能力は自分より優れた人物の再生はわずか数分しかできません」
「どうやらあまり使い勝手は良くなさそうね」
「ええ。大抵の人間は私より弱いですから再生する意味もありませんしね」
（おー、言い切るかい）
「私の周囲にある魔導書。一冊につき一人の半生が記されています」
「なるほど。そこに記された人物の能力を使えるようになると」
（そうなると自然と顔見知りぐらいの能力しか使えなさそう？　いや、記す条件があるからそれが敵にも適用できれば面白い魔道具になるよ）
「そして、私のアーティファクトのもう一つの効果。この『半生の書』を作成した時点での特定人物の『全人格の完全再生』」
（なんだって!?）
「もっとも、再生時間はわずか１０分。魔導書も魔力を失ってただの『人生録』となってしまうため、これまた使えない能力です。まぁ、使えるとしたら、『動く遺言』として、といったところでしょうか」
「なるほどね。ネギ先生に、父親の遺言でも聞かせよう。と」

「はい」
「……」
　目を閉じて何か思考を始める霊夢。
「まぁ、ネギ先生のためなら協力してあげることも、やぶさかではないわ」
（おぉ!?　霊夢がそこまで言うとは。そのネギ先生と言う人に惚れたか？）
（何をバカなこと言ってるのよ）
　諏訪子の言葉にため息をつく霊夢。
「でも」
　そこで一度区切ってお札を取り出す。
「悪いけど、試合外でやって頂戴？　一千万がほしいのよ、私は」
「では、降参してくれたら一千万はあなたに譲りましょう」
「え？」
　クウネルの言葉に顔を明るくする霊夢。しかし、すぐに表情を戻す。
「本当に言ってるの？」
「私は賞金を狙っているわけではありませんから」
　訝しげにクウネルを見る霊夢。
「信用していいのよね？」
「神と名誉に誓って」
　笑顔で言うクウネルにあまり信用できそうにない、と霊夢は考えるが、
「わかった。今回は信用するわ」
（いいのかい？）
（悪かったわね。呼んでおいて）
（いいよいいよ。酒のつまみになる。また困ったら呼びな）
　神卸を解除する霊夢。そして、
「朝倉。降参するわ」
「え？」
　水煙が晴れた直後、そんなことを言う霊夢に朝倉が一度何を言われ

たのかわからないような表情をする。
「あ、クウネル選手の勝利ーーー！」
思い出したかのように高らかに宣言をする朝倉。
「じゃ、約束忘れないでね」
「ええ」